

保存用

10

岩井山古墳群

付. 御津町埋蔵文化財一覽

1976年5月

岡山県御津町教育委員会

御津町教育委員会

岩井山古墳群

付．御津町埋藏文化財一覽

1976年5月

岡山県御津町教育委員会

はじめに

北から南へ貫流する旭川と、その支流宇甘川・新庄川・三谷川などの流域に広がる御津町は、豊かで美しい自然に恵まれた地であります。文化は流れのほとりに芽ばえるとは、歴史の証明するところではあります。当町宇垣の原遺跡は、遠い昔の旭川の自然堤防上に残された私たちの祖先、縄文時代晩期から弥生時代にかけての遺跡として、すでに多くの人々や研究者などから注目されているものでもあります。

さて、文化財保護法が制定されてより今日まですでに20数年を経て、文化財保護の思想もようやく一般に定着してまいりましたが、近年の急激かつ大規模な開発事業によって、幾多の文化遺産が消滅していく実状はまことに残念なことであります。文化財の保護と開発との調和が強く叫ばれる由縁であります。今回、当御津町においても、御津住宅団地開発事業の犠牲となって、岩井山古墳群の一部を発掘調査のやむなきにいたりしました。

開発事業者の計画発表以来、御津町教育委員会では、岡山県教育委員会文化課の指導と協力をいただき、事業担当課の御津町企業課をはじめ、事業主体者や地区代表者などの諸関係者と、当該事業地内の埋蔵文化財の保存協議を重ねてまいりました。20数か所をかぞえる埋蔵文化財包蔵地のうち、発掘調査による「記録保存遺跡」をできるだけ最少限にとどめ、緑地とか公園内にとりいれるなどして、現状保存していただくよう極力努力をしてまいりましたが、最終的には本報告書に記載のとおり、第2号墳など6基の古墳の発掘調査を余儀なくされたのであります。

不幸にして発掘調査の対象となりました古墳につきましては、できるだけ精密な調査とより正確な記録の作成を期して、岡山県教育委員会文化課の専門担当者ならびに専門研究者に、発掘調査を委嘱して実施いたしました。また一方において今回の発掘調査は、当御津町におきましてははじめての学術的な調査でもありました。したがってその調査の成果は、郷土の古代史解明のために、貴重な資料となるものと考えられます。願くば本書が今後の文化財保護と活用のための一助となるよう祈る次第であります。

終りになりましたが、本発掘調査にあたり献身的なご協力を賜った、山陽町文化財保護委員長則武直直、岡山県教育委員会文化課葛原克人・栗野克己・下沢公明、山陽町教育委員会神原英朗・太田耕一・国安敏樹の各氏と、地元協力者の方々に対して厚く御礼を申し上げます。

昭和51年5月

御津町地埋蔵文化財調査委員会委員長

御津町教育委員会教育長職務代理

河田 頌 長

例 言

1. 本書は、岡山県御津郡御津町伊田地区の岩井山丘陵に計画された、山一建設株式会社の御津住宅団地開発事業の施行にともなう、用地内所在の岩井山古墳群6基の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、御津町教育委員会の委嘱によって構成された、御津団地文化財調査委員会が、昭和50年5月15日から同年7月15日までをかけて実施した。
3. 発掘調査ならびに報告書作成に要する経費は、すべて事業主体者である山一建設株式会社の負担によるものである。
4. 本書の刊行の機会に、岡山県埋蔵文化財分布調査5か年計画の一環として、昭和49年度御津町教育委員会が、県内研究者の協力を得て実施した、町内埋蔵文化財分布調査の成果も合せて集録した。
5. 発掘調査の諸記録は調査参加者全員の協力のもとで作成したが、主として実測を太田耕一・国安敏樹、写真撮影を国安敏樹・則武忠直、調査日誌等諸記録を則武忠直・内田誠也が中心となって担当した。
6. 調査後の整理事業は則武忠直が中心となってあたり、作図は太田耕一・国安敏樹が担当した。なお出土遺物の整理および実測について、仏教大学生森下大輔君の助力を得た。
7. 本書の執筆は、調査員である則武忠直、太田耕一、国安敏樹、神原英朗の討議をもとに、各章ごとに分担して行ない、その繕修および編集は神原が担当した。各執筆分担者は目次に記名した。
8. 岩井山古墳群出土の人骨の鑑定については、京都大学理学部自然人類学研究室の池田次郎教授にお願いし、石棺石材については、岡山県立福渡高等学校教諭行森政知氏の御教示をいただいた。また既に崩落していた第4号墳については、岡山県教育委員会文化課から、崩落時の応急調査資料の提供をいただいた。
9. 本報告書作成に当って、葛原克人、栗野克己、板津謙六、江坂進氏の御教示、御協力をいただいた。
10. 本報告書使用の標高はすべて海拔高、方位はすべて磁北である。

目 次

I	調査に至るまでの経過	(神原英朗)	1
II	地理的歴史的環境	(神原英朗)	5
III	岩井山古墳群発掘調査報告		
第 1 章	岩井山古墳群調査概要	(則武忠直・神原英朗)	19
第 2 章	岩井山古墳群第 2 号墳	(則武忠直)	28
第 3 章	岩井山古墳群第 3 号墳	(則武忠直)	37
第 4 章	岩井山古墳群第 4 号墳	(神原英朗)	42
第 5 章	岩井山古墳群第 6 号墳	(則武忠直)	48
第 6 章	岩井山古墳群第 7 号墳	(則武忠直)	53
第 7 章	岩井山古墳群第 8 号墳	(国安敏樹)	62
第 8 章	岩井山古墳群第 9、14、15号墳概要	(太田耕一)	70
第 9 章	岩井山古墳群出土の人骨について	(池田次郎)	73
第 10 章	岩井山古墳群総括	(神原英朗)	77
IV	弥生時代竪穴式住居址	(則武忠直)	80

挿 図 目 次

第 1 図	御津町位置図(作成神原・製図太田)	5
第 2 図	岩井山山麓部出土の縄文式土器片(実測太田・撮影神原)	6
第 3 図	伊田大谷遺跡出土の弥生式土器片(実測太田・製図太田)	7
第 4 図	岩井山第12・13号墳出土の須恵器(実測太田, 国安・製図太田)	9
第 5 図	岩井山第12号墳出土の金環(実測神原・製図太田)	9
第 6 図	御津町遺跡分布図(地形図御津町・作成神原)	17
第 7 図	岩井山古墳群分布図(地形図御津町・作成神原・製図太田)	21
第 8 図	岩井山第 2・3号墳周辺地形図(測量太田, 国安・製図太田)	22
第 9 図	岩井山第 4~9号墳周辺地形図(測量太田, 国安・製図太田)	23
第 10 図	岩井山第 2・3号墳調査後外形図(測量国安・製図太田)	28
第 11 図	岩井山第 2・3号墳調査前外形図(測量国安, 太田・製図太田)	29
第 12 図	岩井山第 2・3号墳墳丘断面図(実測太田・製図太田)	30
第 13 図	第 2号墳第 1 主体実測図(実測太田・製図太田)	31
第 14 図	第 2号墳第 2 主体実測図(1)(実測国安・製図太田)	32
第 15 図	第 2号墳第 2 主体実測図(2)(実測国安・製図太田)	33
第 16 図	第 2号墳第 3 主体実測図(実測国安・製図太田)	34

第 17 図	第 2 号墳第 4 主体実測図(実測太田・製図太田)……………	35
第 18 図	第 2 号墳第 4 主体周辺出土土師器(実測森下・製図森下)……………	37
第 19 図	第 3 号墳第 1 主体実測図(1)(実測太田・製図太田)……………	39
第 20 図	第 3 号墳第 1 主体実測図(2)(実測太田・製図太田)……………	40
第 21 図	第 3 号墳出土鉄器実測図(実測森下・製図国安)……………	41
第 22 図	第 4 号墳調査前外形状況図(実測太田・製図太田)……………	43
第 23 図	第 4 号墳調査後地形図(測量太田・製図太田)……………	44
第 24 図	第 4 号墳第 2 主体実測図(実測葛原克人他・製図国安)……………	46
第 25 図	第 4 号墳第 2 主体出土の鉄剣(実測国安・製図国安)……………	47
第 26 図	第 6 号墳調査前外形図(測量太田・製図太田)……………	48
第 27 図	第 6・7 号墳調査後地形図(測量国安・製図国安)……………	49
第 28 図	第 6 号墳第 1 主体実測図(1)(実測太田・製図国安)……………	50
第 29 図	第 6 号墳第 1 主体実測図(2)(実測太田・製図国安)……………	51
第 30 図	第 6 号墳第 1 主体出土の鉄器(実測森下・製図太田)……………	52
第 31 図	第 7 号墳調査前外形図(測量国安, 太田・製図太田)……………	54
第 32 図	第 7 号墳第 1 主体実測図(実測太田・製図国安)……………	55
第 33 図	第 7 号墳第 2 主体実測図(1)(実測太田・製図太田)……………	56
第 34 図	第 7 号墳第 2 主体実測図(2)(実測太田・製図太田)……………	57
第 35 図	第 7 号墳第 3 主体実測図(1)(実測太田・製図太田)……………	58
第 36 図	第 7 号墳第 3 主体実測図(2)(実測太田・製図太田)……………	59
第 37 図	第 7 号墳第 4 主体実測図(実測太田・製図太田)……………	61
第 38 図	第 8 号墳調査前外形図(測量太田・製図太田)……………	63
第 39 図	第 8 号墳調査後地形図(測量国安・製図国安)……………	64
第 40 図	第 8 号墳第 1 主体実測図(1)(実測国安・製図国安)……………	65
第 41 図	第 8 号墳第 1 主体実測図(2)(実測国安・製図国安)……………	66
第 42 図	第 8 号墳第 2 主体実測図(実測国安・製図国安)……………	68
第 43 図	第 8 号墳第 1・2 主体墓竈実測図(実測国安・製図国安)……………	69
第 44 図	第 9 号墳外形図(測量太田・製図太田)……………	71
第 45 図	第 14・15 号墳外形図(測量太田・製図太田)……………	72
第 46 図	岩井山第 1 号住居址実測図(実測太田・製図太田)……………	81
第 47 図	第 1 号住居址出土の土器(実測森下・製図森下)……………	82
第 48 図	第 1 号住居址出土の石器(実測森下・製図国安)……………	82
第 49 図	岩井山第 2 号住居址実測図(実測国安, 則武・製図太田)……………	83
第 50 図	岩井山第 2 号住居址断面図(実測国安・製図太田)……………	84
第 51 図	第 2 号住居址出土の遺物(実測森下・製図森下)……………	85

付 表 目 次

第 1 表	御津町埋蔵文化財一覽……………	10
第 2 表	岩井山古墳群第 2～9 号墳一覽……………	78

図 版 目 次

		本文対照頁
図版 1	1. 岩井山古墳群所在丘陵遠影……………	20
	2. 岩井山古墳群第 2 号墳～第 4 号墳所在地遠影……………	20
	3. 岩井山古墳群第 4 号墳～第 9 号墳所在地遠影……………	20
図版 2	1. 岩井山古墳群第 2・3 号墳調査前外觀……………	28・38
	2. 岩井山古墳群第 2・3 号墳調査前外觀……………	28・38
図版 3	1. 第 2 号墳調査前外觀……………	30
	2. 第 2 号墳内部主体出土状況……………	30
図版 4	1. 第 2 号墳第 1・2 主体出土状況……………	30・32
	2. 第 2 号墳第 1・2 主体棺身部出土状況……………	30・32
図版 5	1. 第 2 号墳第 1 主体蓋石出土状況……………	30
	2. 第 2 号墳第 1 主体棺身部出土状況……………	30
	3. 第 2 号墳第 2 主体蓋石出土状況……………	32
	4. 第 2 号墳第 2 主体棺身部出土状況……………	32
図版 6	1. 第 2 号墳第 3 主体蓋石出土状況……………	35
	2. 第 2 号墳第 3 主体墓壇出土状況……………	35
	3. 第 2 号墳第 4 主体出土状況……………	36
	4. 第 2 号墳第 4 主体蓋石出土状況……………	36
	5. 第 2 号墳第 4 主体墓壇出土状況……………	36
	6. 第 2 号墳第 4 主体周辺出土土師器……………	37
図版 7	1. 第 3 号墳調査前外觀……………	38
	2. 第 3 号墳内部主体出土状況……………	38
図版 8	1. 第 3 号墳中心主体蓋石出土状況……………	39
	2. 第 3 号墳中心主体棺身部出土状況……………	39
	3. 第 3 号墳中心主体棺外遺物出土状況……………	41
図版 9	1. 第 4 号墳外觀……………	42
	2. 第 4 号墳調査後外觀……………	43
図版 10	1. 第 6 号墳調査前外觀……………	49
	2. 第 6～8 号墳調査後外觀……………	49
図版 11	1. 第 6 号墳中心主体蓋石出土状況……………	50
	2. 第 6 号墳中心主体……………	50
	3. 第 6 号墳中心主体……………	50
	4. 第 6 号墳中心主体直刀出土状況……………	52
図版 12	1. 第 7 号墳調査前外觀……………	53
	2. 第 7 号墳内部主体配置状況……………	54

図版 13	1.	第7号墳各主体棺身部出土状況	54
	2.	第7号墳各主体墓竈出土状況	54
図版 14	1.	第7号墳第1主体出土状況	56
	2.	第7号墳第1主体墓石目張り石材除去後出土状況	56
	3.	第7号墳第1主体棺身部墓竈出土状況	56
図版 15	1.	第7号墳第2主体出土状況	56
	2.	第7号墳第2主体棺身部出土状況	56
	3.	第7号墳第3主体出土状況	60
	4.	第7号墳第3主体棺身部出土状況	60
図版 16	1.	第7号墳第4主体墓石出土状況	60
	2.	第7号墳第4主体墓竈および棺身部出土状況	60
図版 17	1.	第8号墳調査前外観	62
	2.	第8号墳調査後外観	64
	3.	第8号墳内部主体出土状況	64
図版 18	1.	第8号墳第1主体墓石出土状況	64
	2.	第1主体遺体出土状況	65
	3.	第1主体棺身部出土状況	65
図版 19	1.	第1主体遺体出土状況	67
	2.	第1主体頭骨出土状況	67
	3.	第8号墳第2主体墓石出土状況	67
	4.	第8号墳第2主体棺身部出土状況	67
図版 20	1.	第2号墳第4主体出土土師器	37
	2.	第3号墳第1主体・第6号墳周濠・第8号墳西南墳外遊離鉄器	41
	3.	第4号墳第2主体出土鉄剣	47
	4.	第6号墳第1主体出土直刀	52
図版 21	1.	岩井山第1号住居址出土状況	80
	2.	岩井山第2号住居址出土状況	83
図版 22	1.	第1号住居址床面土器片出土状況	80
	2.	第2号住居址床面土器片出土状況	83
	3.	第1号住居址出土の土器	82
	4.	第1号住居址出土の石器	82
	5.	第2号住居址出土の土器片	85
図版 23	1.	第12号墳横穴式石室遺存状況	9・22
	2.	第12号墳出土土師貫龍甲形陶棺	9・22
	3.	第13号墳出土須恵器・第12号墳出土金環	9・22
図版 24	1.	岩井山南麓部出土繩文式土器片	6
	2.	伊田大谷遺跡出土弥生式土器片	8
	3.	伊田大谷遺跡出土石器	8

I. 調査に至るまでの経過

岡山県御津郡御津町の、伊田および矢原の両地区にまたがる岩井山丘陵における、住宅団地の開発計画が地元の人々の間で話題になりはじめたのは、昭和48年頭初めころからであった。この開発計画は、山一建設株式会社（本社大阪府南区谷町9丁目10）によって進められ、昭和48年12月7日付で、御津団地開発事業として、当岩井山丘陵のほぼ全域にわたる約42ヘクタールの、宅地造成計画の事業認可申請が岡山県に提出され、本格的な始動を開始した。

住宅団地開発事業用地となった岩井山丘陵における埋蔵文化財の所在については、こうした開発事業を計画する場合の一つのよりどころとなる、昭和41年岡山県教育委員会発行の「岡山県遺跡地図」、昭和42年文化財保護委員会発行の「全国遺跡地図（岡山県）」には、残念ながら1遺跡も記載されていなかった。しかし当丘陵地内においては、今までにも御津町文化財保護委員長板津謙六氏等の踏査により、約20基の古墳の存在や、土器片等の散布が知られており、昭和37年3月には畑地開墾により、横穴式石室を内部主体とする円墳2基が破壊され、陶棺をはじめ須恵器等多数の出土が伝えられる。また昭和48年1月には採土工事によって、丘陵尾根支脈突端部に立地する方墳が崩落して、その箱式石棺が比高約35mの崖面に露呈するなどの事件のあった地域でもある。したがって、地元の人々や考古学関係者の間では、当該地は御津町指定史跡の前方後円墳八つ塚古墳の所在地にも近く、遺跡の多い地域として注目されていた丘陵である。

御津団地開発事業計画を察知した御津町教育委員会は、岡山県教育委員会文化課の指導と協力を得て、事業主体者である山一建設株式会社、開発事業担当課である御津町企業課等の、関係機関と当該事業地内の埋蔵文化財保存について協議を開始し、昭和48年12月17日付で、岡山県教育委員会、御津町教育委員会、山一建設株式会社の三者による下記の覚書を取りかわした。

住宅団地開発事業施行に伴う文化財保護に関する覚書

岡山県教育委員会（以下「甲」という。）と御津町教育委員会（以下「乙」という。）と山一建設株式会社（以下「丙」という。）とは、当該事業施行地区内の文化財保護について、文化財保護法の精神にのっとり、次のとおり覚書を締結し、これを誠実に実行するものとする。

1. 事業の概要

丙が実施する事業の概要は次のとおりとする。

- (1) 事業地 御津郡御津町大字伊田及矢原
- (2) 事業名 御津団地
- (3) 事業計画面積 423,000㎡
- (4) 事業期間 昭和 年 月 日から昭和 年 月 日まで

2. 文化財保護の措置

- (1) 丙は、前項の事業の実施にあたっては、文化財の破壊を防止するための最善の努力を講ずるものとし、原則として文化財は現状で保存するものとする。
- (2) 個々の文化財の具体的保存措置については、甲、乙と丙が別途協議して決定するものとする。
3. 文化財の確認
乙は甲と協議して文化財の確認調査を実施し、その位置および範囲等を丙に明示するものとする。文化財の確認調査の実施にあたっては、丙は工事施行前に立木、雑草等の伐採を行うものとする。
4. 工事施行中の新発見
工事施行中、またはその他の理由により新発見された文化財については、丙はその現状を変更することなく、2項に準じて措置するものとする。
5. 発掘調査
(1) 止むを得ず発掘調査が必要とされる文化財については、甲の指導により乙または丙が専門研究者に委託して実施するものとする。
(2) 発掘調査および調査後の学術報告書作成に要する経費は、丙が負担するものとする。
6. 報告および調査
甲および乙は、丙が行う事業の実施状況については、丙に対して必要な報告を求め、かつ、文化財担当職員に立入調査を行なわせることができるものとする。
7. その他

この覚書に定めない事項、またはこの覚書に定める事項について疑義が生じたときは、甲、乙、および丙が協議のうえ定める。

以上覚書の証として、おのおの記名押印のうえ、その1通を保有するものとする。

昭和48年12月17日

甲 岡山県教育委員会教育長 小野 啓 三〔印〕
乙 御津町教育委員会教育長職務代理 河田 頼 長〔印〕
丙 山一建設株式会社代表取締役 山 地 一 九〔印〕

上記の覚書にもとづく調査と遺跡の保護保存を行なうため、御津町教育委員会は、昭和49年5月10日、御津団地埋蔵文化財調査委員会を委嘱し組織した。調査委員会の構成は次のとおりである。

御津団地埋蔵文化財調査委員会

委員長 河田 頼長 御津町教育委員会教育次長
副委員長 西口 秀俊 岡山県教育庁文化課参事
委員 葛原 克人 岡山県教育庁文化課文化財保護主事
" 栗野 克己 同 上
" 山磨 康平 同 上

”	神原 英朗	山陽町教育委員会指導主事
”	則武 忠直	山陽町文化財保護委員長
”	板津 謙六	御津町文化財保護委員長
”	林 胖	御津町文化財保護委員
”	中西 博	同 上
”	村上猪勢男	同 上
”	海野 節夫	同 上
”	長光 次男	同 上
”	葛原 正浩	同 上
”	立古 芳明	御津団地地元開発委員長
”	白髭敏太郎	同 副委員長
事務局長	浅井 博史	御津町教育委員会主幹
事務局員	石原 洋昭	御津町企画課長補佐
”	内田 誠也	御津町教育委員会社会教育主事
”	溝口 尚士	御津町企画課企画係長
監 事	光吉 勝彦	岡山県教育庁文化課文化財主任
”	二宮 基泰	御津町秘書課長
”	岩槻 久夫	御津町企画課長

御津団地埋蔵文化財調査委員会は、用地内の遺跡の所在をより具体的に把握するため、まず分布調査を実施して、その保存を事業主体者と協議することにした。しかし御津町教育委員会には専門職員が不在のため、岡山県教育委員会に要請、昭和49年5月22日と23日の両日、県教育委員会文化財保護主事高原克人、同枝川陽、同伊藤晃、同下沢公明氏の来援を得て、分布調査を実施した。その結果、当該地には一部用地外周辺部および壊滅古墳も含めて、岩井山古墳群22基と土器片散布地1か所の計23遺跡が所在することが判明した（P21—第7図）。

御津町教育委員会はこの分布調査の結果をもとに、岡山県教育委員会の指導と協力をいただき、事業主体者等関係機関と保存協議を重ねた。その結果、同一丘陵尾根支脈上に直列立地する岩井山古墳群第1号墳から第8号墳までの8基のうち、すでに崩落壊滅している第4号墳および第5号墳を除く6基の古墳については、住宅団地造成計画、設計変更等による現状保存が技術的に困難であるとの見地から、止むを得ず発掘調査を実施することとし、その他第1期工区の既確認遺跡については現状保存して御津町へ寄附をすることになり、昭和49年6月15日付で、前記覚書にもとづく同意事項を下記のとおりとりかわした。

住宅団地開発事業施行に伴う文化財保護に関する覚書に基づく同意事項

昭和48年12月17日、岡山県教育委員会教育長、御津町教育委員会教育長、山一建設株式会社代表取締役との間にかわされた住宅団地開発事業施行に伴う文化財保護に関する覚書（以下「覚書」という。）について協議した結果、下記の事項について同意した。

記

1. 御津団地開発事業に関する第1期工事分については、綿密な遺跡の分布調査にもとづき、すでに確認された遺跡については、御津町へ寄附して現状保存すること。
2. 同上工事に伴い新たに遺跡が発見された場合は「覚書」4に従い甲、乙、丙で協議すること。
3. 第2期工事分については、別紙図面のとおり施工し、第9号古墳は現状保存し、他の古墳および遺跡については、「覚書」5(1)により発掘調査のうえ、記録保存するものとする。
4. 発掘調査の経費は「覚書」5(2)により原因者(丙)の全額負担とし、その額は丙と調査委員会との協議により決定するものとする。
5. 調査期間をはじめ調査方針については、調査委員会の見解に従い措置するものとする。
6. 「覚書」、覚書にもとづく同意事項の条項に疑義が生じたとき、または定めない事項については、関係者が協議して措置するものとする。

昭和49年6月15日

甲 岡山県教育委員会教育長 小野 啓 三(印)
乙 御津町教育委員会教育長職務代理 河 田 頼 長(印)
丙 山一建設株式会社代表取締役 山 地 一 九(印)

岩井山古墳群第1・2・3・6・7・8号墳6基の発掘調査を実施することになった、御津団地埋蔵文化財調査委員会では、発掘調査担当者として、調査委員の中から葛原克人、栗野克己、神原英朗、則武忠直の4名を選出、昭和50年4月15日付で、埋蔵文化財発掘届を提出した。同年4月30日、調査委員会を開催、御津団地文化財発掘調査実施細則ならびに発掘調査実施計画等を審議決定し、同年5月7日から同年7月15日までをかけて、発掘調査を実施した。発掘調査の現地における調査経過は、別掲Ⅲ第1章に調査口誌抄を掲載しているので参照願いたい。

発掘調査担当者のうち葛原、栗野、神原の3名は、勤務の関係もあって実際の発掘調査にはあまり参加できなかった。土曜日の午後とか日曜日、また御津町教育委員会より派遣要請をいただいた時に応援に向かうのと、神原の通勤途上に所在することから、朝夕立ち寄りて打ち合せに参加する程度のことしかできなかった。したがって現実の発掘調査は則武が中心となり、御津町教育委員会の要請により山陽町教育委員会の了解のもとに、遺跡の実測等に米援を得た山陽町教育委員会埋蔵文化財調査事務所主事、国安敏樹、太田耕一両君の助力に負うところが大きかった。

直接作業員として参加いただいた人達をはじめ地元の方々はもとより、町当局や事業主体者等関係機関からも多大の理解と協力をいただいた。調査委員会なかでも板津謙六、内田誠也の両氏には献身的な協力をいただき、陰に陽に大きな支えとなっていた。記して厚く感謝の意を表したい。

なお、発掘調査開始前の昭和49年12月25日と昭和50年1月19日には、御津町埋蔵文化財分布調査の一環として、岡山県遺跡保護調査団の角田茂・水内昌康・小野昭氏が当地を踏査され、遺跡保存の要望と助言をいただき、昭和50年1月13日には、岡山県遺跡保護調査団(委員長近藤義郎氏)から御津町教育長宛に、「御津団地開発事業地内の遺跡保存についての要望書」を文書でいただいた。こうした研究者の方々の要望と助言は、事業主体者等と埋蔵文化財の保存問題の協議を進めていくうえで、大きな支えとなった。十分御期待にそえなかったことを反省するとともに、記して深く謝意を表したい。

(神原英朗)

Ⅱ 地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

今回発掘調査を実施した岩井山古墳群の所在する岡山県御津郡御津町は、岡山市の北に隣接する面積約120km²、人口約11,500人の農山村である（図1）。昭和28年4月1日、旧御津郡牧山村、宇垣村、金川町、宇甘東村、宇甘西村、赤磐郡五城村および葛城村の7か町村が、牧山村高野字高野尻を除いて町村合併、御津町として発足し今日におよんでいる。岩井山古墳群は御津町東部の旧五城村伊田に所在する。

御津町は、中国山脈に源を発して町内東部を、北から南へ蛇行貫流する旭川の中流域にあたる、吉備高原地帯の南縁部に位置するため、一見して山地と河谷の地形を呈している（図6）。すなわち、旭川の支流宇甘川が町の中央部を西から東に流れて、旭川本流に合流する金川を中心に、旭川宇甘川の両河川と、新庄川、三谷川などの小支流によって形成された、規模の小さい沖積地や河岸段丘および扇状地などの平地部と、それをとりかこむ標高200mないし400m級の山々によって構成されている。したがって町内の地目別面積比率は山林が73.9%と最も高く、耕地10.9%、宅地1.0%、その他14.2%となっている。

地勢的には、町内西部はかなり若い輪廻の急峻な山容の、高原地形を呈しているのに対して、東部は比較的風化浸蝕のすすみ易い花崗岩地質とあいまって、かなり従順な丘陵地形を呈している。概して平地部は大部分が耕地化されて、ほとんどが水田として利用され、高原上はかなりの平坦面が存在し、開畑されてたばこや果樹園として活用されている。

このように当町は、高原上と谷底の平地部との二つの生活舞台があり、それぞれに独自の特徴ある生活を有しているのである。また当町は、その周囲を高い山々によってとりかこまれ、町の内部は逆に比較的低下な山地や丘陵、さらに沖積平地からなっているために



第1図 御津町位置図

ちようど全体が大きな盆地のような地形となっており、一つのまとまりをもった単位地域を構成するがこの地に入出りするには、狭隘な谷筋を通るか2~3の山越えに限られる。辛番峠や伊田越はその代表的な通路である。

岩井山古墳群の立地する岩井山丘陵は、東から西へ蛇行して旭川本流に注ぐ小支流、新庄川流域の小沖積地を北から見降す位置にある。新庄川は水量および川幅ともに小規模な小川であるが、旭川の合流点である金川から、赤磐富士と猿野山の狭谷を過ぎると急に眺望が開け、伊田の青々とした水田を見ることが出来る。当地にも扇状地はみられるが段丘は判然としない。伊田を過ぎて北上すると、さらに同規模の新庄・平岡西の小平地2か所が連らなって開け、その上流は山地となっている。このあたりの山地はすべて花崗岩質からなり、そのため風化浸蝕がすみやかで、山といった感じはすでになく、丘陵状の小高い山地が各沖積平地の縁辺に連らなっている。岩井山丘陵もそうした山地の一つである。またこのあたりの谷底平地は、その出入り口がかなり狭くなっていて、平野面と山地との接線は凹凸に富み、それぞれがまとまりをもった小集落を営んでいるのである。

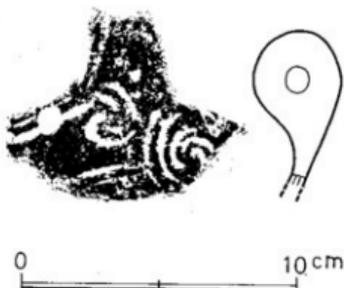
(参考文献)

1. 石田寛他共編「岡山県の地形図」光文堂書院、昭和38年
2. 岡山大学教育学部社会科学教室地域研究会「在町の近代化—不受不施派の岡山県御津町—」昭和43年

2. 歴史的環境

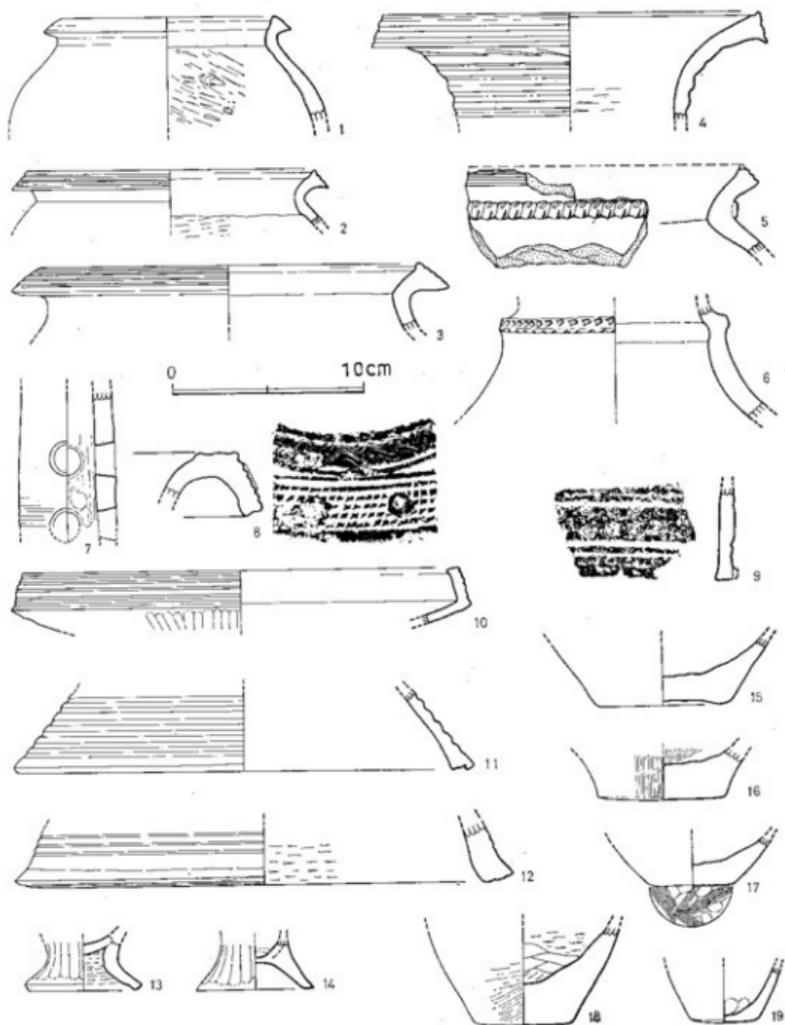
御津町内における遺跡数は現在確認できる場所では94遺跡である。これは岡山県内の埋蔵文化財5か年計画の一環として、御津町教育委員会が県内研究者の協力を得て、昭和49年度に町内の遺跡分布調査を実施した結果である。分布調査は御津町教育委員会と御津町文化財保護委員会が主体となり、県内研究者のうち御津町担当となった水内昌康、角田茂、則武忠直、出宮徳尚、小野昭、神原英朗の6名が参加して実施した。今回本書の刊行を機会に、その成果をまとめて御津町遺跡分布図(図6)と、御津町埋蔵文化財一覧(表1)に示し、その概要を述べることにする。

御津町における最も古い遺跡は、縄文時代晩期にまでさかのぼることができる。まだ十分な調査がいきとどいていないとはいえ、北から鹿瀬遺跡(図6—58)、宇垣原遺跡(93)、野々口遺跡(94)が知られている。いずれも旭川流域の氾濫原に形成された河岸段丘およびその後背地に所在し、弥生時代集落址と複合立地する。なかでも宇垣原遺跡は、昭和25年頃瓦土の採掘中に現地表下約1.2mの埋積土中から、多量の土器片とともに石鏃等の打製石器が発見され注目された。当遺跡は鎌木義昌、江坂進両氏によって瀬戸内考古学第2集に「岡山県御津町原遺跡」として報告されている。原遺跡には貝塚をともなわず、今まではほとんど縄文時代の遺跡の存在しない地域に、突然単純遺跡の形で出現して



第2図 岩井山山麓部出土の縄文式土器片

いるのである。西川宏氏はその著書「吉備の国」の中で、原遺跡出土の打製石斧を陸耕具、打製鎌形石器を収獲具とする考えから、縄文時代晩期における畑作による穀物の栽培を想定されている。野々口遺跡も原遺跡同様瓦土探土中に偶然発見された遺跡であるが、縄文時代晩期の土器片包含層中に多量の椎の実、ドングリなどが発見され、隣町の山間町南方前池遺跡の、トチ、ドングリ、ク



第3図 伊田大谷遺跡出土の弥生式土器片

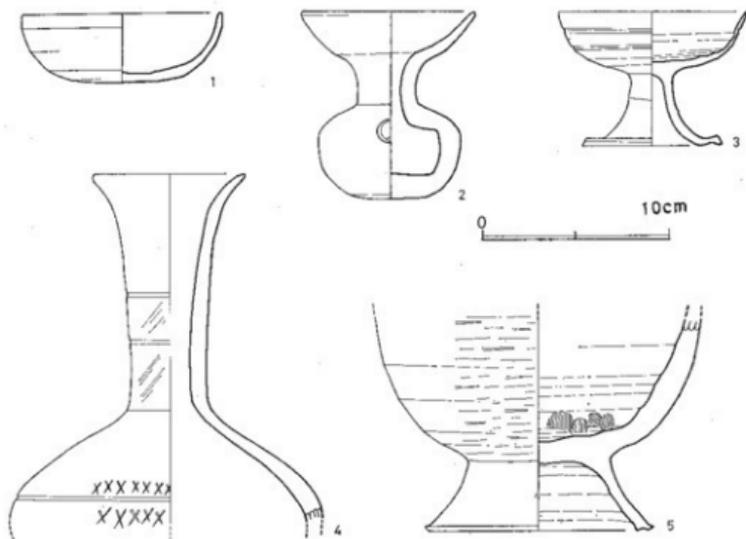
りの実などの食物貯蔵穴との対比から注目された。鹿瀬遺跡園は八幡神社境内および畑地での散布地であるが、現在確認できない。なおこのほか伊田岩井山丘陵南麓部(27)において、地元民が温室建設のため深掘り中に出土したと伝えられる、縄文時代後期の土器片1片を板津謙六氏が所蔵されている(図2)が、単片出土のため詳細は明らかでない。

弥生時代の遺跡は、前記縄文時代晩期の遺跡と複合立地する鹿瀬、原、野々口の3遺跡をはじめ岩井山(27)、伊田大谷(35)、宅美池(36)、塚の谷(37)、新庄尾上(38)などの遺跡が知られ、そのほか現在では現地確認ができないが、九谷、金川、吉尾などでもかつて弥生式土器片が出土したと伝えられている。いずれも旭川およびその支流によって形成された氾濫原や沖積平地、あるいはそれを臨む緑辺山麓および丘陵上に所在し、全町的な広がりを示す。原遺跡等河岸段丘の後背地に所在する遺跡では、現地表下1mも埋没しているなど、これらの遺跡の発見は偶然に掘り当て発見される場合が多く、分布調査が不十分なこともあいまって今後さらに増大するものと考えられる。各遺跡とも現在確認される限りでは、弥生時代中期後半から後期を中心とするものが多いようであるが、なかには原遺跡、岩井山遺跡のように、奈良、平安時代まで続くものもある。

これらの弥生時代の遺跡のなかでも、特に原遺跡は、縄文晩期の遺跡と複合立地していて、層序的な究明ができるばかりでなく、弥生時代になって急激に遺跡範囲が拡大され、縄文時代から弥生時代への移行のようすや、農業生産の発生の過程など、当時の歴史を解明するうえで貴重な遺跡である。このことは、前記「阿山県御津町原遺跡」にも報告されているが、その出土遺物の大部分は江坂進氏の長年の努力によって採集され、現在建部町の江坂氏宅に江坂コレクションとして常展されている。また今回発掘調査を実施した岩井山古墳群の調査中に、それと複合立地する竪穴式住居址2棟が発見され、その概要を本書IVに掲載した。このことは当御津町における最初の竪穴式住居址の発見例となったが、残念ながら開発事業の犠牲となって削平され、今はもうその姿を見ることはできない。なお参考までに、岩井山古墳群と近在する伊田大谷遺跡発見の土器片を第3図、石器類を図版24に、板津および江坂両氏の御好意によって提示する。

古墳は総数84基を確認した。その多くは各河川流域に拓けた平地を臨む山頂や尾根上、あるいは山麓部などに築造され、ほぼ全町的な広がりを示すが、平地が少なく山容の急峻な九谷以西と、河内西南部では発見できなかった。新庄川流域に最も分布密度が高く、次いで宇甘川流域の宇甘・中泉地区の平地を臨む山塊に集中し、その他の地域では数基程度の散在を示す。総体的に墳丘規模は小さく、横穴式石室を内部主体とする後期古墳が大半を占め、前方後円墳は高津の菅第2号墳(79)と、新庄の天神鼻第1号墳(51)、八つ塚古墳(55)の3基である。そしてまた前方後円墳の所在する地域は、それぞれ古墳の集中している地域であり、規模は小さいながらも、前期古墳からひき続いて後期古墳への系譜のたどれる、まとまりをもった地域でもある。

菅第2号墳は、宇甘川流域の宇甘・中泉の沖積平地を南から見降す、比高約60mの尾根先端部に立地する、全長約44mの前方後円墳である。墳丘の保存度の極めて良好な未掘墳で、墳斜面全体に葎石と墳丘外縁部を削平した整然とした周庭帯を繞らせている。本古墳の北に隣接して1辺約10mの截頭角錐形の方墳・菅第1号墳(78)が立地し、宇甘川を隔てた対岸の中泉第2号墳(74)も、墳丘規模は径約9mの小形円墳ながら、墳頂中央部に尾根走向に直交する2つの小竪穴式石室を有

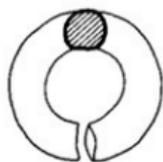


第4図 岩井山第12・13号出土の須恵器

し、前期古墳の特徴を示している、熊見(63~68)山空(69~70)などの横穴式石室を内部主体とする後期古墳とともに、計21基の古墳が存在する一単位地域を構成しているのである。

一方、八つ塚古墳と天神鼻第1号墳の2基の前方後円墳は、新庄川流域の新庄平地を西方から臨む丘陵上に近在している。天神鼻第1号墳は全長約20.5mの小規模な前方後円墳で葺石・埴輪等の外部施設は伴わない。近くに階段的な低平な小円墳3基が群在(52~54)し、いずれも前期後半的な特長を示している。八つ塚古墳

は、天神鼻第1号墳の南西約380mの谷頭鞍部に所在する。現在県道敷設工事によって後円部北西半を切断されているが、全長33m、後円部径21m、同高約3.3m、前方部巾16.5mを測り、円筒埴輪の回繞が伝えられている。この八つ塚古墳の南西に隣接する丘陵に、今回発掘調査を実施した岩井山古墳群21基(6~26)が所在し、その大半が箱式石棺を内部主体とする方墳である。この新庄川流域には計31基の古墳が発見されたが、前記の他の古墳の大部分は横穴式石室を内部主体とする後期の円墳である。なお岩井山古墳群のうち、昭和37年に損壊された第12号墳および第13号墳は、当時金川高校郷土部によって調査され、出土陶棺は御津町教育委員会、須恵器等の出土遺物の一部が金川高校に保管されている。共に丘陵斜面に溝を掘りその中に半地下式の横穴式石室を構築した小円墳であるが、第12号墳から土師質亀甲形陶棺(図版23)、第13号墳から須恵質四柱式家形陶棺が発見され注目された。



第5図 第13号墳出土の金環

(神原英朗)

第1表 御津町所在埋蔵文化財一覧

遺跡番号	種類	遺跡名	所在地	地目	立地	遺跡概況	出土品	現状	
1	古墳	虫名古墳	野々口・虫名	山林	裾	円墳、現存径9m、高2m、北西に開口する横穴式石室遺存、かなり埋没するもほぼ完形を保つ。天井石5枚、持ち送り積み現存石室長6.5m、同巾1.4m、同高1.5m。	不	明	町指定
2	"	恋坂古墳	野々口・恋坂	山林	山尾	低平な小円墳、径10m、墳高1m、墓地によって墳端の一部を削平されているが、内部主体は未掘。	不	明	一部損傷
3	"	香雲寺裏1号墳	国ヶ原	山林	麓	円墳、現存径11m、墳高3m、馬蹄形周濠を残す、南に開口する横穴式石室遺存、現存石室長7.06m、同巾1.45m、同高2m。	不	明	石室ほぼ完存
4	"	" 2号墳	"	"	"	1号墳の東約15mに立地する円墳、墳丘前半を切断され、現在横穴式石室の残骸を検出できる程度の遺存である。推定径11m、墳高2.5m。	不	明	大破
5	"	国ヶ原神社西古墳	"	"	"	円墳?現在山麓崖面に横穴式石室の残骸を思わせる石材を若干露呈している程度である。	不	明	壊滅
6	"	岩井山2号墳	伊田・岩井山	"	丘陵	南面に下降して延びる丘陵尾根上に、第2号墳から第9号墳までの8基の低平な小古墳が直列立地している。 方墳、1辺9m×8.4m、墳高1.2m、箱式石棺2、石蓋土壌2、計4内部主体有。昭和50年発掘調査。	土師器 壺 2	昭和50年消滅	
7	"	" 3号墳	"	"	"	方墳9.6m×8.7m墳高0.8m、箱式石棺1基を昭和50年発掘調査。	鉄斧1 鉄鎌1 刀子1	"	
8	"	" 4号墳	"	"	"	方墳、土取り工事により壊滅、現存 11m×4m、高1m、元箱式石棺2を内蔵、人骨、鉄剣出土とのこと。	鉄 剣 1	"	
9	"	" 5号墳	"	"	"	方墳、分布調査時すでに壊滅詳細不明。		全壊	
10	"	" 6号墳	"	"	"	方墳、10.8m×9.6m、高1.3m箱式石棺1基、昭和50年発掘調査。	鉄刀等小鉄器 3点	昭和50年消滅	
11	"	" 7号墳	"	"	"	方墳11.2m×9.5m、高1.4m、石蓋土壌墓等4内部主体有、第4主体より人骨1体分検出、昭和50年発掘調査。	歯 7 本	"	
12	"	" 8号墳	"	"	"	方墳、10.3m×9.2m、高0.9m箱式石棺、石蓋土壌墓各1検出昭和50年発掘調査。	人骨1体分	"	
13	"	" 9号墳	"	"	"	方墳16.5m×10m高約1.5m、墳丘保存状態良好の未掘墳、内部主体は箱式石棺2基のまよう。	不	明	完 存
14	"	" 10号墳	"	"	"	岩井山丘陵の東南端尾根支脈上に立地する方墳、1辺約10m、墳高約1m、墳丘はかなり流失し、墳頂部に箱式石棺1基が半露呈している。	不	明	半壊

遺跡番号	種類	遺跡名	所在地	地目	立地	遺跡概況	出土品	現状		
15	古墳	岩井山 11号墳	伊田・岩井山	山林	丘陵	10号墳の南に接して立地する方墳、一辺約15m、墳高約1m、封土はかなり流失しているが未掘墳と推定。	不	明	完	存
16	"	" 12号墳	"	"	"	円墳、大破した横穴式石室が南へ開口、天井石のすべてと側壁前半部は消滅、奥壁部のみ現存、封土流失して墳丘も存在しない。石室現存長250cm、巾90cm、現存70cmを測る。昭和37年金川高校調査、十師賀亀甲形陶棺1の他須恵器数点と、金環1出土と伝えられる。	陶棺1 須恵器片若干 金環1	大	破	
17	"	" 13号墳	"	"	"	円墳、12号墳の南約10mに所在していたが、現在は削平されて完全消滅、もと横穴式石室を内蔵し、須恵器陶棺1、と須恵器3点が出土したと伝えられている。	陶棺1 須恵器 1/3	消	滅	
18	"	" 14号墳	"	"	"	方墳、15号墳と近接立地、1辺14m×12m、墳高約1.2m、墳丘保存状況良好の未掘墳である。	不	明	完	存
19	"	" 15号墳	"	"	"	方墳、1辺19m×15m、墳高1.5m墳丘保存状況良好の未掘墳、岩井山古墳群中最大規模をもつ。	不	明	完	存
20	"	" 16号墳	"	"	尾根	方墳、17号墳と近接立地、封土がかなり流失しているが、1辺約10m、墳高1m程度の未掘墳と思われる。	不	明	完	存
21	"	" 17号墳	"	"	"	方墳、封土はかなり流失するも1辺約10m、墳高約1m程度の未掘墳と推定される。	不	明	完	存
22	"	" 18号墳	矢原	"	尾根突部	円墳、径14m、現高1.5mを測るが、墳中央を大きく掘りこまれ、石室石材を採石している。もと横穴式石室ありと伝えられている。	不	明	全	壊
23	"	" 19号墳	"	"	"	円墳、20号墳と近接立地、径約9m、現高1m、未掘墳である。	須恵器提瓶 胴部片	完	存	
24	"	" 20号墳	"	"	"	円墳、径約10m、現高約0.8m未掘墳である。	不	明	完	存
25	"	" 21号墳	"	"	"	墳形不明、丘陵頂の平坦な葺れ畑中に須恵器片の散布が見られ、黒辺の状況から推して、古墳の消滅址と考えられる。	須恵器片若干	消	滅	
26	"	" 22号墳	"	"	"	円墳、墳中央部に空堀跡があるが内室主体不明、推定径約9.5m、現高約1.5m。	不	明	半	壊
27	集落址 散布地	岩井山遺跡	伊田・岩井山	山水	丘陵 尾根・ 丘陵部	岩井山第2～9号墳の立地する尾根上に弥生時代竪穴式住居並2棟とその丘陵部周辺の水田等に弥生時代から平安時代にかけての土器片が散布している。	弥生式土器片 須恵器片等			
28	古墳	しんのう塚古墳	伊田・木山	山林	山腹	円墳、径23m、墳高約3m、墳頂平坦面径6m、墳丘保存良好。未掘墳か?	不	明	一	部破損

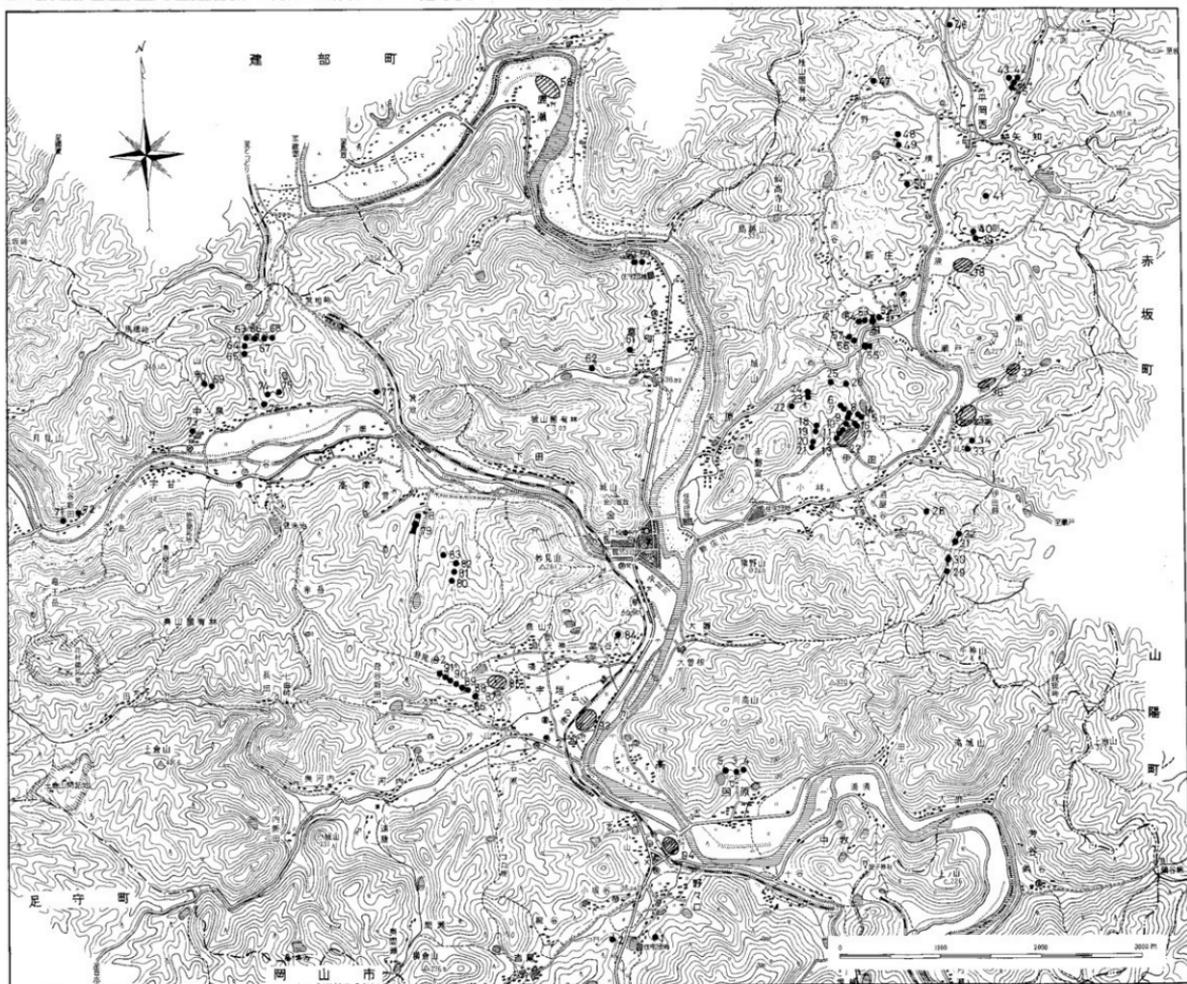
遺跡番号	種類	遺跡名	所在地	地目	立地	遺跡概況	出土品	現状				
29	古墳	殿谷1号墳	伊田・殿谷	山林	尾陵根	赤坂町との町境稜線上に直列に並ぶ4基の円墳が所在する。推定径約16m、南東に開口する横穴式石室が露呈、現存石室長580cm、巾190cm、石室は自然石2~3段積み。	不	明	半	壊		
30	"	" 2号墳	"	"	"	円墳推定径約12m、封土流失、西に開口する小横穴式石室露呈、大井石3枚が露出するも石室はほとんど埋没して詳細不明、現存石室長215cm、石室巾約90cmを測る。	不	明	半	壊		
31	"	" 3号墳	"	"	"	円墳、径約20m、墳高約2.5m、墳丘保存状態良好未掘墳か？	不	明	完	存		
32	"	" 4号墳	"	"	"	円墳、径23m、墳高3m、墳頂平坦部径6m、墳頂に1mと0.5mの石材が露呈している。	不	明	完	存		
33	"	飯園古墳	伊田・嵐	"	山腹	元円墳、現在消滅、円形に削平され「下伊田先祖の墓」と刻んだ石碑が建つ。大正年間発掘され、須恵器、鉄器、人骨が出土したという。	須恵器 鉄人	意	器	全	壊	
34	"	宇那山古墳	伊田・大谷	"	"	円墳、径約15m、現高約2m、西南に開口する横穴式石室が露呈しているが、券門部が埋没していて、詳細不明、赤磐郡誌には両柱式と、記載されている。	不	明	半	壊		
35	散布地	伊田大谷遺跡	"	苗圃	麓面	上伊田宮林署苗圃一帯の山麓緩斜面に弥生時代中期~後期を中心とする土器片および石器が採集されている。	弥生式土器片 多数、石包丁 石鏃等約10点					
36	"	宅美池遺跡	伊田・上伊田	池	山麓・谷	上伊田から赤坂町平木の方へ延長く入る谷口の宅美池内に弥生式土器片散布。	弥生式土器片					
37	"	塚の谷遺跡	"	山林	山麓	瀬戸山南麓、一見円墳状の小丘が所在し、その近くに須恵器片散見。	須恵器片若干					
38	"	新庄尾上遺跡	新庄・尾上	畑	"	瀬戸山北麓部谷口に近い山麓畑の断面に、弥生式土器片を含む包含層が露呈。	弥生式土器片 多数					
39	古墳	経陣古墳	新庄・寺部	山林	山麓	円墳、径約20m、墳高約4m、墳頂部に天満宮を祀る。内部主体不詳。	土師器細片若干				完	存
40	"	熊野神社古墳	"	神社内	山麓	円墳、熊野神社参道石段に面して断面露呈、推定径16m、横穴式石室外側露出、現存石室長6m、墳丘後背部に墓石を思わせる石材が埋没する。	不	明	半	壊		
41	"	天狗古墳	矢知・西の奥	山林	山頂	円墳、径約16m、墳高約1.4m、南に開口する横穴式石室、奥壁1枚石、割壁小形削り石で僅かに持ち盛り。	不	明	半	壊		
42	"	一本松1号墳	矢知・一本松	宅地	山麓	黒住教教会所敷地西端に所在。現在横穴式石室の奥壁と西側壁の一部を露すのみ、現存石室長520cm、石室推定巾160cm、元円墳と思われる。	不	明	全	壊		

遺跡番号	種類	遺跡名	所在地	地目	立地	遺跡概況	出土品	現状	
43	古墳	一本松2号墳	久知・一本松	畑	谷斜面	1号墳の西、谷部畑に所在する元円墳、現在倒壁石材1個を残すのみ。昭和4年破壊、西北西に開口する横穴式石室、壁面に一面朱が見られ、須恵器等の出土が伝えられている。	不	明	全壊
44	"	"	3号墳	竹林	山麓部	元円墳と推定、現在竹やぶの中に横穴式石室の奥壁と倒壁の一部を残存するのみ、埋没のため詳細不明。	不	明	全壊
45	"	"	4号墳	畑	谷山口裾	元円墳と推定、封土のすべてと天井石を欠く南に開口する横穴式石室が埋没しているが詳細は不明、石室推定長730cm、向巾145cmを測る。現存石室中央部に石室の小祠を祀る。	不	明	半壊
46	"	火の釜古墳	石上・浜田	山林	麓面	円墳と推定封土流失、西に開口する横穴式石室、現存石室長390cm、現高160cm、床巾125cm、天井石7枚倒壁は持ち送り積み4段築成。	須恵器出土と伝えられている		半壊
47	"	佐野古墳	石上・佐野	尾根突端部		円墳、径約14m、墳高約1.5m、墳頂平坦面径約6m、内部主体不明、未掘墳と思われる。	不	明	完存?
48	"	須道山古墳	平岡西・須道山	丘陵	尾根	円墳、封土がかなり流失して扁平となっているが、径約13m、墳高約1mの小円墳、未掘墳と推定。	不	明	完存?
49	"	八幡神社古墳	平岡西・須道	"	"	元円墳と推定、現在封土はほとんど流失、推定径9mを測る。墳中央部に箱式石棺の倒壁と思われる板状石材2枚が東南東方位で直立露呈している。	不	明	全壊
50	"	殿治久古墳	平岡西・横山	尾根突端部		円墳、径13m、墳高2.2m、墳頂に小さい一対の五輪塔を祀る。内部主体不明。	不	明	完存か?
51	"	天神鼻1号墳	新庄・天神鼻	山斜	麓面	前方後円墳、全長20.5m、後円部径11.2m、同現高約2m、前方部前面巾約10m、前方部を北に向けて築成、前方部は原状をうかがえる程度の遺存、後円部頂は削平され、盗掘あり、葺石、ハニワ等は認められない。内部主体不詳。	不	明	半壊
52	"	"	2号墳	"	"	1号墳の北に隣接立地する円墳、径約11.5m、墳高約1.8mを測るが、北半は削平されて畑となり大破、内部主体不詳。	不	明	大破
53	"	"	3号墳	"	尾根	円墳、径約11m、墳高約1.5m、墳頂に小竈掘りがある。内部主体不明。	不	明	小破
54	"	"	4号墳	"	"	円墳、径約13m、墳高約1.5m、墳頂に小竈掘りがある。内部主体不明。	不	明	小破
55	"	八ヶ塚古墳	新庄・八塚	谷裾	頭部	前方後円墳、県道工事により後円部北西半を切断されている。前方部を東に向け、全長33m、後円部径21m、同高3.3m、前方部巾16.5m、円筒ハニワ圍繞、内部主体不明、かつて後円部縁近くから須恵器片を出土したと伝えられる。	円筒ハニワ片 須恵器片	半壊 (町指定)	

遺跡番号	種類	遺跡名	所在地	地目	立地	遺跡概況	出土品	現状	
56	古墳	八ッ塚2号墳	新庄・八塚	山林	谷根 頭部	八ッ塚古墳の北山麓に近する2基の低平小円墳、径約10m、墳高約1mを測るが、現在宅造工事により削平消滅。	不	明	消滅
57	"	3号墳	"	"	"	円墳、径約10m、墳高約1mの低平な小円墳であるが、現在消滅。	不	明	消滅
58	散布地	鹿瀬遺跡	鹿瀬	畑林	竹河段 岸丘	鹿瀬河岸段丘一帯に縄文晩期～弥生後期の土器片散布、築造遺跡の存在した可能性大。	縄文晩期および弥生後期土器片		
59	古墳	宇条1号墳	草生・宇条	山林	山谷 麓地	円墳、墳丘および石室ともに大破元南東に開口する横穴式石室の側壁下段が僅かに残る程度。	不	明	全壊
60	"	2号墳	"	"	"	円墳、径18m、墳高3.5m、南東に開口する石室の横穴式石室露呈、すでに破壊され、石室の天井石は存在しない。現存石室長4m、巾1.4mを測る。かつて出土したと伝えられる須恵器を金川高に保管。	須恵器	半壊	
61	"	平野古墳	草生・平野	"	山斜 麓面	円墳、もと径約15m、墳高約3m程度の円墳と推定されるも、現在墳丘、石室とも大破全壊に近い、南に開口する横穴式石室残骸が僅かに残る程度である。金環出土と伝えられるも不明。	金環	環	全壊
62	"	いかとう古墳	草生・いかとう	山林	山麓部 火葬場	円墳、もと横穴式石室を内部主体とする円墳があって須恵器を多量に出土したと伝えられるが、現在は部草火葬場となって原位置を確認できない。	不	明	消滅
63	"	熊見1号墳	中泉・熊見	山林	山頂部	円墳、径14m、墳高約2m南から北に向けて大きな空堀溝があり、石材はほとんど持ち去られている。もと南に開口する横穴式石室と推察。	不	明	半壊
64	"	2号墳	"	"	尾根 根線	円墳、径15m、墳高約2m、封土の保存比較的良好、空堀溝内に横穴式石室が露呈しているも、埋没していて詳細は不明。	不	明	半壊
65	"	3号墳	"	"	"	円墳、径14m、墳高3m、墳丘石室ともに大破、空堀溝内に天井石1枚のみ残存露呈。もと南に開口する横穴式石室と推察。	不	明	大破
66	"	4号墳	"	"	"	円墳、径10m、墳高約1m、墳丘頂部に小空堀溝あるも、墳形はよく残り馬蹄形状の周溝あり墳頂部に石材散乱し、もと小空穴式石室の存在を思わせる。	不	明	半壊
67	"	5号墳	"	"	"	円墳、径11m、墳高約1.5m、墳丘頂部に5m×3m、深さ1.2mの空堀溝があり、床面に朱の付着する川砂珪を檢出、内部主体は墓穴式石室か？墳丘は馬蹄形状周溝をもち、保存良好。	不	明	半壊
68	"	6号墳	"	"	"	円墳、径15m、墳高約2m、墳丘高制から、空堀溝が掘られ石材はほとんど持ち去られているが、墳丘遺存度良好、もと玉砂利を敷いた墓穴式石室か？	不	明	半壊

調査 番号	種類	遺跡名	所在地	地目	立地	遺跡概況	出土品	現状
69	古墳	山空1号墳	中泉・山空	山林	根線	円墳。現径約10m、墳高約2m 穴に開口する横穴式石室あり 石室は袖なし、小口石積み、保 存良好。現存奥行長5.5m、高1.8 m、天井部巾0.8mを測る。	不	明半壊
70	"	山空2号墳	"	"	"	円墳。現径約10m、墳高約2 m、穴に開口する横穴式石室露 呈。天井石1枚を残して倒壊の 大部分を掃き去られ大破。現存 推定石室長4.5m、石室巾1.2m 埋没して高さは計測不能。	不	明全壊
71	"	九谷1号墳	九谷・九谷 新田	山林・山 畑	麓面	円墳。墳丘、石室とも大破し計 測不能。現況は奥壁一部のみが 残存をともめ、他に天井石1 枚が転落。また、南に開口す る横穴式石室と推定。推定石室 長5.0m、石室巾1.9m程度。	不	明全壊
72	"	"	2号墳	"	"	円墳が所在したと伝えられる。 現在は、土木工事により削平壊 滅してその痕跡をとどめない。 横穴式石室から直刀と、須恵器 提瓶の出土が伝えられている。	直須恵器提瓶	刀瓶 消滅
73	"	中泉1号墳	中泉・中泉	山林	山麓部	円墳。墳丘、石室ともすでに壊 滅。現在奥壁と側壁の一部を残す のみ。もと南に開口する横穴式 石室と推定。奥壁部での巾1.5 m、高さ1.3m、付近に敷基が存 在したと伝えられるも、現在確 認できない。	不	明全壊
74	"	"	2号墳	中泉・山空	尾根突 端部	円墳。径9m、墳高1m、馬蹄 形状の周溝あり。墳頂中央部に 小壁穴式石室2基が尾根走向に 立交して露呈。シスト程度の小 形石室か？墳丘遺存度は良好。	不	明半壊
75	"	"	3号墳	"	"	方墳？方形積み石塚。古墳と すれば、1辺13m、墳頂平坦部 辺5.4mの方墳となるが経塚の 可能性も強い。確認調査の要あり。	不	明半壊
76	経塚？	山際遺跡	"	"	"	中泉2号墳の南約80m、尾根突 端部平坦地にあり、1辺2.6m、 高さ0.6mの方形石積み台座、 経塚または、中世墓地の可能性 がある。前面に空きよう印塔1 基がある。	不	明半壊
77	古墳	実盛山古墳	箕地・実盛 山	"	"	円墳。径13m、墳高約2m。墳 頂部に方形の窪みがあり、 石材散乱するも全損していない もよう。現在埋没して内部 主体不詳。	不	明半壊
78	"	菅1号墳	高津菅	"	尾根 根線	方墳。1辺10m×10m、墳高 0.8m。墳形整然とした未掘墳。 内部主体不詳。	不	明完存
79	"	"	2号墳	"	"	前方後円墳。全長44m、後円部 径25m、後円部高4m、前方 部前面巾15.5m。墳丘の保存 度極めて良好な未掘墳。墳頂部 全体に葎石と、墳丘外周に周庭 帯をもつ、内部主体不詳。	不	明完存
80	"	みそのお1号墳	"	"	"	円墳。径6m、墳高0.5mの低 平な小円墳。内部主体不明。米 掘墳と推定。	不	明完存

遺跡番号	種類	遺跡名	所在地	地目	立地	遺跡概況	出土品	現状			
81	古墳	みそのお2号墳	高津・音山	林	尾根	円墳、径10m、墳高0.5mの低平な小円墳、内部主体不詳、未掘削と推定。	不	明	完	存	
82	"	" 3号墳	"	"	"	円墳、径10m、墳高0.8m。墳頂中央部に小竈掘城あるも内部主体不明。	不	明	小	破	
83	"	" 4号墳	"	"	"	方墳、12m×12m、墳高1m弱、未掘削と推定、内部主体不詳。	不	明	完	存	
84	"	金川古墳	金川・富谷	墓	丘陵頂	かつて円墳が所在し、石室内より須恵器出土と伝えられるも、現在は草地となって削平され消滅、地形からみて元径30m程度の円墳と推定される。	須恵器数点	消	滅		
85	たたら跡?	宇根山遺跡	宇根・宇根山	畑	丘陵	果樹園耕作面になくそ散布、谷部に金池池の地名もあり、たたら遺跡の可能性もある。	かなくそ				
86	古墳	宇根山1号墳	宇根・河内	山林	尾根	方墳、10m×10m、墳高約2m、未掘削のため内部主体不詳	不	明	完	存	
87	"	" 2号墳	"	"	"	方墳?砂防設工事で削平され、墳域不明瞭、現況は10m×15m墳高1m、葎石らしき石材散見、内部主体不詳。	不	明	半	壊	
88	"	" 3号墳	"	"	"	円墳、径10m、墳高約2m、半円形周溝をもつ、南々東に開口する横穴式石室を築揚され、石材はすべて持ち去られている。石室無定長3.5m、巾0.9m。	不	明	全	壊	
89	"	" 4号墳	"	"	"	円墳、径14.5m、墳高約2.5m、半円形周溝をもつ、南々東に開口する横穴式石室、現存石室長4.5m、巾0.86m、高さ0.9m玄壁の別なし、側壁はほぼ完存するが、天井石は1枚のみ残る。	不	明	半	壊	
90	"	" 5号墳	"	"	"	円墳?封土流失のため明確でない。径10m、墳高0.5mの低平な円墳の可能性もある。	不	明			
91	"	" 6号墳	"	"	"	円墳?径10m、高さ0.5mの古墳らしき高まりである。確認調査の要あり。	不	明			
92	"	" 7号墳	"	"	"	円墳?同上	不	明			
93	散布地	原遺跡	宇根・原水	田	地	水田・畑の地下に縄文晩期から弥生時代にかけての遺物包含層が所在する。かつて瓦焼きの積土中に多量の土器、石器が発見され、照中郡山間地域の代表的資料となっている。	縄文・弥生土器片・石器等多数				
94	"	野々口遺跡	野々口	水田	河	岸	瓦土器土塊からかつて多量の縄文晩期から弥生時代にかけての土器片が出土した。現在は水田、宅地、国道、国鉄駅舎敷地等となっている。	縄文・弥生土器片・どんぐり等			



第6図 御津町遺跡分布区

Ⅲ 岩井山古墳群発掘調査報告

第1章	岩井山古墳群調査概要	19
第2章	岩井山古墳群第2号墳	28
第3章	岩井山古墳群第3号墳	37
第4章	岩田山古墳群第4号墳	42
第5章	岩井山古墳群第6号	48
第6章	岩井山古墳群第7号墳	53
第7章	岩井山古墳群第8号墳	62
第8章	岩井山古墳群第9・14・15号墳概要	70
第9章	岩井山古墳群出土の人骨	73
第10章	岩井山古墳群總括	80

第1章 岩井山古墳群調査概要

1. 序説

岩井山古墳群は、岡山県御津郡御津町伊田の、岩井山(標高148.9m)を中心として形成された丘陵地内に所在する21基の小形古墳によって構成されている。

このたび当該丘陵一帯の伊田地区および矢原地区にまたがる423,000㎡が、山一建設株式会社により、御津住宅団地開発事業として計画決定したのに伴い、事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、事業主体者をはじめ関係諸機関で協議を重ねられた。その結果、大半の古墳は公園や緑地に取り入れて現状保存されることになったが、すでに破壊消滅している岩井山古墳群第4号墳、第5号墳を含む第1号墳から第8号墳までの8基は、住宅団地造成計画上、現状保存することが技術的に困難のため、やむなく発掘調査による「記録保存」の処置がとられることになった。

御津住宅団地開発事業の施工に伴い、事前発掘調査の対象となった岩井山古墳群第1号墳～第8号墳は、いずれも御津町伊田953番地の、丘陵尾根支脈上に直列立地する小形方墳である。

本古墳群の発掘調査は、御津団地文化財調査委員会が、昭和50年5月15日から同年7月15日までの2か月間を要して実施した。今次の調査目的は、岩井山古墳群第1号墳、第2号墳、第3号墳、第6号墳、第7号墳、第8号墳の6基の発掘調査と、すでに崩壊している第4号墳、第5号墳の遺構確認調査、それに周辺事業地内における遺跡可能地の試掘調査である。

調査の結果、第1号墳と推定されていたところには古墳が存在せず、第5号墳はすでに壊滅して調査不能であった。したがって実質発掘調査古墳は第2号墳、第3号墳、第4号墳、第6号墳、第7号墳、第8号墳の6基である。また本古墳群発掘調査中に、古墳と複合立地する弥生時代竪穴式住居址2棟を発見併せて調査した。また、遺跡の可能性があるとされた地域の遺構確認調査は、当該丘陵内5か所において巾1mのトレンチを延べ438m設置し、試掘調査を実施した。さらに現状保存地区ではあるが、遺跡確認調査等によって検出した第9号墳、第14号墳、第15号墳の外形測量と、すでに盗掘された壊滅状態の第12号墳の横穴式石室を、清掃および写真撮影した。

発掘調査終了後、各古墳の内部主体である組み合せ式箱式石棺は、後日適地を定めて移築保存されることになり、とりあえず解体して調査事務所に搬入保管した。昭和51年4月には、当該地は御津住宅団地造成工事によって、その基盤である丘陵もろとも削平され、現在もその工事は進行中である。したがって狭いながらも、沖積平地を見おろす丘陵尾根支脈上に君臨していた本古墳群の、昔日の面影は今も存在しない。

本古墳の発掘調査に際しては、地元の方々をはじめ町当局はもとより、関係各機関から多大の理解と協力をいただいた。なかでも御津町文化財保護委員長板津謙六氏と、御津町教育委員会社会教育主事内田誠也氏には、多忙中にもかかわらず本調査に関しての諸連絡調整から、調査用具の調達等の雑事にいたるまで、終始お世話になった。始めに記して厚くお礼を申し述べたい。

直接の発掘調査については、岡山県教育委員会文化課ならびに研究者諸氏から指導と教示をいただいた。本古墳群出土の人骨鑑定については、京都大学自然人類学研究室池田次郎教授にお願いし

たところ、快諾をいただいたうえに、その結果を玉稿として隔わった。また本古墳出土の石棺石材の鑑定については、岡山県立福渡高等学校行森政知先生に御教示いただいた。さらに周辺地域の遺跡や遺物については、前記板津謙六氏および御津郡建部町福渡江坂造氏に、御教示いただくとともに、採集遺物の本書への記載を快諾いただいた。合せて深く謝意を表したい。

2. 岩井山古墳群の立地と概況

岩井山古墳群21基が所在する岩井山は、東から西へ蛇行して旭川にそそぐ小支流、新庄川の合流地点から約2kmさかのぼった狭い谷間に形成された、小規模な沖積平地および扇状地の北縁に位置する丘陵地である。当該地は風化浸蝕されやすい花崗岩地質のためか、標高148.9mの岩井山を中心に、浸蝕谷によって開析された数多くの尾根支脈を分出しながら広がる、比較的従順な丘陵地形となっており、西の赤磐富士、東の瀬戸山丘陵へと連なっている。各尾根支脈の稜線は尾根巾の狭い馬の背尾根ながら、比較的なだらかな起伏をもって延び、浸蝕谷に面する両側斜面と扇状地を臨む尾根先端部では、概してかなりの急斜面となっている。当丘陵群と眼下の沖積平地との最大比高は約100m、その広がり東西約750m、南北約900mを測る。東と西に夫々深い谷水田が入りこみ、一見して、まとまりをもった独立丘陵的な様相をみせ、全山美しい自生の松林であった。

岩井山古墳群はこれら丘陵尾根支脈上に立地する、いずれも径10m～15m程度の小規模墳である(図7)。北面の谷水田に臨む尾根支脈上に立地する古墳は、その先端部に単基または2基と散在的であるのに較べて、新庄川流域の沖積地を臨む南面した尾根支脈上には、数基の古墳が直列状に支群を形成して集中的に群在する。各古墳の規模や概要については、すでに前章の表1にまとめて記載しているので、ここでは重複を避け、今回発掘調査の対象となった第2号墳～第8号墳を中心に若干の周辺古墳を含めて、発掘調査前の概況を記述する。

岩井山から東へ緩やかに下降して延びる丘陵尾根主軸は、標高約116m付近で鞍部となり、再び隆起してその東に標高132.8mの丘陵頂部を形成している。この丘陵頂東端部から新庄川流域の南へ向けて、緩やかな起伏をみせながら下降して延びる尾根支脈は、沖積平地を眼下に臨む標高97.7mで尾根先端部を形づくり、さらにそこから東と西南へ末端小支脈を分出して終っている。しかしこの地は、昭和47年から同48年にかけて土木業者による土砂採掘場となり、今次発掘調査の時点では、東へ延びる小支脈全域と、尾根先端部頂におよぶ南半部を大きく削平され、最大比高約45mの断崖面となって、無残な姿を曝らしていた。

岩井山古墳群第2号墳～第9号墳の8基は、この尾根支脈先端部を中心として、尾根支脈稜線上に直列して一支群を構成している。すなわち、尾根先端部に第4号墳が立地し、その北方約50mの馬の背尾根上に、第2号墳と第3号墳が墳端部を接するようにして所在する。また第4号墳から西南へ降る尾根末端支脈上約150mの間に、第9号墳までの6基が直列状に所在する。昭和49年5月の当該地の埋蔵文化財分布調査の段階で、第4号墳の北約100mに第1号墳、同約75mに第2号墳が所在するとした地域は、今回の発掘調査の結果古墳が存在しないことが判明した。そのかわり前述もしたとおり、第3号墳に接して古墳が発見され第2号墳とした。したがって第1号墳は欠番となった。また第4号墳は、すでに墳丘の3分の2程を内部主体も含めて崩落し、やっとその痕跡を



第7図 岩井山古墳群分布図

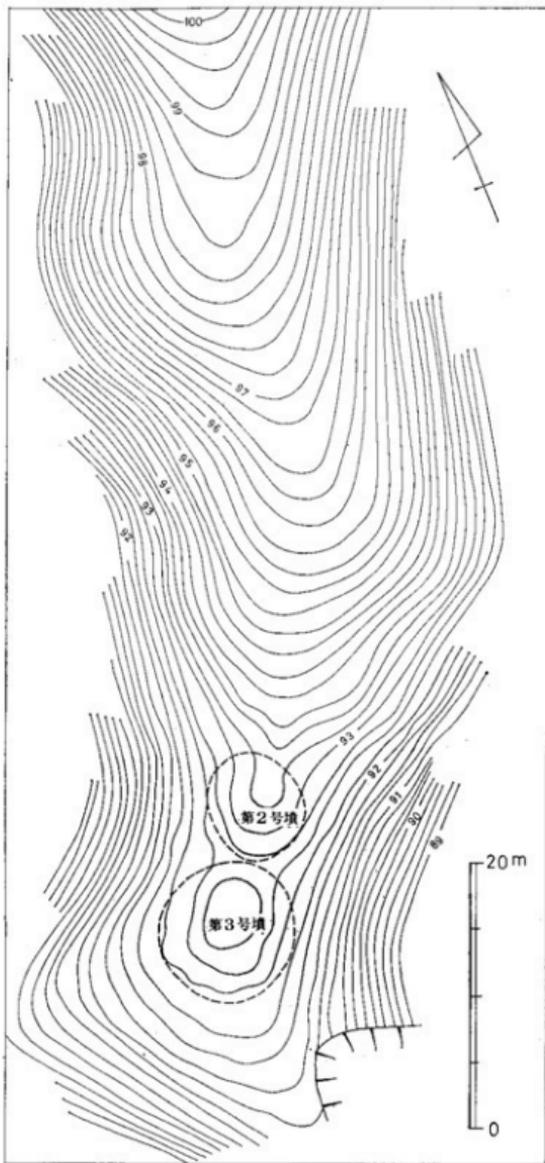
とどめる程度であり、さらに第5号墳は全く調査される機会もないまま採土工事によって、崖下に崩落全壊して調査不能の状況となっていた。

今回発掘調査を実施した第2号墳、第3号墳、第4号墳、第6号墳、第7号墳、第8号墳の6基は、いずれも立地する尾根走向に沿って長辺をもつ、一辺10m程度、坡高1.2m~1.5m程度の小規模な方墳である。尾根走向に直交した墳端部溝状遺構が認められ、墳丘はかなり風化流失しているものの、大破している第4号墳の他はすべて未掘墳と推察される。各古墳とも新庄川流域に向けて張りだした形の尾根上に所在するため、いずれも眺望視野は広く、伊田地区の沖積平地全域をほぼ一望できる立地を占める。

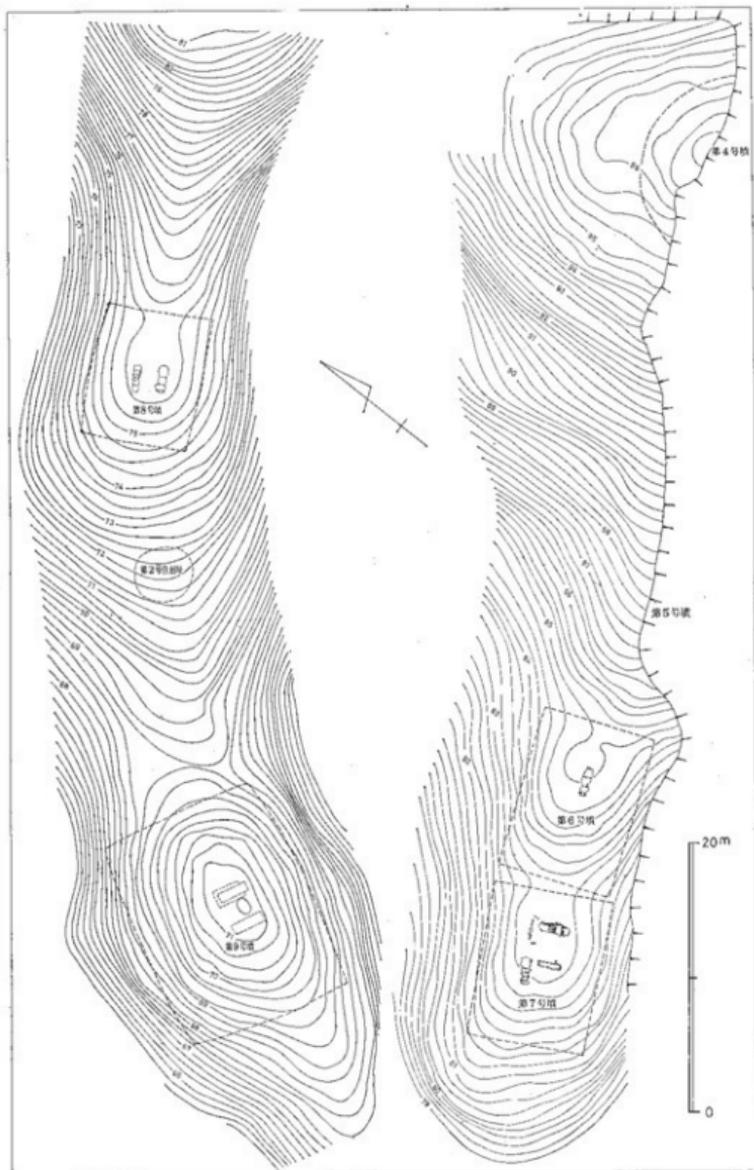
本支群の立地する尾根支脈と並行して、その東方に2条の尾根小支脈が存在するが、各々その突

端部に2基の古墳が近接立地している。すなわち第2号墳の東約160mにあたる東尾根支脈上に第10号墳と第11号墳その中間の尾根支脈上に第12号墳と第13号墳が所在する。第10号墳はすでに一部を損壊されて、組合せ式箱式石棺の側壁が露呈しているが、1辺約10mの方墳である。第11号墳は1辺約10mの未掘方墳である。第12号墳は小規模な横穴式石室を内部主体とする小円墳であるが、昭和37年に破壊され、現在は奥壁に近い石室の一部を残すのみである(図版23)。土師質亀形陶棺と若干の須恵器および金環1が出土している。第13号墳は、第12号墳の南に接して所在したと伝えられるが、すでに破壊消滅していて全く不明である。須恵質四柱式陶棺と須恵器3点が出土している。

さらに本支群の立地する尾根支脈の西方、谷水田一つを隔てた尾根支脈上に、第14号墳～第17号墳の4基が所在する。すなわち第8号墳の西方約240mの尾根支脈先端部に、第14号墳と第15号墳、その南方約150m離れた尾根支脈末端部に、第16号墳と第17号墳がそれぞれ近接立地する。いずれも未掘の方墳であるが、なかでも第14号墳は14m×12



第8図 岩井山第2・3号墳周辺地形図



第9图 岩井山第4~9号墳周边地形图

m, 墳高1.2m, 第15号墳は19m×15m, 墳高1.5mを測り, 共に墳形も整い, 本古墳群中最大の規模をもつ。

3. 発掘調査の経過

岩井山古墳群の発掘調査は, 昭和50年5月15日から同年7月15日までをかけて実施した。今回発掘調査の対象となった各古墳は, いずれも調査終了後住宅団地造成工事の犠牲となって破壊されるため, 古墳はその周辺も含めて地山生き土面まで広く全面別土調査を行ない, でき得る限り記録採取に努めた。さらに開発予定地域内において遺跡の存在する可能地区についても, トレンチ調査による遺跡確認のための試掘を実施した。発掘調査経過については, 調査日誌を抄録した。

発掘調査日誌抄

- 昭和50年5月7日～同月12日, 発掘調査開始に先立ち, 調査事務所設営, 器材搬入, 当該地の立木伐採および清掃, 地形測量等諸準備を行なう。
- 5月15日, 地鎮祭の後調査方法および日程等を協議。午後から調査器材搬入と, 第1・2号墳周辺部の立木伐採および清掃作業。
- 5月16日, 第1・2号墳の立木伐採と清掃および地形測量, 本支群全域の写真撮影。
- 5月17日, 第1・2号墳の外形測量と調査前外観写真撮影および発掘区設置。第1・2号墳とも墳域および墳形等が明確でないため, 尾根稜線に沿った巾1mのトレンチ2本と, それに直交する3本のトレンチを設定, 遺構確認をすることとした。トレンチ発掘開始。
- 5月18日, トレンチ発掘作業, 現表土より約30cmで地山生き土上層に達し, 人工的な作爲は施されていないもようである。
- 5月19日, トレンチ調査の結果第1号墳および第2号墳はともに存在しないことが判明欠番とした。第3号墳周辺部立木伐採および清掃作業, その結果第3号墳に近接する古墳を発見, 欠番となった第2号墳を振り替えて命名, 両古墳調査前外観写真撮影。
- 5月20日, 第2・3号墳の外形測量および調査区設定, 第2号墳より発掘調査にかかる。
- 5月21日, 第2号墳発掘調査, 墳頂中央部に尾根走向に直交して並ぶ2基の箱式石棺を検出, 第1・2主体とする。第4号墳周辺清掃作業と外形測量。
- 5月22日, 第2号墳発掘調査。第1・2主体の石棺上面露土作業, 墳裾南東周濠部に小形石蓋土壇蓋(第4主体)検出。第6号墳調査前外形測量。
- 5月23日, 第2号墳発掘調査。北周濠部に小形石蓋土壇蓋(第3主体)検出。第4主体外方に供献されたと考えられる土師器埴2個を発見。第3号墳発掘調査着手。第7・8号墳調査前外形測量。
- 5月24日, 第2号墳各主体清掃および写真撮影, 第2号墳墳丘セクション実測, 墳丘部発掘ほぼ終了。尾根走向に直交する周濠状溝遺構を南北両墳端にもつ方墳で, 南溝は第3号墳と共有する。第3号墳発掘調査。
- 5月25日, 第2号墳各主体蓋石実測。第3号墳墳頂中央部に尾根走向に直交する箱式石棺1基を検出。東小口棺外側に接して鉄器3点が副葬されていた。

- 5月26日, 第2号墳各主体蓋石実測。第1・2主体蓋石除去, 写真撮影の後棺内発掘。第3号墳表土剝土調査, 第9号墳外形測量。
- 5月27日, 第2号墳各主体内発掘, 写真撮影。第3号墳墳丘断面図実測の後, 内部主体蓋石露呈作業。第3号墳と第4号墳の間の尾根稜線にトレンチ設置発掘調査。
- 5月28日, 第4・5号墳発掘調査。第4号墳は墳丘北半約3分の1を遺存, 周濠は硬い岩盤を掘り込んでいる。第5号墳はすでに全壊崩落している, その痕跡は何も確認できなかった。第4～6号墳調査前写真撮影。
- 5月29日, 第6号墳発掘調査に着手。墳頂中央部に尾根走向に沿った箱式石棺(第1主体)検出。
- 5月30日, 第6号墳剝土調査。北東部周濠底から小鉄器1を検出。第7号墳発掘調査着手。
- 5月31日, 第7号墳発掘調査, 墳頂部に尾根走向に直交する箱式石棺と石蓋土壘墓各1, その北に尾根走向と並行して直列する箱式石棺と石蓋土壘墓各1の計4主体の存在を確認。第2号墳および第3号墳の各主体部写真撮影。
- 6月1日, 日曜日全休。
- 6月2日, 第6号墳と第7号墳間の剝土調査ならびに第7号墳調査。第2号墳各主体身部実測, 第2号墳墳丘断面観察のため十文字トレンチ設置発掘にかかる。
- 6月3日, 第7号墳墳丘および第8号墳との間の丘陵尾根トレンチ発掘。第2号墳各主体セクション実測, 第3号墳第1主体蓋石実測。
- 6月4日, 第3号墳第1主体蓋石除去棺内発掘。棺外供献の鉄器とりあげ, 第2号墳墳丘下に弥生式土器片および焼土面発見。弥生時代竪穴式住居址との複合の可能性あり。第8号墳発掘調査に着手。
- 6月5日, 雨天のため現場作業全休, 調査事務所にて内業。
- 6月6日, 第8号墳発掘調査。墳頂中央部に尾根走向に平行する箱式石棺(第1主体)と, その北側に並ぶ石蓋土壘墓(第2主体)を検出。第3号墳内部主体実測。
- 6月7日, 第8号墳墳端部発掘。第6・7号墳墳丘断面図実測。
- 6月8日, 日曜日全休。
- 6月9日, 第6・7号墳主体部ベルト取りはずし, 主体露呈作業, 第8号墳剝土調査。
- 6月10日, 第6・7号墳ベルト全面除去および各主体蓋石実測。第8号墳墳丘断面実測, 第8号墳から第9号墳に至る丘陵尾根部トレンチ発掘。
- 6月11日, 第6・7号墳各内部主体発掘。第8号墳ベルト除去および内部主体露呈作業, 第8号墳西南トレンチに竪穴式住居址1棟を検出, 調査区拡大。
- 6月12日, 第6～8号墳写真撮影, 第7号墳内部主体内清掃および第3・4主体実測。竪穴式住居址発掘。
- 6月13日, 第8号墳内部主体蓋石実測, 棺内発掘。第3号墳礎床清掃および実測。第2号住居址発掘, 径4m円形プラン, 柱穴4と炉址1を検出。
- 6月14日, 農繁期となるため, 各発掘調査区保全, 写真撮影および検討。

- 6月15日～同18日，4日間農繁休業，その間諸記録，出土遺物の整理検討等を行なう。
- 6月19日，第7号墳第2・3主体棺内発掘。本古墳群の北方標高約112mの丘陵頂周辺部を，遺跡確認調査のため立木伐採作業。
- 6月20日，雨天のため休業
- 6月21日，第8号墳第1・2主体棺内発掘。第2号住居址床面清掃写真撮影および実測。北尾根山頂部トレンチ調査。
- 6月22日，日曜日全休。
- 6月23日，第8号墳第1・2主体棺内調査。第1主体石棺内に保存度良好な遺体検出。第2主体実測。北尾根山頂部トレンチ調査の結果，遺跡は存在しないことを確認した。
- 6月24日～25日，雨天のため発掘作業休業。
- 6月26日，第8号墳第1主体人骨プラン実測，第2主体断面実測。谷水田一つを隔てた西尾根上の，第14・15号確認調査のため立木伐採。
- 6月27日，第2号墳および第3号墳調査後外形測量，第8号墳第1主体実測，第14・15号墳所在地トレンチ調査の結果古墳は存在せず，そのかわり南方尾根上に2基の方墳を発見，これを第14号墳，第15号墳として，事業主体者と保存協議に入る。
- 6月28日～29日，雨天のため休業。
- 6月30日，第8号墳第1主体人骨とりあげの後礫床面清掃実測。第2号墳と複合する第1号住居址発掘。
- 7月1日，第6～8号各墳主体補足実測。第1号住居址発掘。
- 7月2日，第8号墳第1主体セクション実測，各古墳内部主体を後日適地を選んで移築することになり，第2・3号墳から解体，とりあえず調査事務所へ仮保管する。
- 7月3日，第6号墳調査後外形測量，第1号住居址床面および柱穴発掘，床面より弥生式土器片若干と石鏃3を発見。
- 7月4日，雨天休業。
- 7月5日，第7号墳発掘調査後外形測量。第1号住居址実測および写真撮影。
- 7月6日・7日，日曜および雨天のため全休。
- 7月8日，第8号墳調査後外形測量（未完）。第7号墳石棺解体取りあげ。
- 7月9日，第8号墳および第2住居址調査後外形測量。第6号墳石棺解体取りあげおよび墓壕補足調査と実測。
- 7月10日，第8号墳石棺解体および取りあげ，墓壕掘り方補足調査および実測。第9号墳外形測量。
- 7月11日，第9号墳外形測量および墳丘セクション実測，各発掘調査区最終検討。
- 7月12日，現状保存となった第14・15号墳外形測量のため，墳丘清掃作業および第14号墳外形測量。
- 7月13日～14日，日曜および雨天のため休業。
- 7月15日，各古墳石棺石材を調査事務所へ搬入。調査器材収納作業。第12号墳石室清掃と写真撮

影。

○ 7月16日、保存古墳第15号墳の外形測量。午後御津団地文化財調査委員会を開催。調査経過ならびに調査結果の概要を報告し、遺跡現地における発掘調査を終了した。

(則武忠直・神原英朗)



岩井山古墳群発掘調査員および作業員

(作業員氏名)

植田 臣	浦上 秀市	江田 政秀	景山万寿太	白髭敏太郎
田中 達明	花房 毅	的場 時義	宮崎伊勢造	立古 芳明
立古 礼二	阿部 茂子	阿部 芳恵	浦上 愛子	玄古美津子
小坂 弘江	小坂 光子	小森 節子	花房 敏子	福島 玉恵
藤木 清子	宗定 政子	社 百枝	立古喜代子	

第2章 岩井山古墳群第2号墳

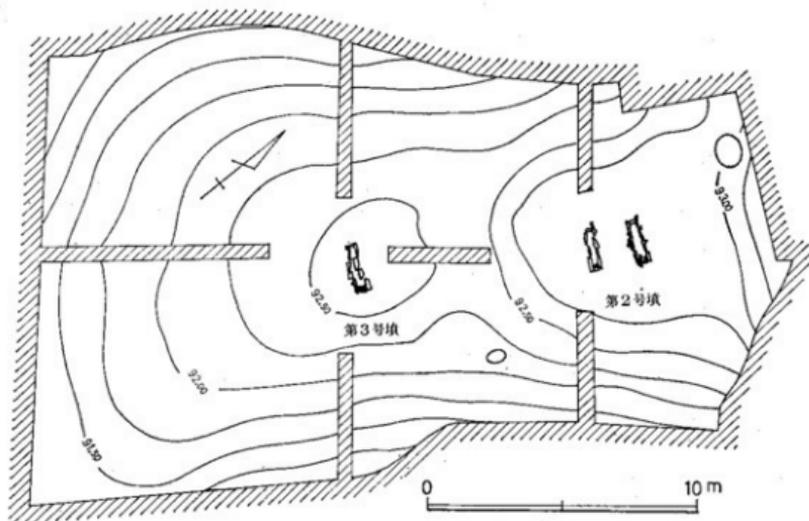
第1節 立地と調査前の概況

岩井山古墳群第2号墳は、岡山県御津郡御津町伊田字岩井953番地の丘陵尾根上に在所する方墳である。昭和50年5月20日から同年6月27日までの期間発掘調査を実施した。

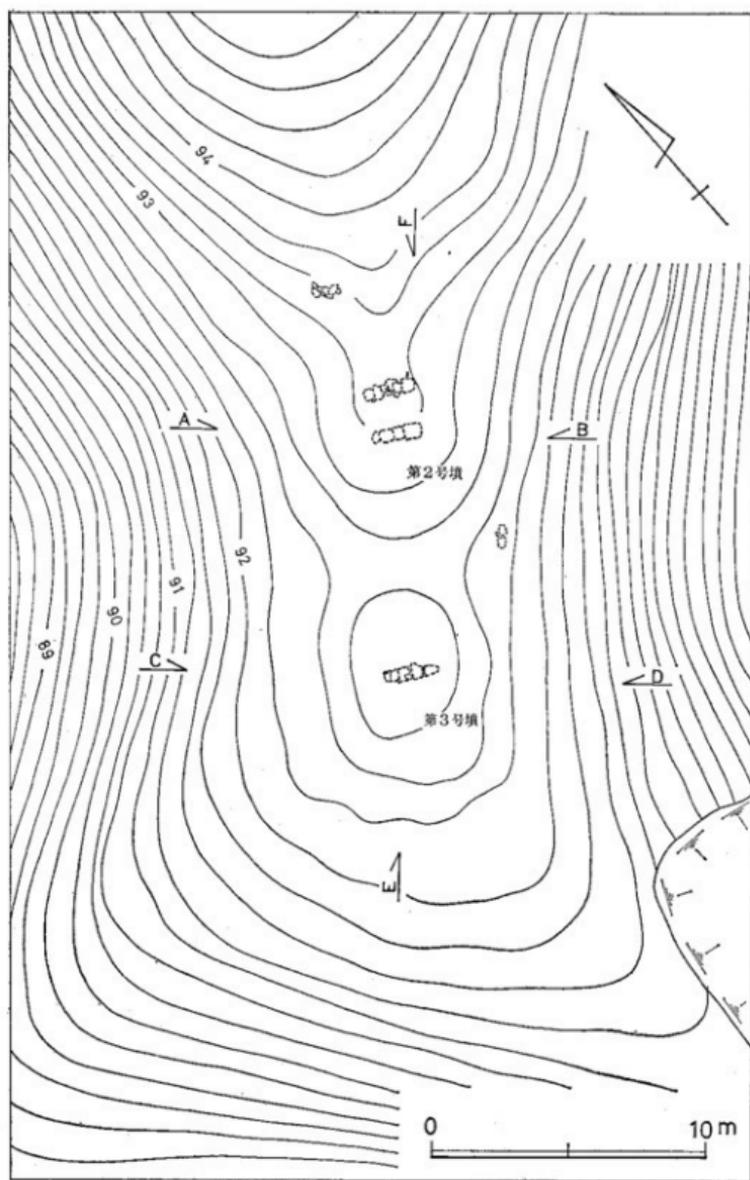
岩井山（標高148.9m）の山頂から東に連なる嶺は、標高112mで再び丘陵頂となる。ここから南へ向けてゆるやかに下降する馬の背尾根は、標高93m付近で巾狭な鞍部を形成している。本古墳はこの鞍部に近い尾根上緩斜面に所在している。この丘陵の南の山裾を流れる新庄川の沖積地と、巾狭な谷間の扇状地に開けた水田を臨んで立地している（図8）。南方は第4号墳の所在する標高97.7mの丘陵尾根突端部に眺望を遮られるが、東南および西南の水田地帯を望むことができる。眼下の水田よりの比高約47mを測る。

第2号墳の周辺は、発掘調査が行なわれるまでは松林で下木が繁茂しており、事前の分布調査では古墳が確認されなかった。樹木を伐採した後の観察でわずかな高まりと溝状の窪みが認められ、低平な小円墳と推定された。墳丘表面に盗掘痕などもなく、若干の封土流失は見られるが、ほぼ原況を保つ未掘墳と思われた。

第2節 調査の結果



第10図 岩井山第2・3号墳調査後外形図



第11圖 岩井山第2・3号墳調査前外形圖

1. 外形

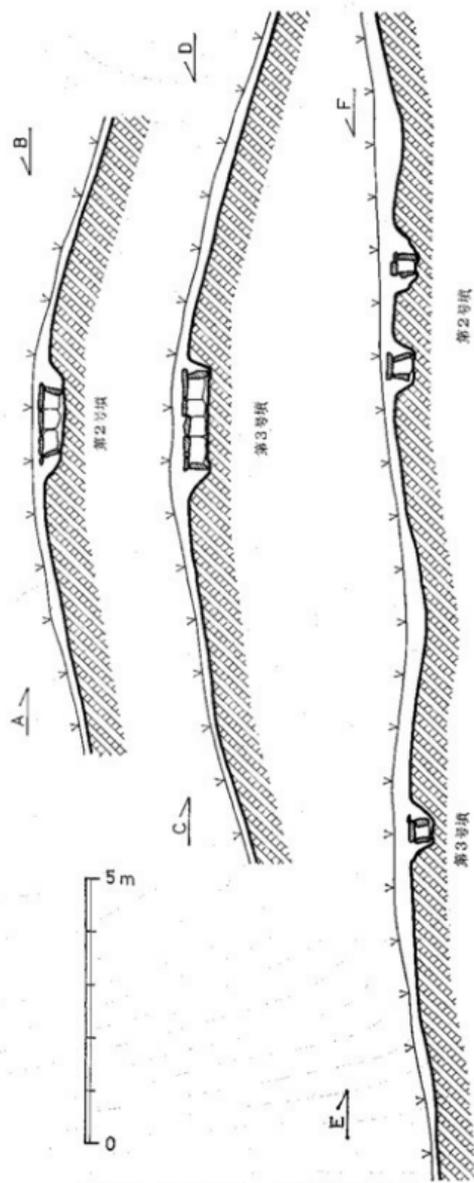
本古墳は尾根定行に沿って長辺をもつ、径9m×8.4m、高さ1.2mの規模の方墳である(図10・図版3)。丘陵尾根の自然地形の高まりを利用し、削平整地して墳丘基盤となる平坦部を造成して、尾根稜線にあたる南北墳端に、尾根走向に直交する溝を掘り込んで、墳域を画するとともに、その土を盛りあげて載頭角錐形の墳丘を築成している。墳丘盛り土は現墳頂表土面から、第1主体石棺身部上面までわずか24cmで、封土の流失が予想されるもの、もともと墳高はさして高くない低平な古墳であったと推察される。葺石などの外表施設はなにも認められない。

2. 埋葬施設

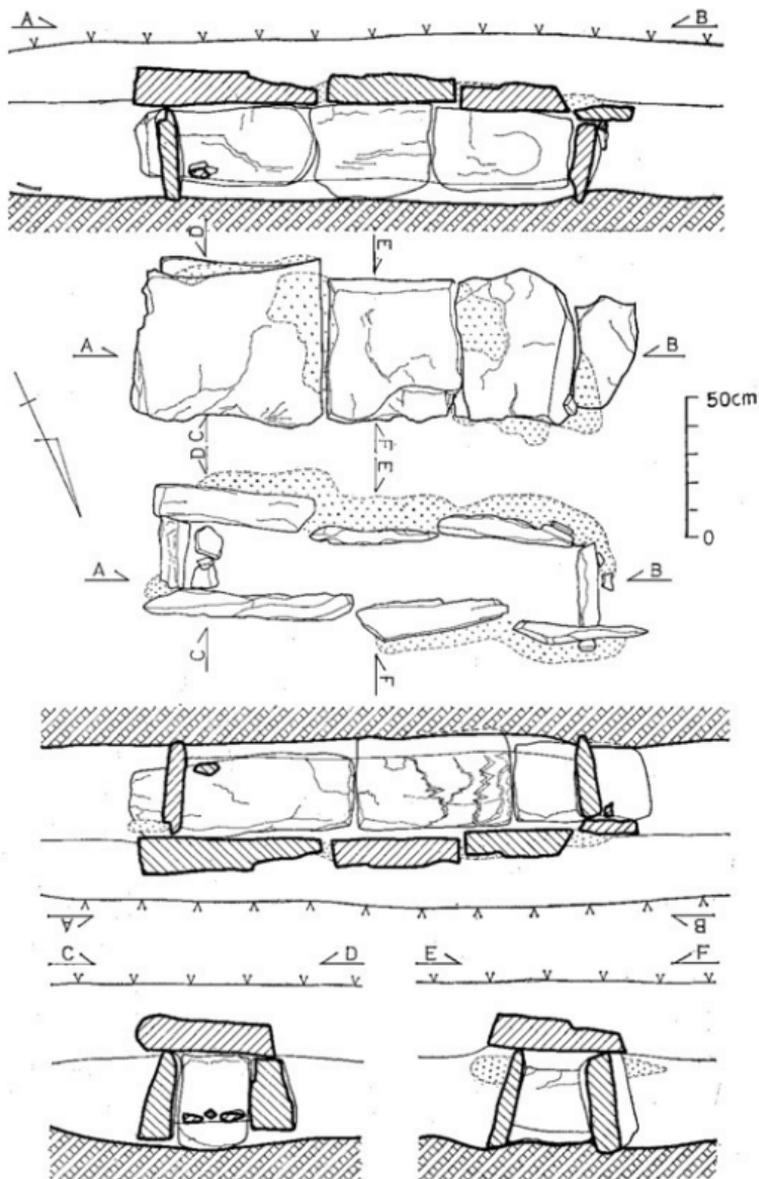
本古墳の内部主体は、墳丘中央部に尾根主軸と直交して並存する組合せ式箱式石棺2主体と、墳端周遊部に位置する石蓋土壇2主体の計4主体である(図11・図版3)。

第1主体(図13・図版5)

第1主体は墳頂中央部に、北側に位置する第2主体と並列して構築された、組合せ式箱式石棺である。ともに墳丘築成前の丘陵地山削平面から掘り込まれた、長方形墓域内に納められているが、当該地は後に述べる弥生時代竪穴式住居址と複合し、その埋積土中に墓壇が設けられているため、墓壇掘り込み面は明確にできなかった。したがって、第1主体および第2主体埋葬



第12図 岩井山第2・3号墳墳丘断面図



第13图 第2号墳第1主体实测图

の先後関係等についても明らかでない。石棺は付近の丘陵に産出する石英斑岩および文象斑岩の割り石を使用し、墳丘地山整地面を掘り込んで構築している。石棺は現墳頂表土下49cmに床面を置き主体の方位は尾根走向にほぼ直交し、長軸中心線は北60度西を指す。

蓋石は大きさや形状に差があるが、平均の長さおよび巾とも約50cm前後、厚さ10cm程度の板状割り石4枚を選んで使用している。下側の面を揃え整然と配置しており、継目の間隙は青灰色の粘土でいおいに目張り調整を施している。蓋石の全長178cm、最大巾58cmを測る。

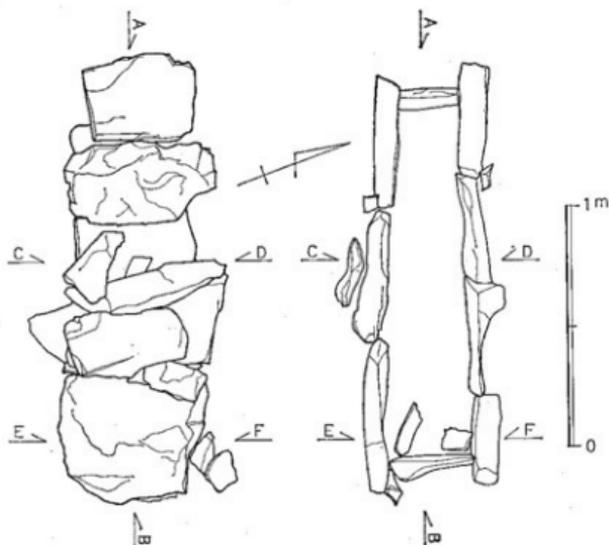
石棺内部は土砂の流入も少なく、よく原況を保っていた。石棺身部は扁平な長方形の板石を用いて構築している。小口石材を立てた後に両側石が両側に狭むようにして立て並べ、全体の上面を水平に揃えるように底部を埋め込んで、長方形の箱形に組み合せている。石棺内面は一部の側石が内傾してやや不整形となっている。側壁継ぎ目の上部と、蓋石の接する部分は、その間隙をふさぐとともに側壁の高さを揃えるように、粘土による目張り調整が丹念に行なわれている。石棺の計側値は石棺外法長151cm、同外法巾55cm、棺全高36cm、石棺内法長141cm、同内法巾30cm、深さ24cmを測る。

床面は地山と同質のきめのこまかな埋土で水平に整地した程度である。石棺内面は全体にうすく赤色顔料の広がり認められ、西側壁部分が特に顕著であった。このことから当石棺内面に赤色顔料の塗布が施されていたものと推察される。東小口部床面に棺材と同質の3個の小割り石を用いた枕石一組を検出したのみで、遺体および副葬遺物は何も認められなかった。

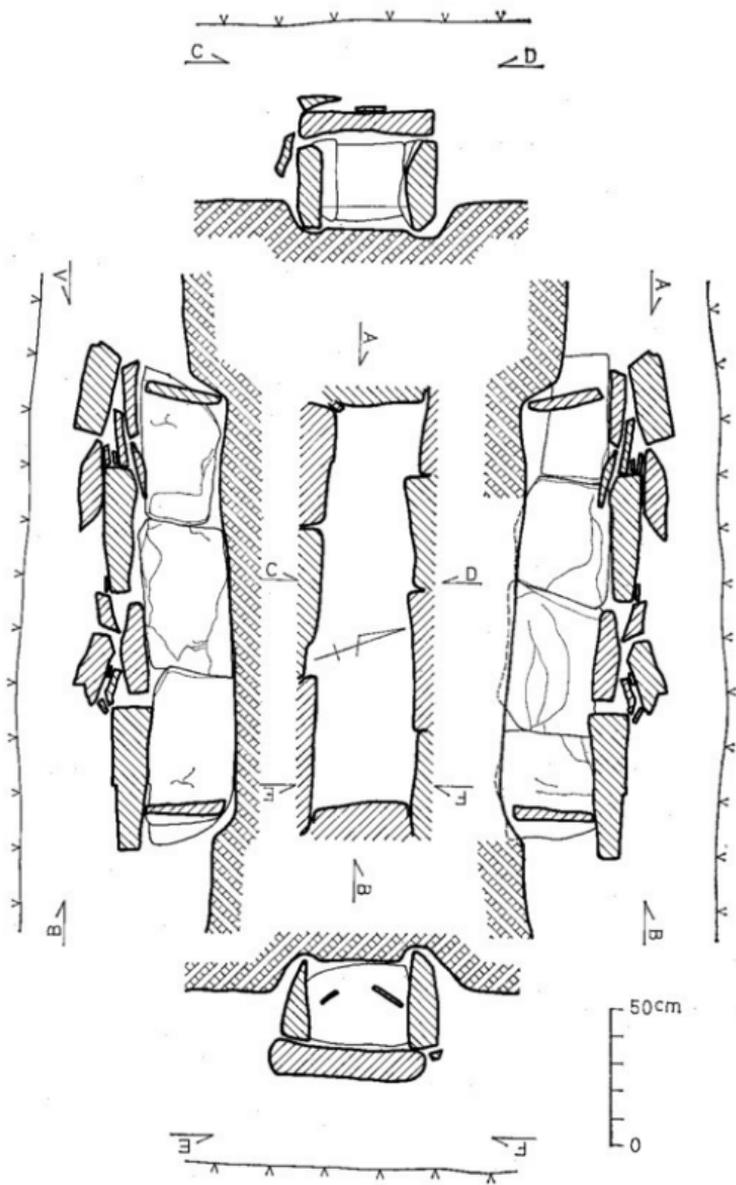
第2主体 (図14, 15・図版5)

第2主体は墳頂中央部北寄りに、第1主体から1.5mの位置に並列して築成された、組合せ式箱式石棺である。石棺の石材および構築手法は第1主体とはほぼ同様である。石棺は現墳頂表土下69cmに床面をおき、長軸中心線は尾根走向にほぼ直交する北70度西を指している。

蓋石の大きさは



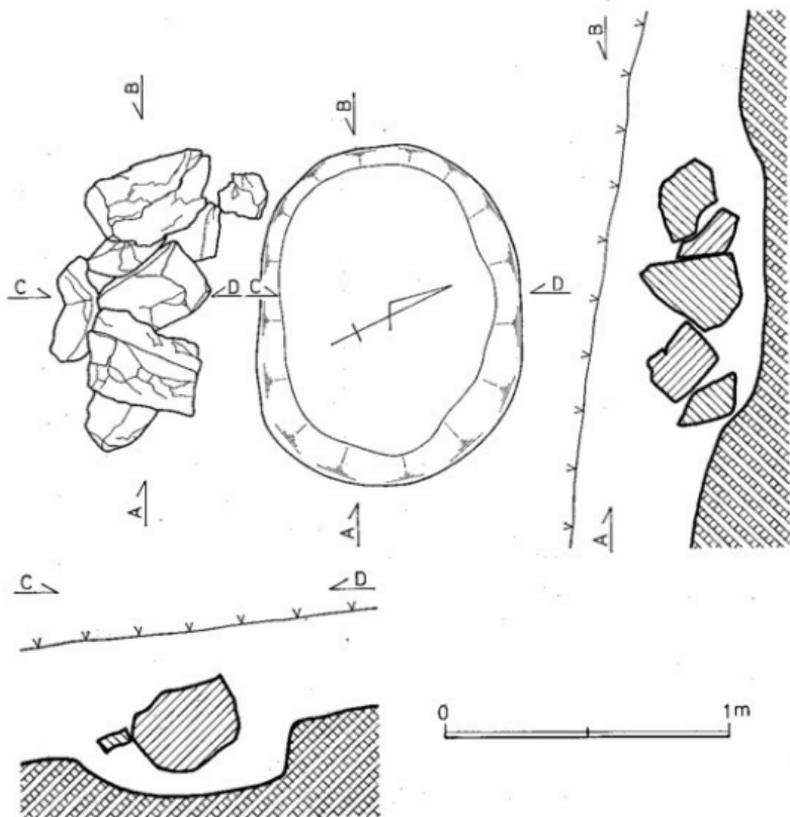
第14図 第2号墳第2主体実測図(1)



第15图 第2号墳第2主体实测图(2)

不揃いであるが、巾50cm、厚さ10cm程度の割り石を使用している。身部に接して長方形の板石4枚をわずかに継ぎ目をあけて並べ、その間隙の上側にやや小さめの石材を二重三重に重ねて蓋をしている。粘土の目張りは施されていない。蓋石の全長187cm、最大巾77cmを測る。

石棺内部は、調査時雨水の浸透で水溜り状態を呈していた。細い木の根が没入していたが、土砂の流入は少なく、側壁内面も整然とよく原況を保っていた。石棺身部は扁平な長方形の板石9枚を使用し、第1主体とはほぼ同巧同大の構築である。石棺外法長153cm、同外法巾50cm、全高35cm、石棺内法長144cm、同内法巾36cm、深さ24cmを測る。床面は枕石上面も含めて全体に厚さ1cm程度のきめのこまかな粘土質土壌の堆積がみられ、あるいは粘土床とした可能性も想定されるが、後の自然堆積の可能性もあって、現況では明確にできなかった。床面東小口部に、棺材と同質の小割り石2個を用いた枕石1組を検出したのみで、遺体および副葬遺物、その他赤色顔料などの施設は何も認められなかった。

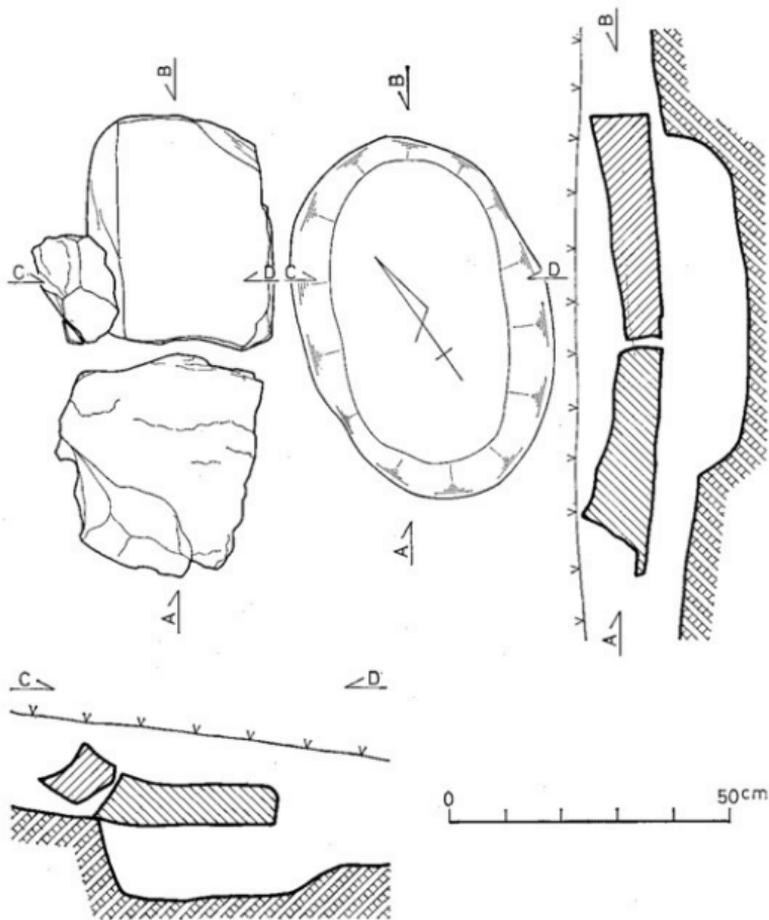


第16図 第2号墳第3主体実測図

第3主体 (図16・図版6)

第3主体は北周沖底の北西部、第1主体中心から北へ5.7mの位置に、尾根走行とはほぼ直交して埋葬された小形石蓋土壌である。周沖底の地山面を掘り込んだ長楕円形墓坑の上に、小形の自然石数個を蓋状に並置している。現況は墓坑の陥没ともなって石材も崩落したのか、やや不整然な形状を呈している。墓坑は現表土下58cmに床面をおき、長軸中心線の方位は北68度西を指している。

蓋石は付近の丘陵に産出する文象斑岩の長さ40cm、巾30cm、厚さ20cm程度の不整形な自然石を用



第17図 第2号墳第4主体実測図

いており、間隙をふさぐ小石や粘土などの使用は認められない。蓋石の全長95cm、最大巾50cmを測る。

墓塚は周濠中心部に向けて南に傾斜する地山面を長楕円形に浅く掘り込んでいる。地形の高い北側は深く南側は浅い。長軸中心線の断面は上向きのゆるい拋物線を示している。現状で掘り込み上端が確認できる現地山面での計測値は、長さ120cm、巾91cm、深さ22cmを測る。墓塚内部は床面より約10cm程度の二次堆積層があり、その上に蓋石が墓塚内に落ち込んだ状態で埋没していた。遺体枕石および副葬遺物等は何も検出されなかった。

第4主体 (図17・図版6)

第4主体は、南東墳端部の周濠底に構築された小形石蓋土墳である。第1主体石棺から南東6mに位置する。周濠底の地山面を掘り込んだ墓塚で、現表土下63cmに床面をおいている。長軸中心線は尾根走向にほぼ平行する北17度東を指している。墓塚の北西90cmの位置に土師器埴2個を検出した。

蓋石は長さ35cm、巾32cm、厚さ9cm程度の扁平な文象斑岩の板石2枚を選んで使用し、埋め戻した土墳の上にはほぼ水平に整然と配置されている。蓋石の全長66cm、最大巾36cmを測る。

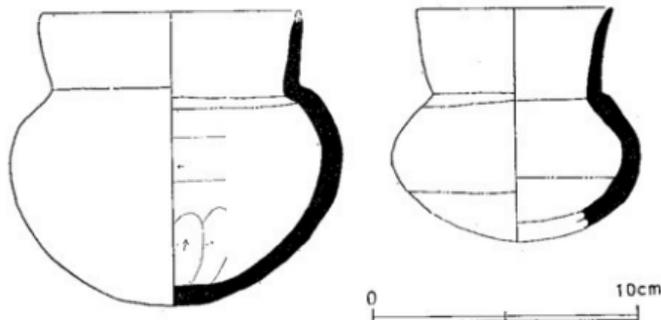
墓塚は墳端斜面の周濠地山面を長楕円形に浅く掘り込んでいる。地形の高い西側は深く東側は浅い。南北長軸中心線の断面は上向きのゆるい拋物線を呈している。おそらく周濠埋土中から掘られたものと思われるが、現状からはその上端は不明である。現地山掘り込み面での計測値は、長さ66cm、巾30cm、深さ12cmを測る。墓塚内部からは、遺体、枕石および副葬遺物は何も検出されなかったが、墓塚中心から北西90cmの位置に、ほぼ完形の土師器小埴2個が現地山面に、口縁部を上にして南北に並べ意識的に置かれた状態で出土した。本主体に供献された棺外副葬と考えられる。

3. 出土遺物 (図18・図版20)

本古墳の出土遺物はきわめて少なく、第4主体の棺外に副葬された土師器埴2点のみである。

埴(1)は、扁球形の体部にやや外傾する直口頸のつく小埴である。胴部の最大径は体部のほぼ中央にあり、径9.4cm、器胴高5.7cm、口径7.4cm、頸部径6.4cm、口頸高3.2cm、全高8.7cmを測る。器表の荒れが著しく、仕上げ調整の手法は明らかでないが、なで調整が施されていると思われる。口縁部内面はややいいない横なで調整が認められるが、器胴内面は粗雑ななで調整で凹凸を多く残している。胎土に3mm大の礫を多く含み、焼成は軟質で、色調は暗灰褐色を呈している。やや扁平な丸底の底部中心から横側へ径4.5cm×3cmの円孔があり、焼成後にうちかいて開けられたものと思われる。

埴(2)は、口縁の一部を欠いているがほぼ完形にちかいもので、埴(1)よりわずかに大きく同巧のつくりである。球形の体部にくの字形に外反する頸部をもつ小埴である。胴部の最大径は中央よりわずかに上方にあり、径12.5cm、器胴高8.3cm、口径10cm、頸部径9.4cm、口頸高2.9cm、全高11.1cmを測る。器表の荒れが著しく、仕上げ調整の手法は判然としませんが、なで調整が施されていると推察される。胴部内面はへら削り調整が施されている。胎土に3mm大の砂礫を多く含み、焼成は軟質で色



第18図 第2号墳第4主体周辺土師器

圖は淡褐色を呈している。丸底の底部中心から横側に径4cm×5cmの円孔と、胴部中央より上方に径2.1cm×2.6cmの円孔があり、共に焼成後にうちかいで貫孔したものである。

これらの土器は、岡山県山陽町用木第5号墳出土のものと同様している。

第3節 築成年代

本古墳は、築成年代を知る手がかりとなる伴出遺物が少なく、特に中心主体からの副葬遺物が皆無であり、築成年代を明確にすることはできない。しかし本古墳が丘陵尾根を切って墳域を画する方墳であることや、中心主体の構造、第4主体出土土器、また同一丘陵上に立地する第3号墳以下第8号墳までの類似する古墳の状況などを総合して、一応5世紀代の所産と推定することができる。

なお、今回発掘調査を実施した古墳群の築成年代ならびに若干の考察については、岩井山古墳群総括として章を改めて記述する。また、本古墳の発掘調査中、墳丘直下にあたる丘陵削平整地面に複合立地する、弥生時代竪穴式住居址1棟を発見し調査を行なった。もともと竪穴式住居址の営なまれた整地面を利用し、その上に本古墳が築造されたものと考えられる。このような例は、第8号墳および第9号墳の間に検出された住居址にもみられるが、後にまとめて記述することとする。

(則武忠直)

第3章 岩井山古墳群第3号墳

第1節 立地と調査前の概況

岩井山古墳群第3号墳は、岩井山丘陵の南へ延びる馬の背尾根の、標高92.5m付近の巾狭な鞍部に立地し、第2号墳の南に墳域を画する周溝を共有する形で隣接して所在する。したがってその立

地は第2号墳と同様で、眼下の水田よりの比高約46.5mを測る(図10, 11・図版3)。

本古墳の周辺は、発掘調査が行なわれるまでは第2号墳同様自生の松林であった。事前の分布調査によって、径10m前後の低平な小円墳と推定されていた。墳丘表面は盗掘痕もなく、風化による若干の封土流失はみられるが、ほぼ原況を保つ未掘墳と思われた。

第2節 調査の結果

1. 外形

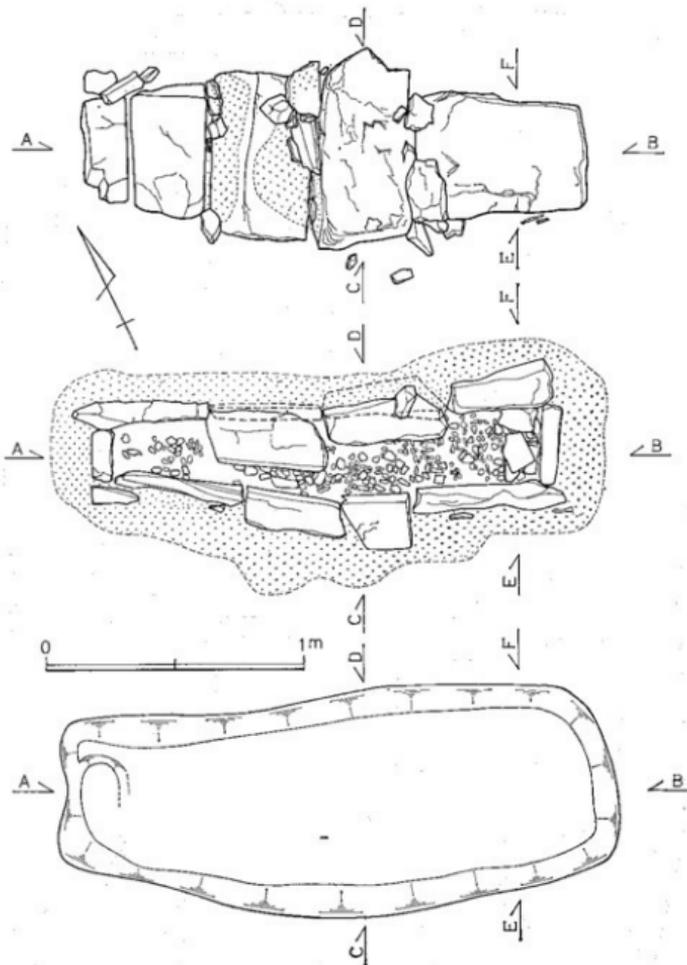
本古墳は丘陵尾根走向に沿って長辺をもつ、径9.6m×8.7m、高さ0.8mの小規模な方墳である。丘陵尾根の自然地形の高まりを利用して、削平整地した方形の墳丘基盤を造成している。第2号墳と接する北側に、尾根走向と直交する溝を掘り込んで、墳域を画するとともに、その土を盛りあげて截頭角錐形の墳丘を築成している。溝は地形の高い北側にだけ掘られており、その他の部分は自然地形に若干の整形を施した程度で、墳域および墳端部の境界は判然としない。墳丘盛り土は現墳頂表土面から地山削平整地面まで35cmを測り、周溝の埋没状態などからみても封土はかなり流失したものと推察される。葺石などの外表施設は認められない(図12)。

2. 埋葬施設

本古墳の内部主体は、墳丘中央部に尾根走向に直交して築成された、組合せ式箱式石棺1主体である。石棺は付近の丘陵に産出する石英斑岩および文象斑岩の扁平な板状割り石を使用し、墳丘地山整地面を石棺の大きさに合せ、長方形プランで長さ212cm、巾87cm、深さ平均約35cmの基壇を掘り、その中へ長方形の組合せ式箱式石棺を構築している。石棺は現墳頂表土下58cmに床面をおき、長軸中心線は北64度西を示している(図19, 20・図版7, 8)。

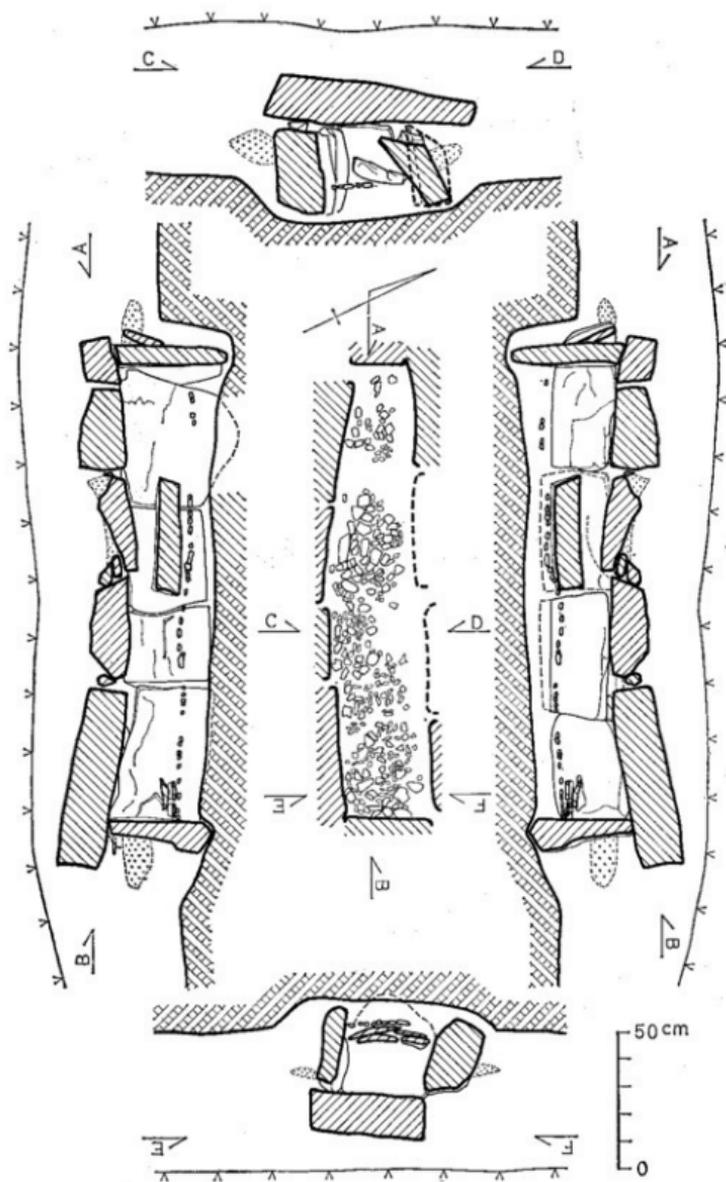
現墳頂表土面からわずかに10cm程度の深さで石棺蓋石上面を検出した。蓋石は長さ60cm、巾40cm、厚さ15cm程度の長方形の割り石5枚を使用し、下側の面を揃えて並置している。中央部の蓋石は、身部の側石が内側へ倒れた上に重なって落ち込んだ状態を呈している。蓋石の継ぎ目には小割り石を置いて間隙をふさぎ、さらに青灰色の粘土で目張り調整を施している。目張りは概して粗雑であるが、中央蓋石部分だけは多量の粘土を使用していいいに目張りを施し、蓋石上面のほぼ全体に粘土がおよんでいる。蓋石の全長193cm、最大巾75cmを測る。

石棺内部は天井石の面まで土砂が流入しており、中央側石の倒れた部分は蓋石が落ち込んだ状態で埋没していた。石棺身部の構築は第2号墳第1主体と同様手法であるが、石材の大きさが不揃いで、不整形なものも使用されている。そのため北側中央部側石2枚は土工によって内側へ倒れており、南西隅の側石は小口石まで連せず、小割り石を補足しているなどやや粗雑な構築である。側石継ぎ目の上部と蓋石の接する部分は、石棺身部上面の周囲全体に巾15cm程度の粘土調整が施されている。石棺身部の計測値は、石棺外法長184cm、同外法巾63cm、全高約50cm、石棺内法長166cm、同中央部内法巾30cm、深さ23cmを測る。枕石の置かれた東小口の内法巾32cmと広く、西小口の内法巾19cmと狭くなっており、枕石の存在する遺体頭部の石棺巾を足部より広く構築している。



第19図 第3号墳第1主体実測図(1)

床面東小口部は、流入した土砂が黒褐色を呈し球形の空洞状となっており、遺体の頭蓋骨が腐朽したものと推察された。床面は水平で、地山と同質の埋土で整地した上に、指頭大の小角礫をやや密に敷いた礫床である。東小口部の床面に接して小割り石5個を置き、さらにその上に小割り石2個を並べて置いた枕石1組を検出した。枕石上部の黒褐色腐蝕土から遺体の存在が推定されるが、床面には遺体および副葬遺物は認められなかった。また赤色顔料なども施されていない。



第20图 第3号填第1主体实测图(2)

棺外東南隅の蓋石側面に接して鉄斧および刀子状鉄器各1点が出土し、さらに東小口側石の上面に鉄鎌1点が検出された。棺外副葬として遺体頭部側方に供献されたものと推察される。

3. 出土遺物 (図21・図版20)

本古墳の葬送にともなう供献遺物は、きわめて簡素である。棺外副葬として蓋石に接して検出された、鉄斧および刀子状鉄器と鉄鎌の計3点のみである。

鉄 斧

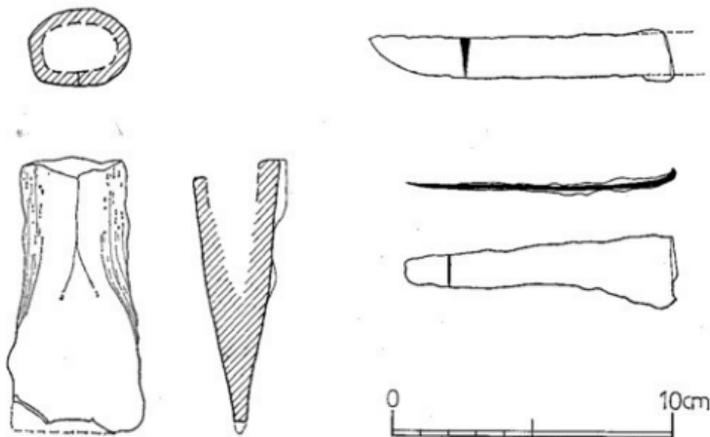
錆化が著しく、刃部先端を若干欠損しており、遺存度はやや不良であるがほぼ原形を保っている。鍛造による作りで、刃部はわずかに外ふくらの直線状を呈し、下部全体は合形となっている。頭部は左右から抱き合せて袋状の蓋をつくる。つき合せ部はよく密着しており楕円錐形の袋状を呈する。蓋内部は土砂が錆着し着柄部の状況は不明である。鉄斧全長9.8cm、蓋上端外法長径3.6cm、同短径2.7cm、同内法長径2.7cm、同短径1.7cmを測る。刃部巾は一部欠損するが約4.7cmと推測される。側面は左右相対で鋭角二等辺三角形を呈し、刃部から漸移的に上端に広がる。やや小形で總体的に均整のとれた形態を示す。

刀子状鉄器

鉄斧とともに出土したもので、刀子とみられるが錆化が著しく、切先部分のみの出土で原形は不明である。鍛造による作りで切先部がわずかに曲っている。現存長10.8cm、刃部巾1.5cm、背厚0.4cmを測る。刃部断面は鋭角の二等辺三角形を呈する。柄部は欠損して不明である。

鉄 鎌

錆化が著しく、三つに折損しており遺存度は不良である。薄い長方形の平板鉄の一端を折り曲げたつくりで、刃部の中央がわずかに内湾する。柄部は巾広く先端になるにつれて巾狭となる。錆化のため計測値は正確とはいえないが、現存長9.7cm、最大巾2.6cm、先端部巾1.1cm、厚さ2mmを測る。



第21図 第3号墳出土鉄器実測図

第3節 築成年代

本古墳は伴出遺物が少なく、築成年代を明確にすることは困難である。しかし本古墳の形状および内部主体の構造、副葬された鉄器ならびに同一丘陵上に立地する同種の方墳の状況などから総合して、5世紀代の所産と考えられる。隣接する第2号墳との先後関係も明確にし難い。

(則武忠直)

第4章 岩井山古墳群第4号墳

第1節 序 説

岩井山古墳群第4号墳は、御津町伊田字岩井953番地の、新庄川流域に形成された小規模な沖積平地を眼下に臨む、丘陵尾根支脈突端部に立地する方墳である。

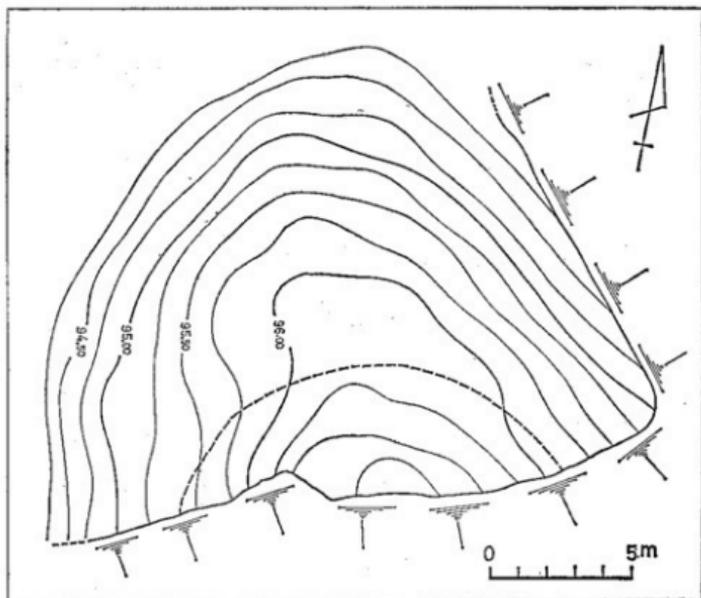
当該地は昭和46年ごろから地元土木業者の採土場となり、丘陵南麓部から尾根支脈稜線にかけて大きく切り崩され、最大比高約40mの絶壁状崩面となっていた。ところが昭和48年1月に崖崩れがあって、尾根突端部に立地する本古墳の墳丘南半部が、内部主体の組合せ式箱式石棺とともに崩落し石棺が崖面に露呈したことから、本古墳群発見の契機となった。

このことは、山陽町教育委員会に勤める神原の通勤途上に所在することからそれに気付き、御津町教育委員会と岡山県教育委員会文化課に連絡した。昭和48年1月23日、当時岡山県教育委員会文化課文化財二係長であった岡本明郎氏と、御津町教育委員会社会教育主事内田誠也氏と共に現地に赴いたが、古墳はすでに墳丘の大半が崩落し、開口して見えた箱式石棺も原位置から約1.5m下方にずり落ちて、段差も著しく危険のため調査不能と判断した。そのため当日は現状写真撮影と石棺残存部の略測、それに一部遺存していた被葬者人骨の採集にとどめた。

なお周辺部の分布調査の結果、当丘陵尾根支脈上には、さらに数基の古墳が近接して直列状に連なり、一支群を構成していることがわかり、御津町教育委員会に現状保存するよう要請した。その後御津町教育委員会と土木業者の間で協議が重ねられ、一応採土工事を中止して現状保存の了解が得られた。

ところが翌昭和49年春になって、当該地を含む岩井山丘陵一帯が、御津住宅団地開発事業用地として、山一建設株式会社に用地買収され、本古墳群の取り扱いがふたたび問題となり、関係機関で協議の結果、今回の発掘調査となったのである。

この間、昭和49年5月には再度当該地が崩落して、遺存していたもう1主体の組合せ式箱式石棺が半壊した状態で露呈した。御津町教育委員会から要請を受けた岡山県教育委員会文化課は、文化財保護主事萬原克人、同枝川藤、同下沢公明の3氏を同年5月23・24日の両日現地に派遣して、当該石棺の応急調査を実施して、人骨1体分と鉄剣1振りを検出した。本古墳は現状からみてさらに崩落するおそれが強いと、露呈した石棺は近在の御津町立五城小学校に移築保存することになり、同年11月22日に前記萬原文化財保護主事の指導のもとに解体移築を実施した。



第22図 第4号調査前外形現況図

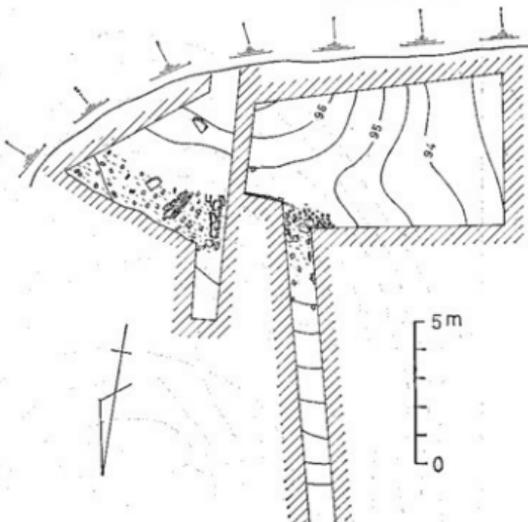
今回の発掘調査は、近在の第2号墳～第8号墳の発掘調査とともに併行調査を実施したが、主に本古墳の調査に要したのは、昭和50年5月27日から同年6月4日までの期間である。今回の調査では僅かに遺存する墳丘北半の墳丘裾部と周濠状溝遺構の一部のみであったが、これにより墳丘規模と墳形の概要を推察することができた。前記2回にわたる応急調査の見聞と、岡山県教育委員会文化課の好意で提供された調査資料をもとに、本古墳の概要を記してその責を果たしたい。なお本古墳出土の人骨については、京都大学池田次郎教授の鑑定結果を玉稿としていただき、後章に稿を改めて掲載したので参照願いたい。

第2節 立地と調査前の概況

本古墳は、岩井山丘陵の南へなだらかに下降して延びる尾根支脈が、ふたたび隆起した標高97.7mの丘陵尾根突端部頂に立地する。本古墳の北尾根に第3・2号墳、西南に下降する尾根上に第5号墳～第9号墳が直列状に連なって群在している。南眼下を流れる新庄川の沖積平地および谷間の扇状地に開けた伊田地区の水田を一望できる立地を占め、眼下の水田との比高約52mを測り、本古墳支群中最高位を占めている。

しかし、本古墳の現状は前節でも述べたとおり、土砂の採土工事により大きく切り崩され、墳丘

の大部分はすでに内部主体もろとも崩落して、僅かに北墳裾部の一部と、周濠状の溝遺構の痕跡が認められる程度で、比高約45mの絶壁状の断崖上に無残な姿を曝していた。したがって発掘調査開始前の地形測量時の外面観察では、径12m前後の規模をもつ古墳であったであろうと推定はされるもの、円墳とか方墳等の墳形の判別もできない状況であった(図22・図版9)。



第23図 第4号墳調査後地形図

第3節 調査の結果

1. 外形および外部施設

本古墳はすでに墳丘の大部分

が崩落し、僅かに北墳端部と周濠状溝遺構の一部分が残存するのみで、原形の詳細については明らかでない。当初の地形測量の段階では、墳端部が円弧状に繞り、円墳と推定していたが、発掘調査の結果、北墳端部外方の周濠状溝遺構および西墳端部外方の丘陵尾根削平整地帯が、ともに尾根走向に直交して直線状に施設されているところから、本古墳の外形は一辺約12m程度の方墳であったことが判明した。墳丘の高まりについては現状からは明らかでないが、後に述べる第2主体蓋石上方に約55cmの被土が存在していたことなどから推察して、もとは1.2mないし1.5m程度の墳高と推定される。

北墳端部の周濠状溝は、巾約2m、深さ約0.5mで堅い岩盤を掘り込み墳域を画している。墳丘および周濠状溝内から若干の土師器小断片を遊離検出したが、本古墳葬送との直接的な関係は不明である。その他葺石等の外部施設は何も認められなかった(図23)。

以上を総合して本古墳の築成を推考すると、本古墳は丘陵尾根突端部の自然地形の高まりを利用して、若干の盛土と整形を施した程度の構造であったと考えられる。すなわち、丘陵部を築造しようとする古墳の規模と形態に合わせて、一度方形に削平整地して墳丘基盤をつくり、地形の高い北墳端部は尾根走向に直交する溝を掘り、地形の低くなる西墳端部は墳形に合わせて削平整形して、墳域を画するとともにその土を盛って墳丘を整えた、小規模な截頭角錐形の方墳と推察される。

2. 内部主体

本古墳の内部主体は、墳頂中央部に並列する2基の組合せ式箱式石棺と推定されるが、今回の発掘調査の時点では、いずれもすでに崩落消滅して調査できなかった。本古墳は昭和48年1月と

昭和49年5月の2回にわたって崩落し、昭和48年に第1号棺、昭和49年に第2号棺が崖面に損壊露呈した。その度に岡山県教育委員会文化課の担当職員が現地へ急行して、応急調査を実施され、今回はその調査資料の提供をいただき、今次発掘調査ならびに当時の見聞をもとにして、本古墳内部主体の概要を記述する。

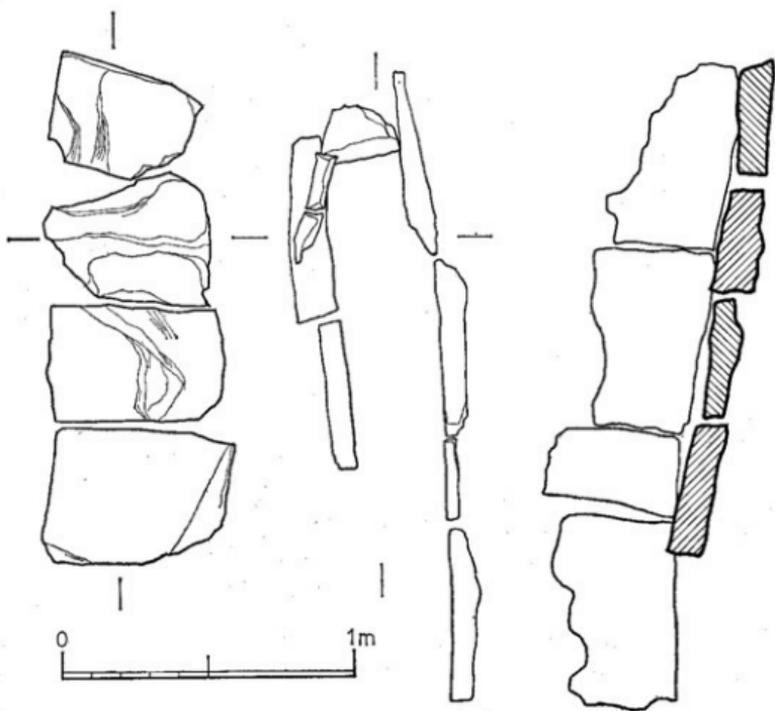
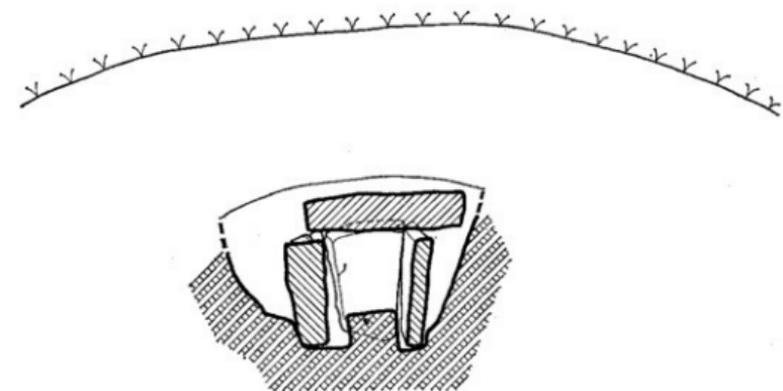
本古墳の内部主体は、崩落の都度初めてその存在が判明したこともあって、正確な位置や主軸方位、また埋葬された先後関係等の詳細は不明である。墳頂中央部に尾根主軸と直交して、主体長軸をほぼ東西に向けて第1号棺が埋葬され、その北側約1.4 mに第2号棺がそれと平行して埋葬されていたものと推定される。両棺とも墳丘盛りあげ前の丘陵頂削平整地面から掘り込まれた、隅丸長方形の墓壇内に、当丘陵に産出する石英斑岩および文象斑岩の、扁平な板状割り石を用いて、長方形箱形の組合せ式箱式石棺を納めている。各棺とも崩落状況での検出のため、その先後関係および墓壇の掘り込みが、墳丘築成後に掘られたものか、または丘陵頂削平整地時に、墳丘盛りあげに先行して埋納されたものかの識別はできなかった。

第1号棺は昭和48年に本古墳が崩落した時、すでに石棺全体が原位置から約1.5 m下方の崖面にずり落ちた状態で検出され、箱式石棺の東小口部約3分の1程度が原況を保ち、その他の石材はさらに下方の崖面にばらばらになった状態で散在していた。現存部の現状から、厚さ10 cm程度の扁平な板状の長方形割り石を用いて、比較的に整然と組まれた長方形箱式石棺と認められたが、危険なため精査はできなかった。現存部での外法巾52 cm、内法巾34 cm、棺内法高29 cm、現存棺内法長60 cmを測るが、もと長さ約2 m前後の箱式石棺と推定される。蓋石は1枚のみが残存していたが、他に蓋石と推定される石材3枚が転落遊離しているところから、原形は4～5枚の蓋石で構成されたものと思われる。

棺床面はほぼ水平に整地されているが、礫床とか粘土床の施設は認められず、当該地を形成する花崗岩煤乱土である。棺割石材の下方は、石材の形状に合わせて深さ約10 cm～13 cmの溝状に掘り込み、石材を固定するとともに、棺側の高さを一定に調節したものと考えられる。現存棺内の東小口部に仰臥伸腿葬の形状で被葬者頭骨1体分が検出され、さらに下方崖面からも遊離散在する若干の遺骨を発見採集した。おそらく東枕にして埋葬されていたと考えられる。その他枕石等の葬送施設および副葬品は何も検出されなかった。現存棺内壁全面に赤色顔料の付着が見られ、遊戯からも検出されるところから、もと棺内全面に赤色顔料の塗布が施されていたものと推定される。

第2号棺は昭和49年崩落の際、崖面に損壊露呈した。箱式石棺の東小口はすでに崩落消滅し、石棺全体も地崩れによって東へかなり下傾していたが、ほぼ原況を保っていてその大要を知ることができた(図24)。棺の石材および構造は先の第1号棺とほぼ同巧である。

棺は東小口部を欠損して、蓋石は4枚が遺存するが、もとは5枚の蓋石で構成されていたらしい。蓋石は巾60 cm、長さ60 cm、厚さ10 cm程度の、比較的形の揃った長方形割り石を選んで並置し、その上面全体をやや粘質の黄褐色土で約8 cmの厚さで覆っていた。現存蓋石全長175 cmの両端部での比高27 cmと下傾を示している。棺身部は墳丘築成前の丘陵頂削平整地面から直接地山生き土面に掘り込んだ、推定長約240 cm、巾約85 cm、深さ平均32 cmの隅丸長方形墓壇内のほぼ中央に、長方形箱形に組まれている。西小口部内法巾22 cm、中央部外法巾45 cm、同内法巾32 cm、推定内法長170



第24圖 第4号墳第2主体実測圖

cm, 棺内法高30cmを測る。棺の長軸方位は、本古墳崩落時の地削れによる移動が考えられるため、計測を避けほぼ東西と指適するにとどめる。なお正確さにやや欠けるが、現存地山表土面と蓋石上端との比高は55cmを測った。

棺内床面に、保存度はさして良好とはいえない被葬者人骨1体分を検出した。その配置状況から、東小口部に頭位を置いた仰臥伸展葬と推察されるが、東小口部が崩落しているため、頭骨および枕石等の施設を検出することはできなかった。棺側北壁の石材に接してほぼ棺内中央の床面、すなわち被葬者の右体側にあたる部分に、切先を西に向けて鉄剣1振りが副葬されていた。なお本石棺内面に微かにではあるが赤色顔料が認められ、もとは棺内全面に塗布されていたものと考えられる。

3. 出土遺物

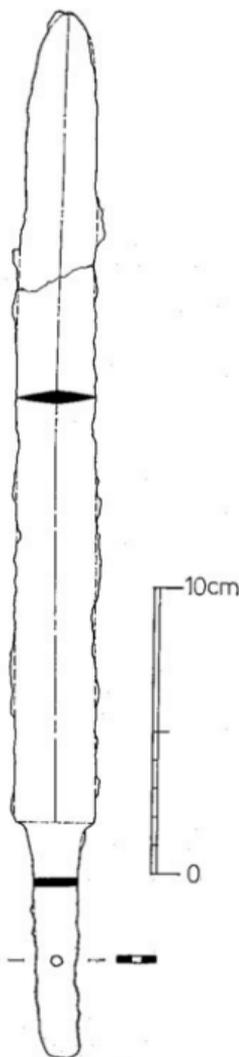
本古墳出土の遺物は、第2号棺床面出土の鉄剣1振りと、墳丘および周濠状溝遺構内から遊離出土の土師器断片若干である。

鉄剣は錆化折損しているが、保存状況は比較的良好で、接合によりほぼ完形に復元できた。鍛造によるつくりである。全長36.6cm, 刃部長28.6cm, 茎部長8cmを測る。刃部は背中心線に弱い鋸をもち、胴部から切先にかけて漸移的に細まる左右対称のつくりで、横断面は扁平な菱形を呈する。刃部中央部での刃巾2.75cm, 鎧厚0.6cm, 胴部での刃巾2.85cm, 鎧厚0.7cmを測る。胴部は明瞭に角度をもって茎部とは区別され、直角に近い段差を示す。茎部は横断面扁平な長方形を示す平鉄で、末端になるにつれて巾が狭くなる形状を呈し、茎部端から3.5cmの茎中央に目釘円孔1穴を穿っている。茎部胴付根部巾1.9cm, 末端部巾1.3cm, 厚さ0.4cm, 目釘孔径0.3cmを測る(図25・図版20)。

土器片はいずれも小断片で、高坏と思われる1片を除いては器形の判別も困難なほどである。高坏片は明るい黄褐色を呈し、胎土に砂礫を多く含む焼成も普通であるが、器表の荒れが著しく詳細は不明である。出土状況から推して、本古墳との直接的な関係についても明確でないため、出土状況の指察にとどめたい。

第4節 本古墳の築造年代

本古墳の築造年代を知る大きな手がかりとなる副葬遺物の出土も少なく、また発掘調査時すでに内部主体も含めて墳丘の大部分が消



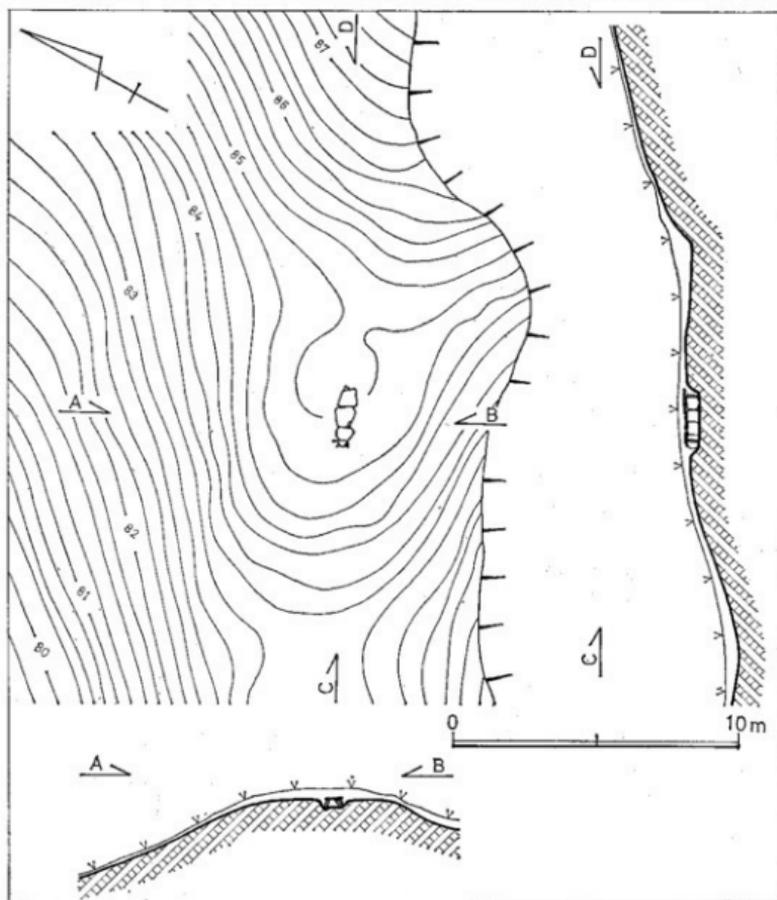
第25図 第4号墳出土の鉄剣

減していたため、その年代を明確にすることは困難である。本古墳の立地および墳丘の築成、内部主体構造および副葬の鉄剣、さらには同一丘陵上に所在する当岩井山古墳群等類似古墳との関係などから推察して、一応5世紀代の所産と考えられる程度である。(神原英朗)

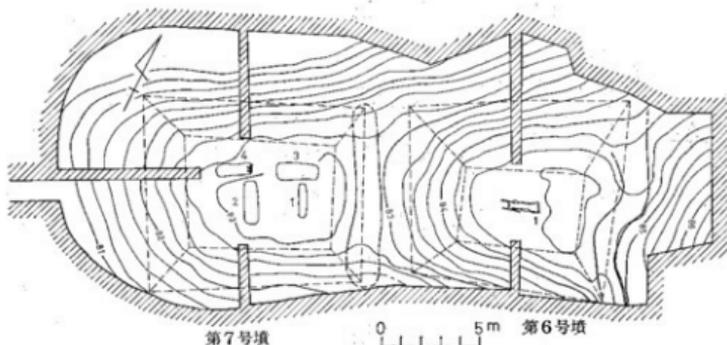
第5章 岩井山古墳群第6号墳

第1節 立地と調査前の概況

岩井山古墳群第6号墳は、岩井山丘陵尾根突端部の第4号墳が所在する標高97.7mの丘陵頂から



第26図 第6号墳調査前外形図



第27図 第6・7号調査後地形図

西南へ下降して延びる尾根稜線上の標高85mの位置に立地する。第4号墳から約50mの距離にあり第7号墳の東に直列状に隣接して所在する方墳である。眺望はきわめてよく南の伊田地区全域の水田地帯を一望することができる。眼下の水田よりの比高39mを測る。

本古墳は発掘調査が行なわれる以前、丘陵尾根南側を採土工事によって削り取られ、南墳端部は約30mの崖状となってようやく墳丘を残す状況であった。古墳の周辺は自生の松林で事前の分布調査で、径10m前後の小円墳と推定されていた。墳丘表面は空掘痕もなく若干の封土流失はみられるが、ほぼ原況を保つ未墳壘と思われる(図26・図版10)。

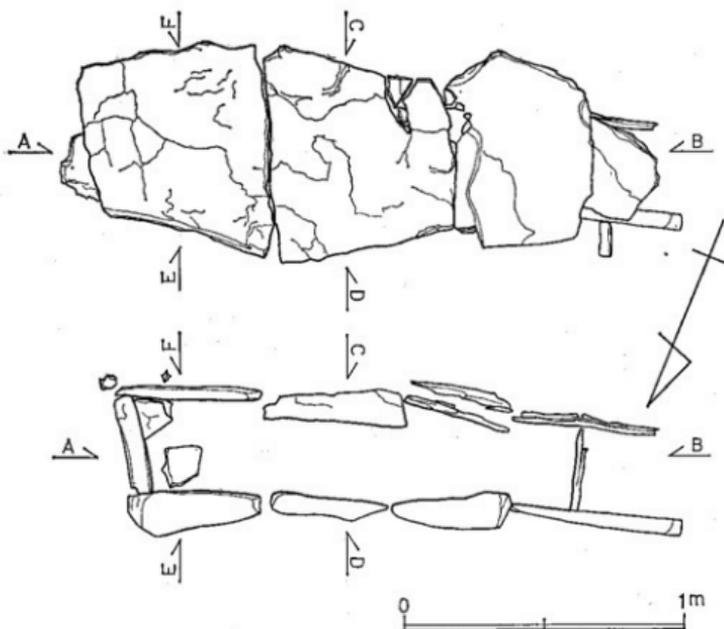
第2節 調査の結果

1. 外形

本古墳は、丘陵尾根走向に沿って長辺をもつ、墳端部長10.8m×9.6m、墳頂平坦部長6.2m×4m、高さ1.3mの小規模な截頭角錐形の方墳である。丘陵尾根の自然地形の高まりを削平整地して方形の墳丘基盤を造成し、地形の高い東側に尾根走向に直交する巾1.3mの溝を掘り込んで、墳域を画するとともにその土を盛りあげて墳丘を築成している。他の部分は自然地形に若干の整形を施した程度で、墳域および墳端部の境界は判然としな。墳丘盛り土は現墳頂表土面から地山削平整地面まで36cmを測る。周濠の埋没状況などからみて封土はかなり流失したものと推察される。周濠底中央部から遊離した状態の小鉄器を検出したが、本古墳に供献されたものかどうか明らかでない。葦石などの外表施設は認められない。

2. 埋葬施設

本古墳の内部主体は、墳丘中央部に尾根走向に平行して築成された。組合せ式箱式石棺1主体である。石棺は、当丘陵に産出する文象斑岩を主体に若干の石英斑岩を用い、墳丘中央部の地山整地面を長方形プランで掘り込んだ、掘り込み上面の長さ228cm、中央部巾89cm、底面長205cm、巾60cm、深さ40cmの墓室内に構築している。石棺は現墳頂表土下60cmに床面をおき、長軸中心線は北70



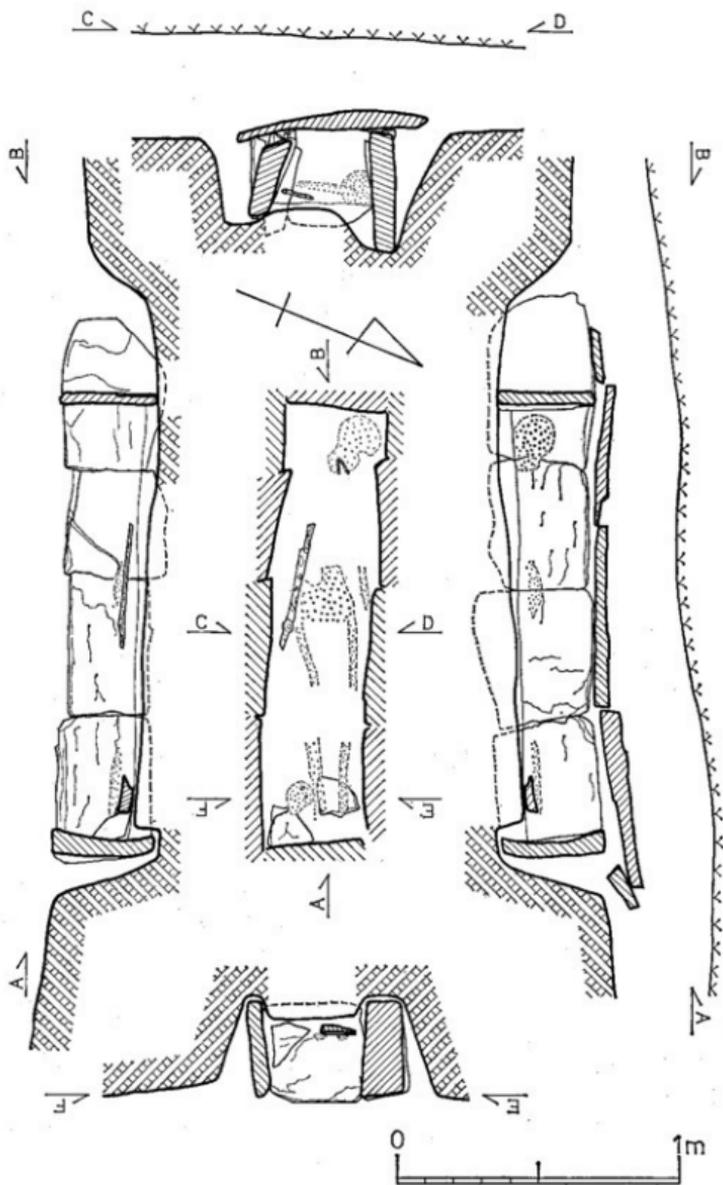
第28図 第6号墳第1主体実測図(1)

度東を指している(図28, 29・図版11)。

現墳頂表土面から28cm程度の深さで石棺蓋石上面を検出した。蓋石は長さ65cm, 巾60cm, 厚さ5cm程度の薄い板状割り石3枚を選んで使用し, 下面を揃えて並置している。継ぎ目はよく密着して間隙は少なく, 2, 3個の小石を詰めているが, 目張り粘土の使用は認められない。蓋石の全長212cm, 最大巾78cmを測る。

石棺内部は土砂が流入して蓋石の下面まで埋没しているが, 攪乱された様子はみられなかった。石棺の構築手法は前述の第3号墳とほぼ同様である。石棺内面は南中央部の側石が内傾しており, 全体に不整形となっている。石棺身部の計測値は, 石棺外法長167cm, 同外法巾56cm, 全高34cm, 石棺内法長156cm, 同内法巾36cm, 深さ30cmを測る。

床面は地山生き土と同質の花崗岩風化土を厚さ約4cmばかりを入れて整地した程度でほぼ水平面を保つが, わずかに地形の低い南西に下傾し, 両小口間の比高約4cmを測る。棺内床面の東西両小口部に, それぞれ1体分の頭骨が検出され, 本主体には少なくとも2体の被葬者が葬られたことを物語っている。東小口に頭位を置く遺体は, 小割り石2個を用いた枕石上に頭骨を検出したが, 遺存度が悪く現況では, 頭骨部分片と数本の歯が遺存する程度であり, その他の遺骨は若干の大腿骨片を除いては, すでに腐朽して殆んど検出することができなかった。西小口に頭位を置く遺体は, 前者に較べて遺存状態は良好で, 頭骨は棺西北隅に横臥した状態で検出されたものの, 大腿骨およ



第29图 第6号坟第1主体实测图(2)

び脛骨等は棺床面中央に自然体身展葬で埋納された形態をよくとどめている。両遺体の埋納形態を比較してみると、東頭位の遺体は枕石を有してはいるものの、南側壁寄りに後に片寄せられた形態を示し、また東枕石頭骨の上位に、西頭位被葬者の脛骨がのるなど、西頭位の遺体が後から棺中央に埋納された形態を示している。しかしこのことは単に物理的な先後関係を示すものであって、両被葬者の同時埋葬を否定し得るものではないが、両者の遺骨の遺存度および体位とその位置などから判断して、ある程度の期間において追葬された可能性が強いのである。なお、本古墳出土の人骨については、京都大学理学部、池田次郎教授の鑑定をいただき、第9章に掲載しているので参照願いたい。

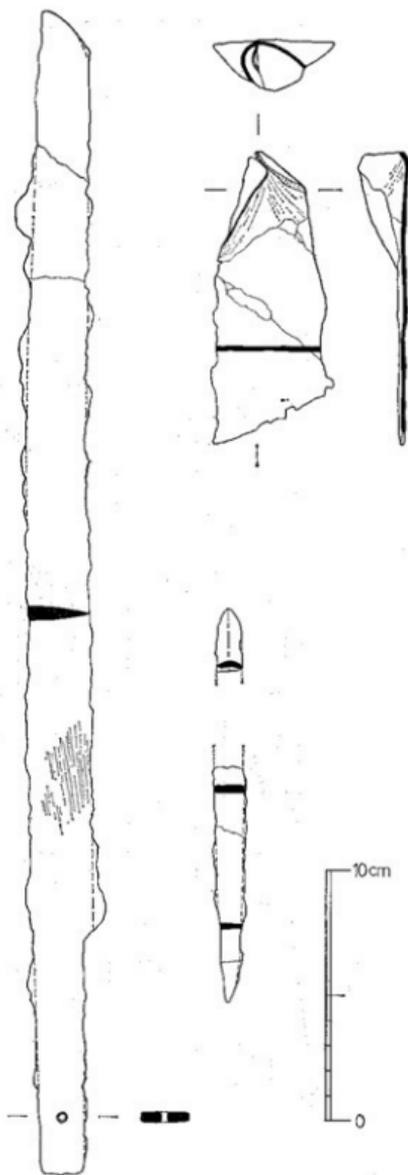
石棺中央部の南側壁に接して直刀1振が検出された。錆化が著しいが、刀身は完形を保っている。切先を東に向け、刃部を南にして切先は側壁に接し、柄部は石棺中心に近く、やや斜めに置かれている。西に頭位をおく遺体の中央部脛骨に沿うように、その下から検出された。おそらく西頭位の被葬者に装着されたものと推察される。この他に副葬遺物等は何も検出されなかった。粘土や赤色顔料の使用も認められなかった。

3. 出遺物土

本古墳の葬送にともなう供献遺物はきわめて簡素で、石棺内に副葬された直刀1点のみである。なお周壙底から出土した小鉄器3点は、本古墳に副葬されたものとは決め難いが、一括して記述する(図30・図版2)。

直刀

石棺内に副葬されたもので、錆化折損しているものの保存は良好ではほぼ完形を保つ。錆化が著しく明瞭でないが木質痕が部分的に認められ



第30図 第6号墳出土の鉄器

もと木箱に納めて埋納したものと思われる。細身の刀身で、全長46.6cm、刀身長37.2cm、茎長9.4cm、刀身部巾は切先に近い部分で2.1cm、胴部に近い部分で2.5cm、背厚0.6cmを測る。刀身は平造りで錆をもたず、刀背は角背となり、横断面は二等辺三角形を呈する。刀刃は斜に段をもって作られ、刀背と茎とは直線になっている。茎は背部がやや厚く刃側が薄い横断面台形を呈し、茎巾1.8cm、茎背厚0.4cmを測る。茎端から2.3cmの位置に目釘穴1があけられている。

鏡

東周湮底から遊離出土した錐状の小鉄器で、柄部と先端部の断片で4個に折損している。いずれも錆化が著しく同一個体か別個体かも判然としない。先端刃部は匙状にそりをもち裏面を透した両刃となって、その横断面は三日月状を呈する。現存長2.5cm、巾1cmの小断片である。柄部は長さ9.4cm、巾1.2cmの断片で横断面は長方形を呈する。先端は細長い三角状に尖っている。

板状鉄器

東周湮底から遊離出土した小鉄器で、長さ11cm、巾4.3cm程の薄い鉄板の一方を図示したように両角から折り曲げて袋状に中央で合せている。もう一方は平板をやや斜に切っており、先端部は刃のように薄くなっているが、錆化が著しくて判然とせず、その用途についても明らかでない。

第3節 築成年代

本古墳は伴出遺物が少なく、築成年代を明確にできないが、墳丘の築成および内部主体の構造、副葬された鉄器ならびに同一丘陵上に立地する類似の古墳の状況などを総合して、5世紀代の所産と考えられる。

第6章 岩井山古墳群第7号墳

第1節 立地と調査前の概況

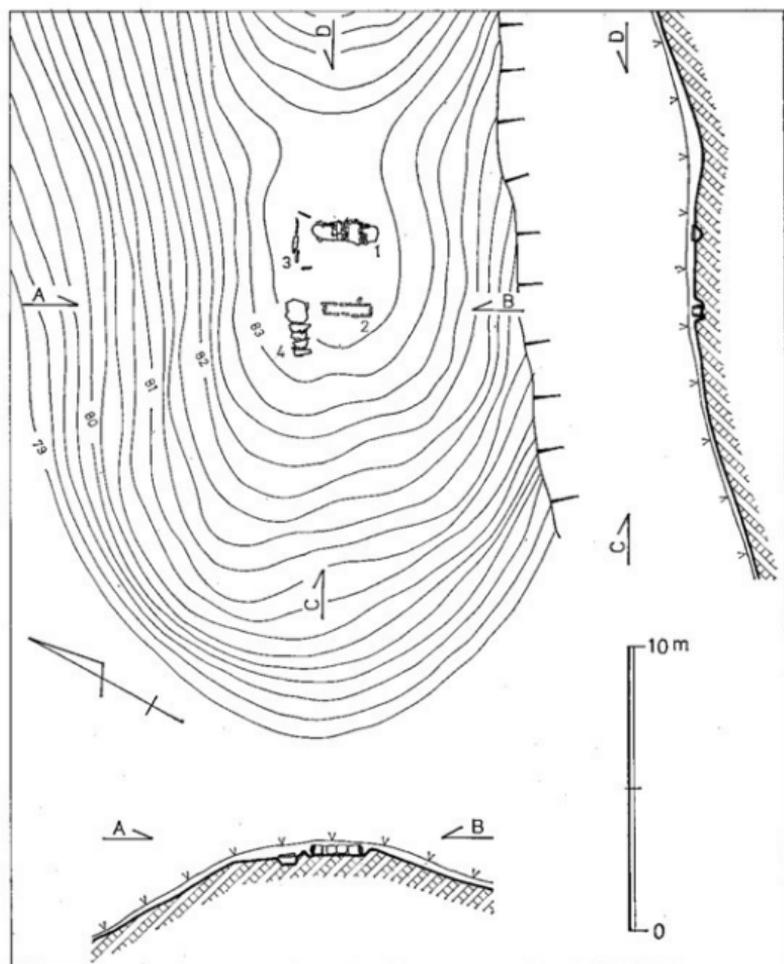
岩井山古墳群第7号墳は、第4号墳の立地する標高97.7mの尾根先端部丘陵頂から、西南へ下降して延びる尾根稜線の標高83.3mの位置に立地する。第6号墳と第8号墳の間に直列状に隣接して所在する方墳で、その墳頂中心部間の距離は、第6号墳まで約14m、第8号墳まで約36mを測る。眺望はよく南方伊田地区の水田地帯を一望できる。眼下の水田との比高37.3mを測る。

本古墳の調査前周辺の概況は第6号墳と同様である。事前の分布調査で径10m前後の低平な小円墳と推定された。墳丘表面に盗掘痕はなく、封土はかなり流失しているが、ほぼ原況を保つ未掘墳と思われた。

第2節 調査の結果

1. 外形

本古墳は、丘陵尾根走向に沿って長辺をもつ、墳端部長11.2m×9.5m、墳頂平坦部長7.4m×

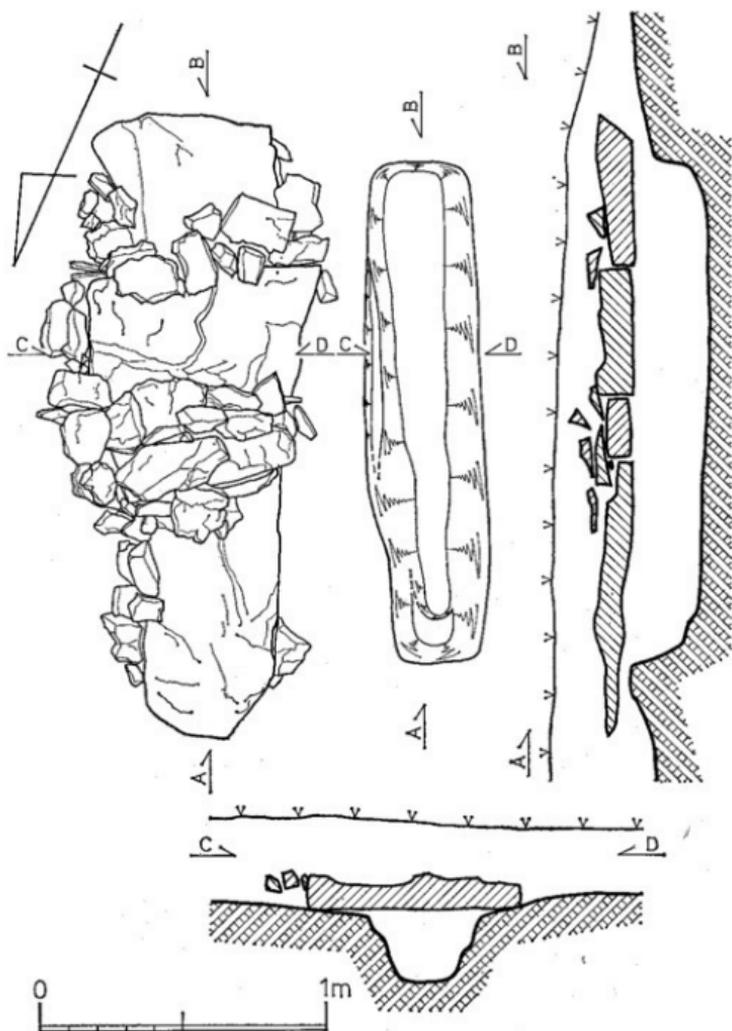


第31図 第7号墳調査前外形図

5.4m、高さ1.4mの小規模な載頭角錐形方墳である。丘陵尾根の自然地形の高まりを削平整地して方形の墳丘基盤を造成し、地形の高い東側に尾根稜線と直交する巾2.4mの浅い溝を掘り込み、墳域を画するとともに、その土を盛りあげて墳丘を築成している。他の部分は自然地形に若干の整形を施した程度であり、墳域および墳端部の境界は判然としない。墳丘盛り土は現墳頂表土面からわずか10cm~20cm程度で地山削平整地面に達する。周濠の埋積状態からみても封土はかなり流失しているものと推察される。葦石などの外表施設は認められない(図31・図版12)。

2. 埋葬施設

本古墳の埋葬施設は、墳丘中央部の尾根定向に直交して並列する第1主体の石蓋土壙墓および第2主体の組合せ式箱式石棺と、その北側に垂直に接して尾根定向に平行に直列する第3主体の組合せ式箱式石棺ならびに第4主体の石蓋土壙墓の計4主体である。



第32図 第7号墳第1主体実測図

第1主体 (図32・図版14)

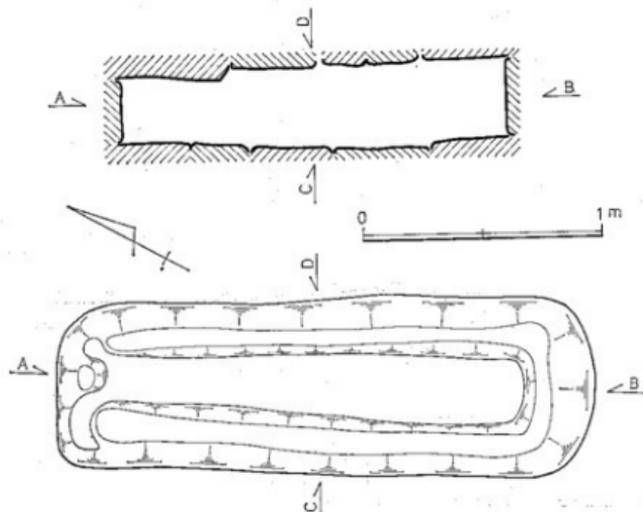
第1主体は、墳頂東南部に尾根走向にほぼ直交して構築された石蓋土壌墓である。第2主体の東に並列し、第3主体の南に垂直に接している。現墳頂表土面からわずか10cm程度の深さに蓋石上面が検出された。石材は付近の丘陵に産出する文象斑岩を使用し、墳丘地山整地面を掘り込んだ墓壇上に蓋石を置いたものである。墓壇は現墳頂表土面51cmに床面をもち、長軸中心線は北25度西を指している。

蓋石は扁平な長方形の割り石4枚を使用し、下側の面を揃えてほぼ水平に並置している。蓋石の継ぎ目とその周辺に拳大の小割り石数十個を置いて間隙をふさぎ、目張り粘土等の使用は認められない。蓋石の全長217cm、最大巾80cmを測る。

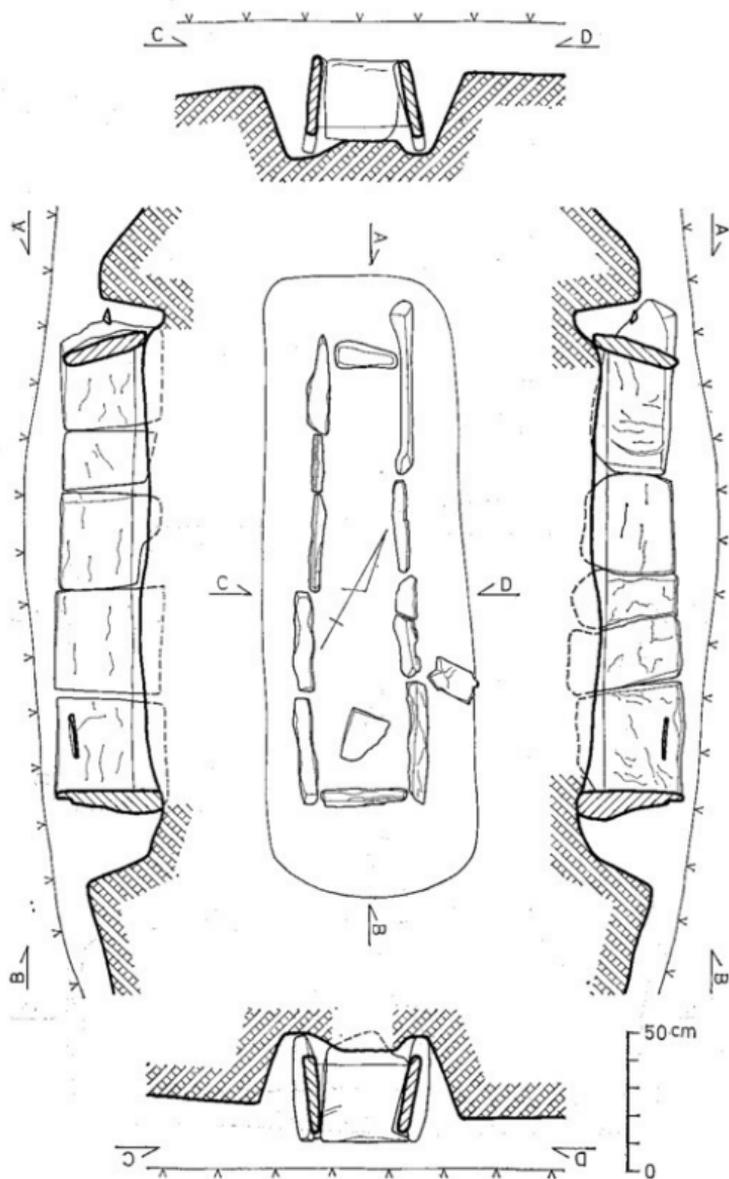
身部は地山整地面に細長い隅丸長方形のプランで掘り込まれたやや不整然な溝状の素掘りの土壕である。現況で掘り方上面の長さ176cm、中央部巾40cm、底面積167cm²、同巾23cm、深さ24cmを測る。床面の長軸はほぼ水平であるが、横断面はわずかに円弧状を呈し、2段掘りとなって壁面中程に弱い段状をもつ。床面には枕石等の内部施設は施されず、遺体および副葬品など何も検出されない。木棺等の使用の有無などについても明らかにできなかった。

第2主体 (図33, 34・図版15)

第2主体は墳丘中央部のやや南寄りに、尾根走向にほぼ直交して構築された組合せ式箱式石棺である。第1主体の西に並列し、第4主体の南に垂直に接し、その位置や形状から本古墳の中心主体と考えられる。現墳頂表土面からわずか10cm程度の深さで石棺身部の側石上面を検出した。蓋石は全く認められず身部のみの遺存である。石棺は文象斑岩を主体に若干の石英斑岩を使用し、地山削



第33図 第7号墳第2主体実測図(1)



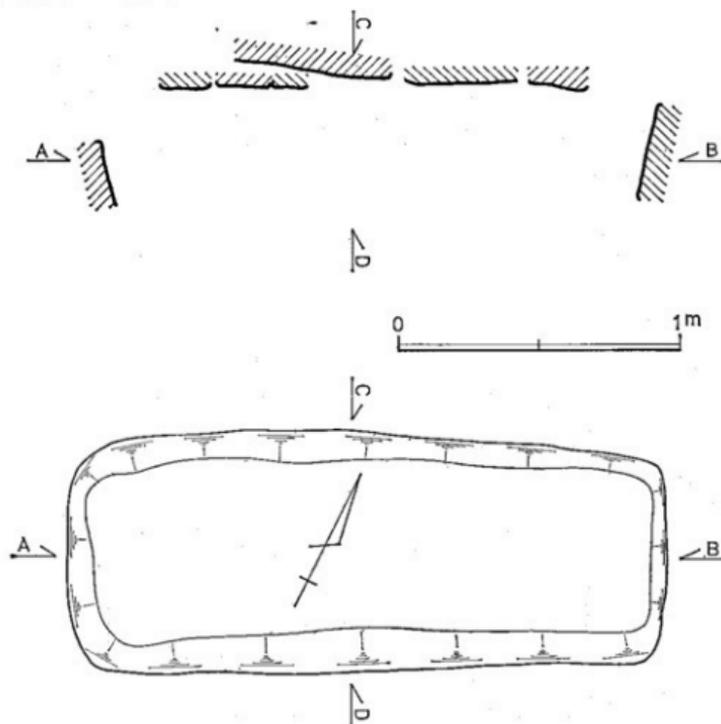
第34图 第7号填第2主体实测图(2)

平整地面に長方形プランで、掘り方上面の長さ224cm、中央部巾71cm、底面長195cm、同中央部巾56cm、深さ30cmの土壌内に、扁平な長方形の板石12枚を組合せて箱式石棺を構築したものである。石棺は現墳頂表土下40cmに床面をおき、長軸中心線は北29度西を指している。

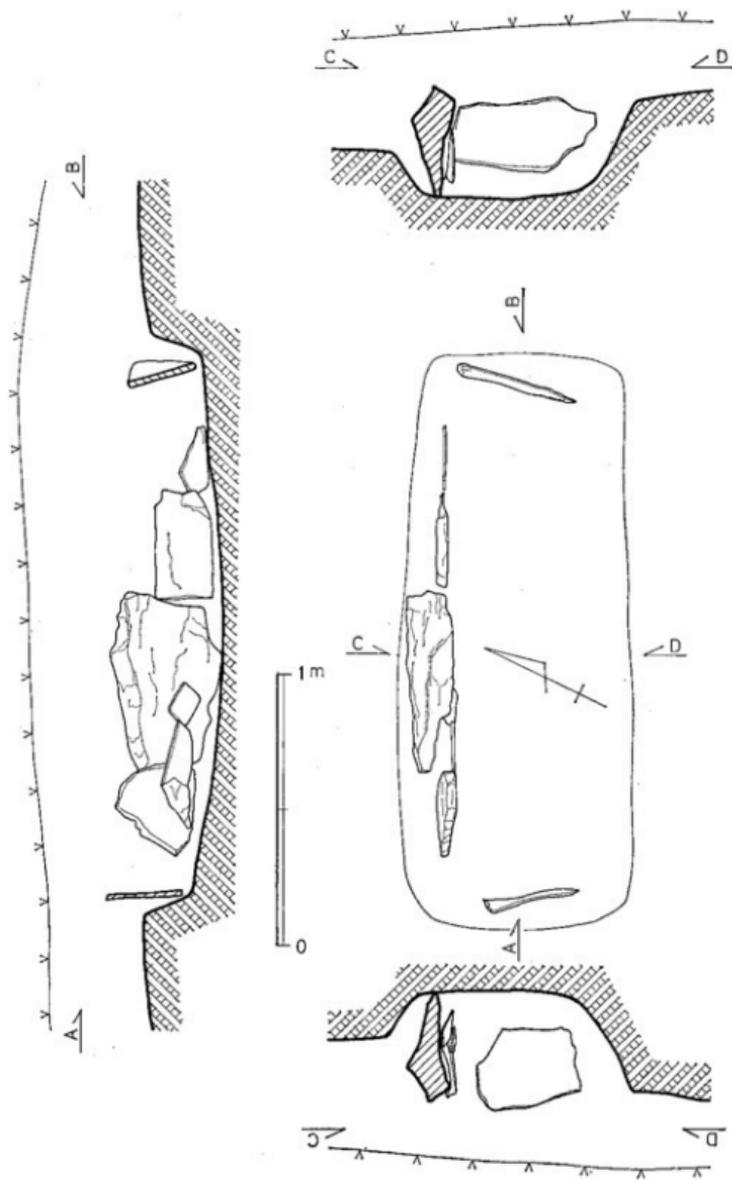
蓋石は全く認められなかったが、本棺身部の整然とした構築および当該丘陵の風化流失等の状況から推考して、当初は蓋石が施設されていたものを後に何らかの必要によって、転用のため持ち去られた可能性も考えられるが、現状ではその確証は得られない。

石棺内部は土砂で埋没していたが、側石内面は整然としている。石棺構築の手法は前記の第6号墳中心主体とはほぼ同様である。石材は精選したものを用い、調整粘土は使用していない。石棺計測値は、外法長167cm、同中央部巾43cm、内法長151cm、南小口部内法巾32cm、北小口部内法巾24cm深さ28cmを測る。枕石の置かれた南小口部をわずかに巾広く構築している。床面は地山と同質の土で若干埋めもどし整地した程度ではほぼ水平である。床面南小口部に拳大の割り石1個を置いた枕石を検出したが、遺体および副葬遺物は何も認められなかった。赤色顔料等も施されていない。

第3主体 (図35.36・図版15)



第35図 第7号墳第3主体実測図(1)



第36图 第7号坑第3主体实测图(2)

第3主体は、墳丘東北寄りに尾根主軸と平行して構築された組合せ式箱式石棺である。現墳丘表土下40cm程度の深さに石棺内側上面を検出した。蓋石は第2主体同様全く認められず。石棺身部も両小口石と北側壁のみの遺存である。墳丘地山整地地面を掘り込んだ土壌の両小口と北側壁に板石をもたせた程度の粗雑な構築である。内部主体は現墳丘表土下63cmに床面をおき、長軸中心線は北63度東を示している。

石棺蓋石は全く認められず、第1主体の蓋石の先端部が本主体の上部におよんでおり、当初から蓋石は施されなかったとも推察される。

石棺内部は土砂で埋没しているが、攪乱された様子はなく原況を保っていると思われる。

石棺身部は、墳丘地山整地地面にやや不整形な兩丸長方形プランで長さ212cm、中央部巾85cm、底面長200cm同中央部巾62cm、深さ30cmの墓壇を掘り込み、その中に文象斑岩の自然石を使用し、両小口と北側壁に不揃いな長方形の板石をもたせかけた程度の構築で、両小口石と石棺長軸線はやや斜交し、側石と小口石は20cm前後離れているなど全く粗雑である。現地山掘り込み面での計測値は石棺外法長196cm、石棺内法長191cm、同中央部内法巾65cmを測る。床面は土壌掘り方底部を若干埋めもどし整地した程度でほぼ水平である。床面東小口部に黒褐色の腐触土が検出され、遺体頭部と推定されたが腐朽が著しく、わずかにその痕跡を知り得た程度である。枕石および副葬遺物等は何も認められなかった。

第4主体 (図37・図版16)

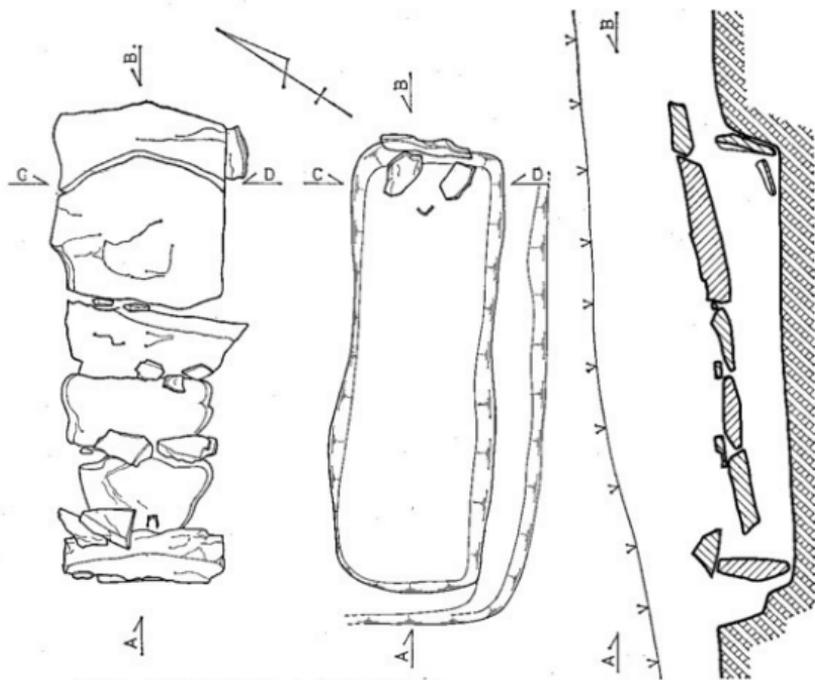
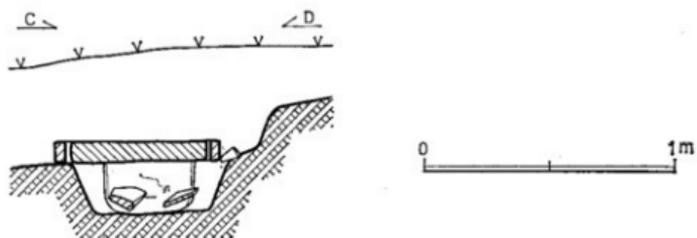
第4主体は、墳丘西北寄りに尾根主軸と平行して構築された石蓋土壇墓である。現墳丘表土下40cmに蓋石上面を検出した。石材は文象斑岩を用いており、墳丘地山整地地面を掘り込んだ墓壇上に蓋石を置いて構築したものである。内部主体は現墳丘表土下60cmに床面を置き、長軸中心線は北56度東を指している。

本主体の蓋石は、前述の各主体より一段深く掘り込まれた土壇内に組まれており、蓋石上面が墳丘地山整地地面とほぼ同じ高さで、墳丘面の傾斜に沿って北および西に傾斜して構築され、両小口部間の比高は28cmを測る。蓋石は扁平な板状割り石5枚を用い、下側の面を揃えて並置している。継ぎ目は10数個の小割り石を置いて間隙をふさいでいるが、目張り粘土の使用は認められない。蓋石の全長193cm、最大巾73cmを測る。

身部は地山整地地面を、兩丸長方形プランで長さ185cm、中央部巾56cm、底面長178cm、同中央部巾46cm、平均の深さ28cmに掘り込んだ墓壇で、東西両小口に扁平な小口石1枚を用いている。床面は墓壇底部を若干埋めもどし整地した程度で、ほぼ平らな面を保つが、地形の低い西小口部に約4cmの下傾を示す。床面東小口部に遺体下顎骨が検出されたが腐朽が著しく、若干の歯が遺存する程度である。遺体頭部下に東小口石と接して小割り石2個を用いた枕石一組が検出された。その他副葬遺物等は何も認められなかった。

3. 出土遺物

本古墳は、第4主体に人骨が検出されたのみで、各主体棺内棺外とも伴出遺物は全く認められな



第37図 第7号墳第4主体実測図

かった。

第3節 築成年代

本古墳は伴出遺物が全くなく築成年代を明確にできないが、墳丘の築成や内部主体の構造、そのほか同一丘陵上に立地する類似の古墳の状況などから、5世紀代の所産と考えられる。

各主体の先後関係についても明確にできないが、第1主体の蓋石の一部が第3主体の上部にあることから、第3主体が第1主体に先行するものと推察される。

第7章 岩井山古墳群第8号墳

第1節 立地と調査前の概況

岩井山古墳群第8号墳は、第4号墳の立地する丘陵尾根突端部頂を分岐点として、眼下の沖積平地に向けて南西方向に、緩やかな起伏をみせて下降する尾根末端小支脈上のほぼ中間部、標高約75mに位置する方墳である。当該尾根小支脈稜線上には、第4号墳から第9号墳までの6基の方墳が直列状に連なって群在し、本古墳の北東に隣接する第7号墳との墳頂中心間距離約35m、南西の第9号墳との同距離約39mを測る(図9)。この尾根小支脈は稜線は比較的になだらかであるが、その側斜面は急斜面となり尾根中は極めて狭い馬の背尾根である。本古墳の南眼下には、小規模ながら新庄川のつくりだした沖積平地が広がり、南方を中心とした眺望の開けた立地を占め、眼下の沖積平地との比高は約30mを測る。

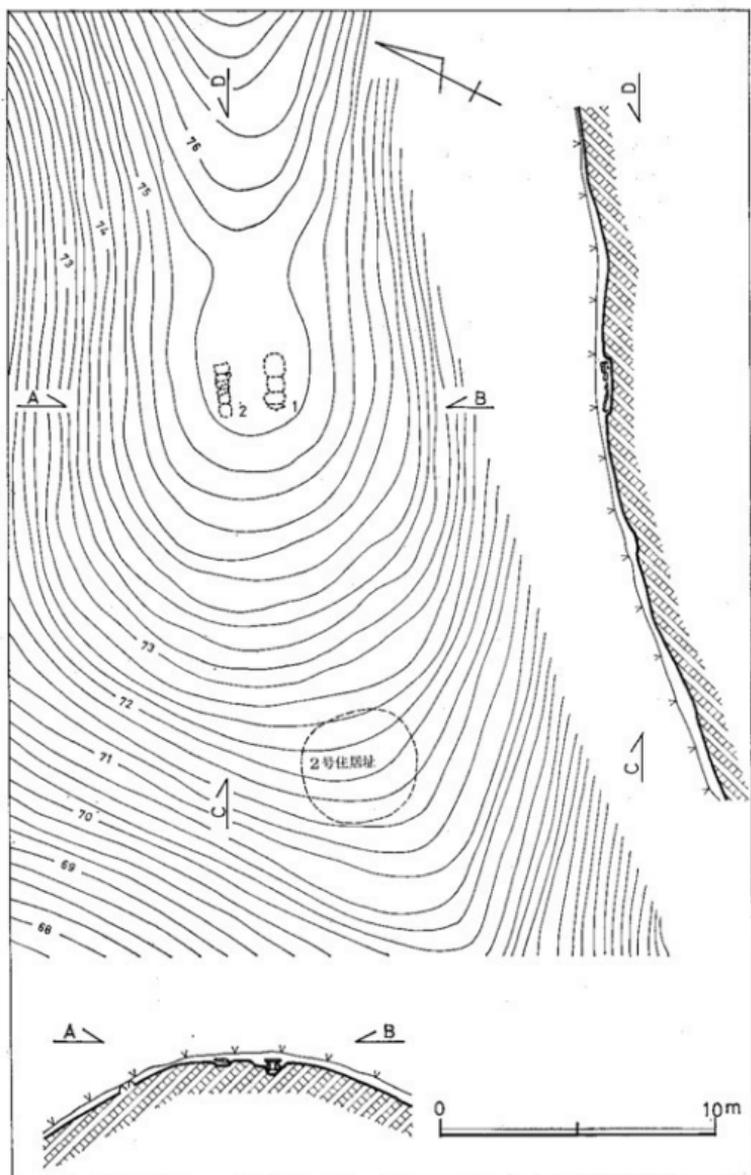
本古墳の立地部を含めた丘陵周辺部のほとんどは、今次発掘調査時には自生の松林であったが、南墳端部は崖状を呈しその部分は灌木林となっていた。立木伐採後の地形測量時における外表観察では、尾根稜線に接する地形の高い側の北東墳端部で、尾根走向に直交した削平整形痕が認められ丘陵尾根稜線の自然地形の高まりを利用して、若干の土盛りと整形を施した程度の小規模な円墳と推定した。本古墳は傾斜地のそれも尾根巾の狭い稜線上に立地するため、かなりの封土の流失が考えられるものの、墳丘外表に盗掘痕等の人為的作為の跡もなく、ほぼ原況を保つ未掘墳と想定された。

第2節 調査の結果

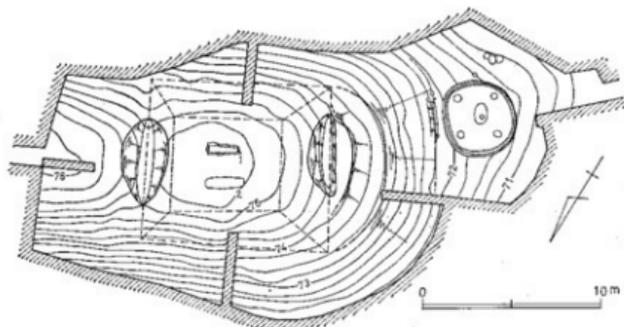
1. 外形

発掘調査の結果、本古墳の外形は当初の予想と異なり方墳であった(図39)。丘陵尾根の自然地形の高まりを利用して、その頂部を築造しようとする古墳の規模に合わせて長方形の平坦面を削平整地し、これを基準として地形の高い北東墳端部にあたる尾根稜線に、尾根走向と直交する周濠状の浅い溝を掘り、墳域を画するとともに墳丘の幅員と高まりを増大させている。一方地形の低い南西墳端部では、墳形に即して丘陵地山を削りこんで墳丘を整形しているため、その外方に周庭帯状の平坦面が造りだされている。墳側斜面は尾根巾も狭く急傾斜のため、墳域および墳端部とも判然としないが、部分的には尾根を切った整形痕をよくとどめていた。削平整地面上の墳丘盛りあげは、周濠状溝遺構等の土砂を巻き返して盛り土とし、若干の整形を施した程度のもものと推察され、現状ではその盛土高は約0.3mを測るのみである。

以上をもとに本古墳の外形と規模を推定復元すれば、本古墳は尾根走向に沿って長辺をもつ墳端



第38图 第8号墳調査前外形图



第39図 第8号墳調査後地形図

部長10.3m×9.2m, 墳頂平坦長6.1m×5.2m, 現存墳頂平坦部長6.1m×5.2m, 現存墳頂と北東溝底との比高0.6m, 同南西墳端との比高約1.3m, 平均墳高約0.9mの低平な載頭角錐形方墳となり, 墳丘長軸中心線および立地部の尾根走向線方位は, とともに北56度東を示す。

北東墳端部の周洩状溝遺構は, 尾根走向に直交して, 底面長軸をほぼ水平にした切り通し状に掘られ, その横断面は浅い上向きの拋物線状を呈する。現況で掘りこみ上端の確認できる現存地山生き土上面での最大巾2.6m, 底面長約5.5m, 最大深部0.4mを測る。地形の低い南西墳端部の掘りこみは, 墳丘傾斜面に合せて, 現存地山部で最大比高約0.4m程度尾根稜線を削りおろし, その外方に巾約1mほどのテラス状の平坦部をつくりだしている。周洩状溝遺構の埋積状況や当該地の地質および地形的条件などから, かなりの封土流失が考えられるが, ほぼその原況に近い状態で遺存しているものと推察される。なお甕石とか埴輪等の外表施設は何も認められなかった。

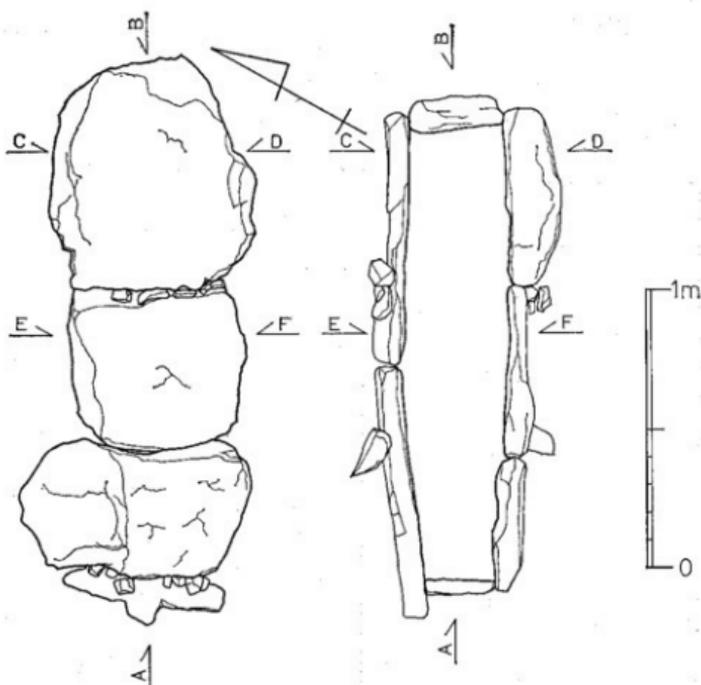
2. 埋葬施設

本古墳の埋葬施設は, 墳頂中央部に尾根走向と平行して並列する2内部主体である。第1主体は両側に位置する組合せ式箱式石棺, 第2主体はその北側約1.9mに位置する石蓋土壌墓である (図39, 図版17)。

第1主体

第1主体は, 墳頂のほぼ中央部の尾根主軸線に沿うようにして, その南東側に位置する組合せ式箱式石棺である。墳丘盛りあげ前の丘陵削平整地地面から直接掘りこまれた, 長方形墓坑内に, 当丘陵地内に産出する文象斑岩を主体に, 若干の石英斑岩の板状割り石を用いて構築している (図40, 41・図版18)。

石棺を構築するために掘られた墓坑は, 現況で掘りこみ上端の確認できる丘陵削平整地地面の長さ231cm, 同巾143cm, 底面長185cm, 同巾73cm, 掘りこみの平均深31cmの隅丸長方形を呈する。各掘りこみ壁面とも2段掘り方となり, 中間部に狭い櫛状の段をもち, 掘りこみの角度はいずれも上開きにかなり傾斜している。墓坑掘りこみの上端部は, 墳丘盛土層内においては精査を試みたが検出できなかった。したがって本墓坑の掘りこみ, すなわち第1主体の埋葬は, 墳丘の盛りあげおよび



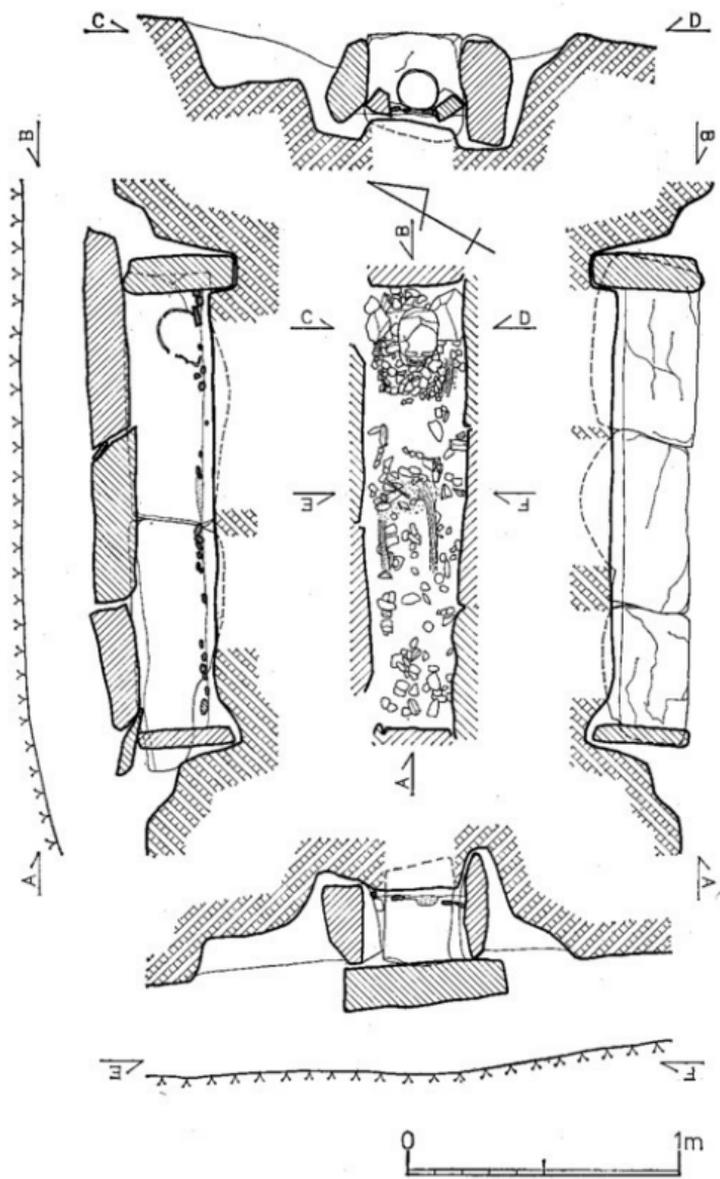
第40図 第8号墳第1主体実測図(1)

整形に先行して、丘陵地山の削平整地の段階で埋納されたものと考えられる。

石棺は墓横内の南東側壁面に沿うように、墓横長軸中心線よりかなり南東に偏寄って構築されている。棺身部は両小口に各1個の板状割り石を、両側板石材で左右から挟むようにして立てて組んでいる。側壁は長方形板状石材を南東側壁3枚、北西側壁2枚を使用し、各石材とも墓横底面をさらに8cm~14cm溝状に掘りこんで下部を埋めこみ、石材を固定するとともに、側壁の高さを一定になるよう調整している。墓横の掘りこみ上端と側壁高はほぼ同高で、墓横と棺側外方の埋め戻しは当丘陵を形成する同質の土砂で行なわれ、粘土による目張り等の特別な処置は施されていない。

棺蓋石は長方形板状割り石3枚を並置して設置されている。最大のもので長さ82cm、巾73cmを測る。南西小口部に僅かに間隙を生じるため、小石材を補足している。蓋石は3枚とも厚さ約15cmで面取りされた整然とした石材が選ばれ、石材間の接合部もよく密着して間隙は少なく、上下面とも水平によく揃っている。南西部の補足石材を除いては、こぶし大の小石数個で目詰めを行なう程度で、粘土等による目張りは認められない。

蓋石の全長200cm、平均巾約70cm、現墳頂は蓋石上面から約25cm上方にある。棺の外法長180cm、同巾60cm、全高46cm、棺内法長160cm、同平均巾37cm、深さ24cm、長軸中心線の方位は北60度東を



第41图 第8号墳第1主体实测图(2)

示す。

石棺内部は土砂の流入により、ほとんど埋没していたが、攪乱されたようすは全く認められず完存の状態を保っていた。棺床面を現墳頂下約65cmにおき、丘陵地山と同質の花崗岩風化土を平均の厚さ約4cm敷きつめてほぼ水平面に整えた上に、親指大程度の角礫を並べた礫床は図示もしたごとくあまり密ではない。頭骸の位置する北東小口部に特に密に、その他ではかなりのばらつきがみられる。また床面両小口の比高は地形の低い南西小口部が北東小口部に比べて約2cm低い。

床面北東小口部に、板状小石材を側壁にもたせた形でV字型に置いた枕石1対があり、それに頭骸を載せた形状で仰臥伸展葬の体位で葬られた、被葬者1体分の遺骨が検出された。遺骸のうち頭骨の遺存度は比較的良好で、枕石上に安定よくほぼ上向きに保たれていた。その他の部位については腕および大腸骨等の棒状骨がどうか原形を保つ程度で、骨盤などは灰白色の粉末状となって、棺床面にやっとその痕跡をとどめる状態で保存度が悪く、詳しい観察はできなかった。左腕骨の一部が被葬者の腹部の上に載せられた状態を示していることと、左大腸骨と骨盤との結合部から頭骨先端までの長さ約70cmを測り、被葬者の身長を約1.4m前後と推定できる程度である。なお当該人骨の鑑定については、京都大学理学部池田次郎教授にお願いし、その結果を第9章に稿を改めて掲載しているので参照願いたい(図版19)。

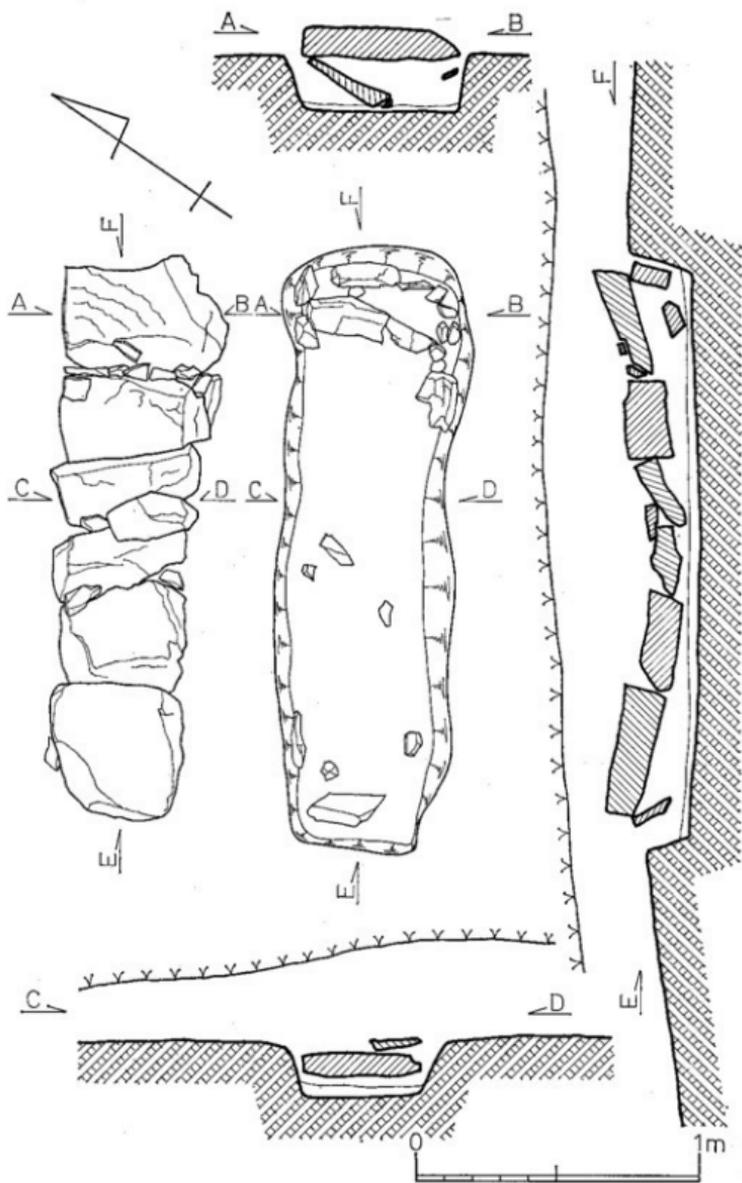
石棺床面内法巾を被葬者の頭位にあたる北東小口部37cm、同足部にあたる南西小口部30cmと、頭位側を幅広く構築しているのは、あるいは被葬者の体形を考慮しての意識的な作為といえるかも知れない。なお棺内における赤色顔料の使用および副葬品等は何も認められなかった。

第2主体

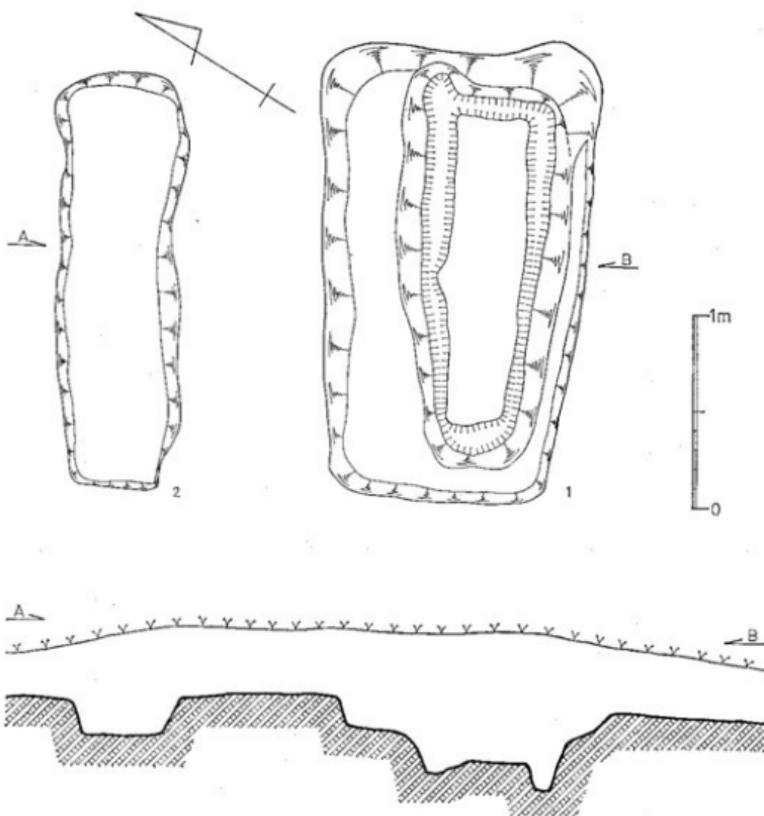
第2主体は、墳頂中央部の尾根主軸線を対称軸として、その南東に位置する第1主体と対応する北西部に並存する石蓋土墳墓である。両主体の長軸中心線の距離は190cm、本主体主軸方位は北55度東を測る。本主体蓋石は現墳頂表土下約15cmでその上端を発見したが、両小口の蓋石を除く中間部の石材は、いずれも墓境内に陥没した状況を呈し、最も落ちこんだ中央部蓋石は約35cmの被土を蒙っていた(図42・図版19)。

墓墳の掘りこみ上端部は墳丘盛土中には精査を試みたが検出できず、墳丘盛りあげ前の丘陵地山削平整地面から直接掘りこまれたものと思われる。このことは蓋石下面部も削平整地面とほぼ同レベルを示し、第1主体と同様に、墳丘封土盛りあげに先行して埋葬が行なわれたものと考えられる。しかし第1主体との先後関係などについては明らかにできなかった。

墓墳は現墳頂表土下約25cmの丘陵地山削平整地面から、隅丸長方形プランで比較的整然と掘りこまれている。掘りこみ上端の確認できる現存地山生き土上面での長さ216cm、同中央部巾63cm、底面長205cm、同中央部巾49cm、平均の深さ18cmを測る。掘りこみの角度はやや上開きの外傾を示し、床面はほぼ水平面を保つ。墓墳底面上に約2cm~4cmの厚さの当丘陵地山と同質の花崗岩風化土が認められるが、意識的に用いて整地したものか、あるいは墓墳底面の自然風化によるものかその識別はできなかった。墓墳両小口に板状割り石を立てているが、埋めこみなどの固定は施されず、その立て方も粗雑である。現状での小口間の内法長は181cmを測る。北東小口部およびその周辺に



第42图 第8号坑第2主体实测图



第43図 第8号墳第1・2主体墓壇実測図

数個の石材が遊離検出されたが、小口部壁面の補強材と推定されるものの、詳細は明確でない。

蓋石は当丘陵に産出する文象斑岩の板石6枚を並置し、石材の継目には拳大の小礫十数個を使用し、その間隙を塞いでいる。蓋石全長は193cmを測る。粘土等の目張りは施されていない。蓋石の横巾に較べて墓壇の方がやや広く、小口石材に載る両小口蓋石の他は、墓壇内に陥没した状況を呈している。おそらく当初棺身部は、墓壇内に木棺などが用いられていたものが、その腐朽に伴って陥没したものと推定される。なお本主体には枕石等の埋葬施設や、赤色顔料の塗布および副葬品等の遺留品は何も認められなかった。

3. 出土遺物

本古墳の発掘調査において、第1主体に人骨が遺存するほかは、各主体および墳丘とも伴出遺物は何も認められなかった。

第3節 築成年代

本古墳の築成年代を知る大きな手がかりとなる伴出遺物は全くなく、それを明確にすることはできないが、隣接所在する当岩井山古墳群との関連や、本古墳の立地および構造等を総括して、一応5世紀代の所産と考えられる。

(国安敏樹)

第8章 岩井山古墳群第9・14・15号墳概要

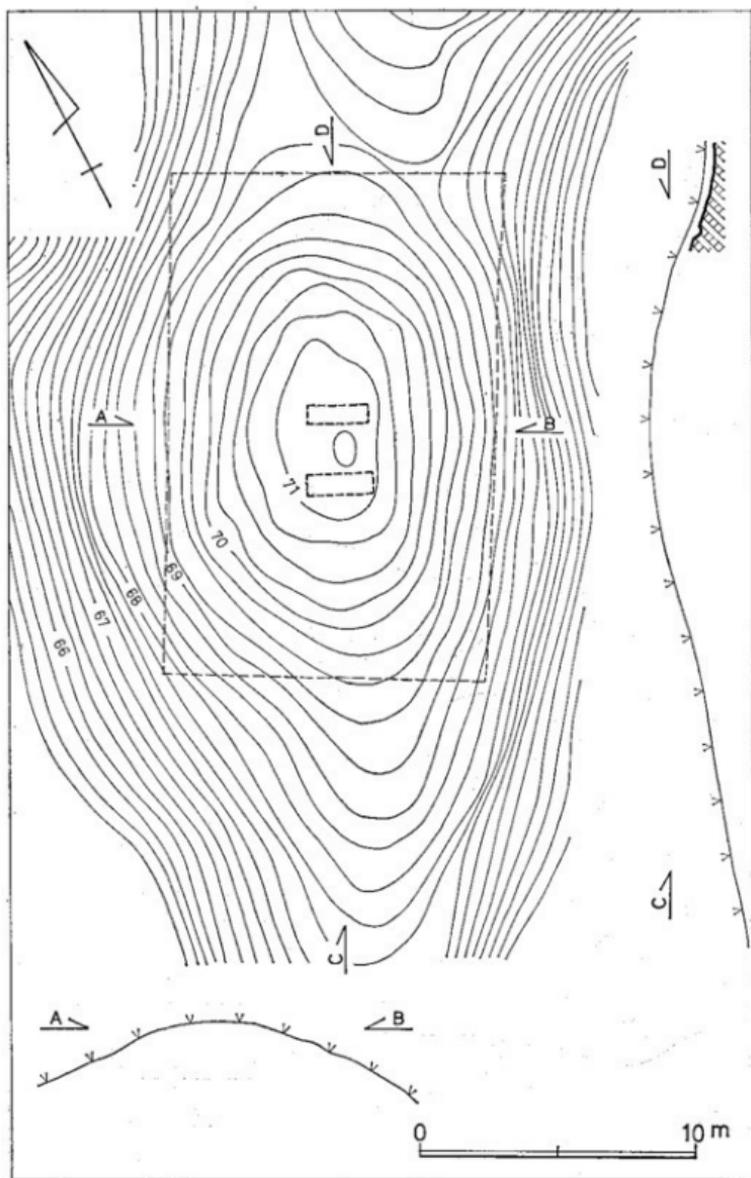
今回発掘調査の対象とならなかったが、第8号墳の南西約40mに隣接する第9号墳と、造成予定地域ではあったが、谷水田を隔てた西方約240mの丘陵尾根上に新たに発見され、協議の結果現状保存に計画変更できた、第14号墳および第15号墳の外形測量と外表観察を実施した。ここに掲載してその概要を簡単に記述する。

第9号墳は沖積平地を臨む丘陵尾根末端部の、標高71mに所在する截頭角錐形の小規模な方墳である。尾根走向に沿って長辺をもつ16.5m×10m、墳頂平坦部長7m×5m、平均墳高約1.5mを測る。地形的にみてかなりの封土流失が予想されるものの、地形の高い北東墳端部に尾根走向に直交する周濠状溝遺構を有し、墳丘の保存度は良好である。葺石・埴輪等の外表施設は何も認められない。ボーリング探査の結果、墳頂中央部の現墳頂表土下約15cmに蓋石上端を置く、箱式石棺2基が、尾根走向に直交する形で並存するようである。内部主体間距離は2.5mを測る。

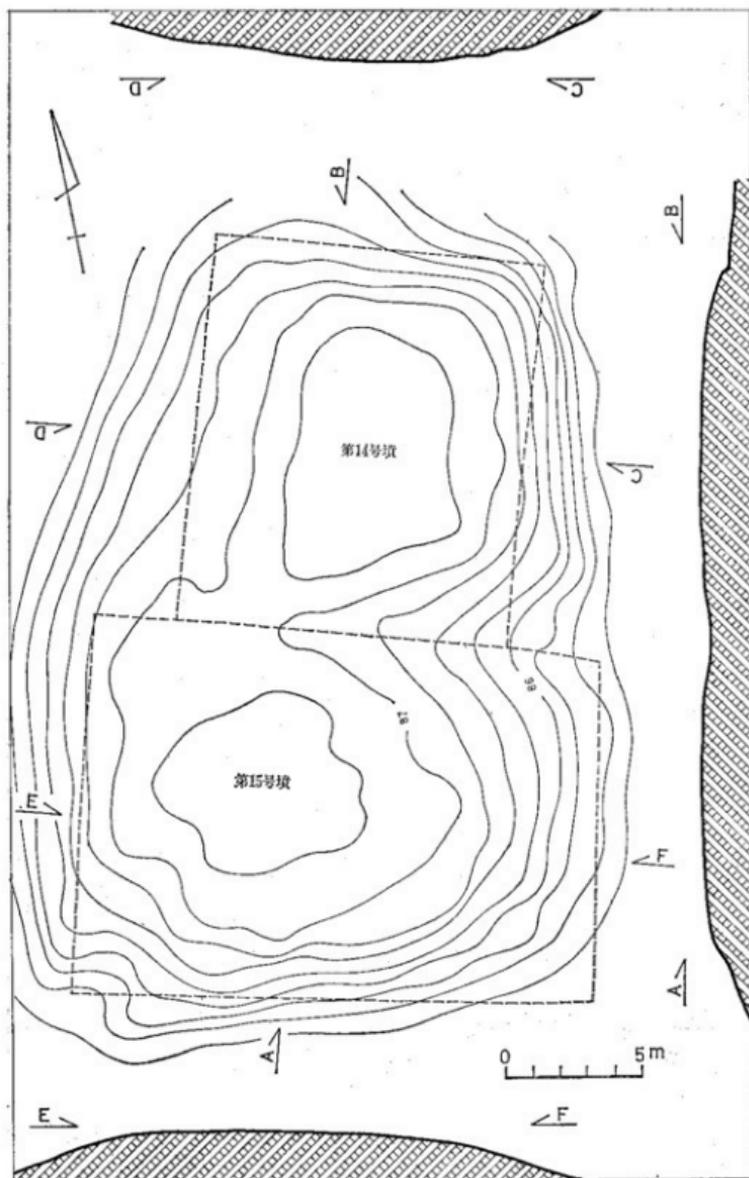
第14号墳および第15号墳は、南へ向けて緩やかな起伏をみせて下降する丘陵尾根支脈の隆起部に墳端を接して立地する截頭角錐形の方墳である。標高88.5mに位置し眺望視野は開けている。ともにかなりの流土は予想されるものの、墳丘の保存度は良好で空掘痕も認められず、未掘墳である。葺石・埴輪等の外表施設は検出されない。

第14号墳は墳端部長14m×14m、墳頂平坦部長9m×9m、平均墳高約1.5m、第15号墳は墳端部長19m×15m、墳頂平坦部長14m×11m、平均墳高約1.5mを測る。ともに内部主体は不詳である。なかでも第15号墳は当岩井山古墳群の中では最大規模をもち、尾根走向に直交して長辺を有し注目された。

(太田耕一)



第44圖 岩井山第9号墳外形圖



第45圖 岩井山第14・15墳外形圖

第9章 岩井山古墳群出土の人骨について

池田次郎

岩井山古墳群に属する4基の古墳内部主体に残された埋葬遺骨4体分について報告する。

第4号墳第1主体人骨

残存する骨は、頭蓋骨、椎骨、肋骨、鎖骨、寛骨、大腿骨、脛骨である。骨は、すべて朱と思われる顔料で赤く染めており、それは、頭骨の前頭骨および顔部にとくに厚く附着している。

頭蓋骨：脳頭蓋では、右頬骨突起を除く前頭骨、左右頭頂骨の前部が顔面頭蓋と接続する。後頭骨の底部、外側部の大部分が残存し、鱗部は、大後頭孔の後の部分と、それに続く右側項平面の一部だけが残っている。側頭骨は右の鼓室部、錐体、鱗部の一部が残存するが、後頭骨とともに、頭頂骨、顔面頭蓋のいずれとも結合しない。冠状縫合、矢状縫合は、内、外板とも完全に癒着し、痕跡も認められない。

顔面頭蓋は、口蓋の大部分を欠くが、ほぼ完全である。前頭骨の彎曲が強く、前頭結節も明瞭に認められる。眉上弓、眉間の突出はいちじるしく弱く、眼窩上孔は左右とも存在する。眼窩は高型、骨性鼻は中型に属し、鼻根部は扁平で突出が弱い。前鼻棘は欠損するが、かなり鋭かったと推定され、梨状口下縁は幼児型を示す。

下顎骨の左半分は、下顎角付近を除きほぼ完全であるが、右はほとんどなく、下顎頭近くの小部分のみ残っている。

歯は、下顎左右の中切歯、側切歯、犬歯、上顎左の中切歯、側切歯、犬歯、第二小臼歯が残存する。下顎左の第一小臼歯、上顎右の中切歯、側切歯、犬歯はないが、歯槽が残っており、脱落后紛失したものである。これに対し、下顎左の第二小臼歯、すべての大臼歯、および上顎左右の第二小臼歯の歯槽は完全に閉鎖している。上顎では、左第二小臼歯は舌側に捻転しているが、右では、この部が破損しているため、第二小臼歯の存否は不明である。残存する歯の咬耗は、かなりいちじるしく、齧歯は認められない。

椎骨：頸椎2、胸椎5、腰椎1、計8個の椎骨椎体部。胸椎、腰椎の椎体前縁に骨増殖がみられる。

肋骨：右第1肋骨。

鎖骨：左の肩峰端を欠く大部分が残っており、その胸骨関節面の縁に骨増殖がある。

寛骨：左右の恥骨結合面を含む恥骨上枝、右の大坐骨切痕上部、寛骨臼付近、腸骨稜の破片、左の寛骨臼の一部が残存する。恥骨弓、大坐骨切痕の角度は、本人骨が女性であることを示している。恥骨結合面の腹側縁下半部には、縁隆起が強く発達するとともに、骨増殖性の Lipping が認められる。

大腿骨、脛骨：ともに左右の骨体の破片。

第4号墳第1主体人骨は、寛骨、頭骨の形態的特徴から女性であり、その年齢は、恥骨結合面の

形状、頭骨縫合の癒着度、歯槽の閉鎖、各部にみられる骨増殖などから、熟年後半、50~60才と推定される。上顎第一小臼歯の歯槽が左右ともに閉鎖しているが、犬歯と第2小臼歯の歯槽が左でかなり広いことから判断すれば、これを人為的抜歯とみることはできない。

第6号墳第1主体人骨

頭蓋骨、上腕骨、尺骨、橈骨、寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨の他、所属不明の骨片が多数ある。

頭蓋骨：脳頭蓋では、右頭頂骨、側頭骨の大部分、後頭骨右外側部が接続しており、他の部分は骨質がきわめて脆弱で、接合できない。

顔面頭蓋では、上顎骨の左右歯槽部だけが残っている。

下顎骨の右半分はかなり完全に残されているが、関節突起、筋突起の先端、下顎角は破損している。左半分はない。

歯は、下顎骨は中切歯から第三大臼歯までの8本、左は中切歯から第一小臼歯までの4本、上顎右は、側切歯から第三大臼歯までの7本、左は切歯、犬歯の3本が歯槽内にある。大臼歯の咬耗は中程度である。

上腕骨：右の骨頭破片。

尺骨、橈骨：いずれも左の骨体遠位部よりの約2分の1。

寛骨：破片であるが、大坐骨切痕の角度は女性的である。

大腿骨：右骨体の遠位部より約2分の1と、左の骨体破片。粗線はかなり強く発達している。

脛骨：左右の骨体の一部。

腓骨：右骨体中央部約2分の1。

第6号墳第1主体人骨は、保存状態がきわめて悪いため、確実とはいえないが、壮年の女性と推定される。

第7号墳第4主体人骨

下顎骨体の小部分と、切歯、犬歯、小臼歯の歯冠部だけが辛うじて残っている。歯の大きさ、咬耗から判断して、11~14才の小児人骨と考えられる。

第8号墳第1主体人骨

残存する骨は、頭蓋骨、椎骨、尺骨、橈骨、寛骨、大腿骨、および所属決定不明の骨片多数である。

頭蓋骨：ほぼ完全な前頭骨、左右頭頂骨、右側頭骨が互に、またそれらは顔面頭蓋と接続する。右の頭頂骨は、人字縫合、矢状縫合後部に沿う部分を除く大部分が残っているが、左は、プレグマに近い部分だけである。これらのいずれとも結合しない、ほぼ完全な左側頭骨と、それに続く頭頂骨の小部分、その他、多数の小破片がある。矢状縫合、冠状縫合には、ともに癒着の痕はみられない。

顔面頭蓋は、鼻骨の先端、左上顎骨前頭突起の一部、左右頬骨の大半を欠く。前頭骨の弯曲は弱く、前頭結節も明瞭でない。眉上弓、眉間部の突出はかなり強く、左側に眼窩上孔、右側に眼窩上

切痕が認められる。眼窩は中型、骨性鼻は低型、上顎歯槽は広型に属す。鼻根部の隆起は中程度で、梨状孔下縁は成人型であるが、前鼻棘の突出は弱い。

下顎骨では、左右の下顎頭および下顎角のみ破損している。下顎体は低く、厚く、とくに大臼歯部の肥厚は顕著である。頤の発達是中程度で、頭棘は極めてよく発達している。

歯は、上下左右とも第三大臼歯を含めすべて歯槽内にある。大臼歯の咬耗は軽度で、とくに第三大臼歯では咬耗がみられない。上顎左第二大臼歯の遠位部、第三大臼歯の近位部に齧歯がみられる。咬合の形式は缺状である。

椎骨：第一，二，三頸椎の破片。

尺骨，橈骨：いずれも右骨体の小部分。

大腸骨：左は、大腸骨頸から骨体中央部付近までの比較的大きな破片であるが、大，小転子を欠く。右は骨体近位よりの小部分。

第8号墳第1主体人骨は、頭蓋骨の形態特徴、結合の癒着、歯の咬耗程度から、20才代の壮年男性であると推定される。

頭蓋骨計測値と示数

岩井山古墳人骨のうち、計測可能の人骨は、男性の第8号墳第1主体、女性の第4号墳第1主体人骨の、2体の頭骨に限られ、しかも計測は顔面頭蓋が主で、脳頭蓋については、ほとんど不可能である。第8号墳人骨の計測値、示数を、西日本古墳人（城），近畿古墳人（鳥・寺門），関東古墳人（鈴木）の男性と、第4号墳人骨のそれを西日本古墳人、近畿古墳人女性と比較する（附表）。女性の場合、比較しうる計測項目が少ないので、男性について考察する。

第8号墳人骨は、ほとんどすべての計測値、示数において、比較に用いた古墳人骨とよく一致する。第8号墳人骨に特異的計測値は顔高で、他に比していちじるしく小さいが、これは顔高が小さいためであり、上顔高では他と差が認められない。顔高に次いで大きな差がみられるのは、鼻示数と上顎歯槽示数であり、両示数において他より大きい。それは前者では鼻幅が、後者では上顎歯槽幅が大きいことに原因している。女性の第4号墳人骨の場合も、西日本、近畿古墳人との間にいちじるしい差はない。要するに、岩井山古墳人は、古墳時代人の一般的特徴を示しているといえよう。

本資料を調査する機会を与えて頂いた岡山県御津郡御津町教育委員会、山陽国地理蔵文化財調査事務所神原英朗所長、および人骨の整理に協力して頂いた京都大学大学院学生毛利俊雄、多賀谷昭の両君に感謝の意を表したい。

付表：古墳時代頭蓋骨計測値，示数の比較

	男 性			女 性			
	岩井山 8号墳人骨	西日本 (城)	近 畿 (島・寺門)	関 東 (鈴木)	岩井山 4号墳人骨	西日本 (城)	近 畿 (島・寺門)
9 最小前頭幅	96						
10 最大前頭幅	(119)				114		
20 耳プレグマ高	114						
26 正中矢状前頭弧長	125	125.3					
29 正中矢状前頭弦長	111						
9/10 横前頭示数	(80.7)	80.2					
43 上 顔 幅	105			105.6	101		
44 両 眼 窩 幅	99			100.7	94		
46 中 顔 幅	(104)	102.6	105.8	103.0	99	98.4	
47 顔 高	110	118.2	119.3	117.5			
48 上 顔 高	68	68.7	71.8	66.8	68	65.1	69.0
50 前 眼 窩 間 幅	19	20.0		19.5	15	17.7	
鼻 根 横 弧 長	22			22.9	17		
51 眼 窩 幅 (左)	44	43.0	42.6	42.5	39	41.7	39.4
52 眼 窩 高 (左)	34	34.7	34.6	34.0	34	33.5	33.2
54 鼻 幅	28	26.0	26.6	26.9	25	25.4	24.9
55 鼻 高	51	51.1	52.0	51.5	51	48.0	48.9
60 上 顎 齒 槽 長	53	53.2					
61 上 顎 齒 槽 幅	67	64.4					
63 口 蓋 幅	(43)	38.1					
72 全 側 面 角	86	81.5		83.3			
73 鼻 側 面 角	90	84.7		90.0			
74 齒 槽 側 面 角	75	73.1		64.4			
52/51 眼窩示数(左)	79.1	80.1	81.3	80.2	87.2	80.8	84.5
90/44 前眼窩示数	19.2	19.5			17.0	18.1	
鼻根彎曲示数	96.4			87.5	88.2		
54/55 鼻 示 数	54.9	50.7	51.4	52.7	49.0	53.2	51.0
61/60 上顎齒槽示数	126.4	121.2					
9/43前頭両眼窩示数	90.6	89.1					
69 頤 高	24	34.7					
71 下顎枝幅(左)	34	34.1					

第10章 岩井山古墳群総括

今回発掘調査を実施した岩井山古墳群第2号墳、第3号墳、第4号墳、第6号墳、第7号墳、第8号墳は、すでに崩落消滅していた第5号墳および現状保存される第9号墳とともに、新庄川流域に拓けた小規模な平地を北から見おろす丘陵尾根支脈上に、直列状に近接して並らぶ小形方墳で一支群を形成している。調査した各古墳の規模や内部主体構造、ならびに出土遺物などについては表示したので、ここではその概要を整理し、今次発掘調査のまとめとしたい。

(立地)

岩井山古墳群第2～9号墳の立地する尾根支脈は、幅狭な馬の背尾根ながらその稜線は平地に向けて、北から南へ緩やかな起伏をみせて下降してのび、平地を臨む尾根突端部はやや隆起して、それぞれ東と南西方向に、平地北縁に沿う尾根末端小支脈を分出して終っている。本支群は尾根突端部に位置する第4号墳を中心に、その北と南西の尾根上約180mの間に直列状に立地する。眼下の平地との比高は約30m～60mを測り、各古墳ともその眺望は南に開け良好である。本支群の東隣りの丘陵尾根支脈上に第10・11号墳、さらに谷水田を隔てた西方の尾根支脈上に第14～17号墳が、本支群とほぼ同様の立地と内容で検出され、全体としてまとまりをもった古墳群を構成している。

(外形)

岩井山古墳群第2～9号墳の外形と規模は、いずれも立地する尾根走向に沿って長辺をもつ、1辺約9m～14m、墳高約1m～1.5m程度の截頭角錐形の小形方墳である。その築成は丘陵尾根の自然地形の高まりを利用して、まづ築造しようとする墳丘規模に合わせて丘陵尾根部を削平整地して基盤を造り、尾根稜線に接する墳端部に、その走向に直交する中約3m～4m、深さ約0.3m～0.6mの周濠状の浅い切り通し溝を掘って、墳域を圍るとともにその高まりと幅員を増大させ、若干の封土の盛りあげと、削平整形を施した程度である。各古墳とも墓石や埴輪などの外表施設は何も認められなかった。

(内部主体)

各古墳の内部主体は組合せ式箱式石棺または石蓋土壇である。第3・6号墳のように1墳1主体のもの、第2・7号墳のように1墳4主体のものもある。いずれも立地する尾根走向に直交または併行し、第2号墳周濠部埋葬の2例を除くと、すべて墳頂平坦部に埋葬されている。複数主体埋葬の多くは当初からそれを意識した配置状況を示す。各主体の形式や計測値等は表示のとおりである。

各主体の構造は、粘土による目張りとか床面の礫床や枕石の有無等、細部において若干の差異があるが、大筋においてはほぼ同巧の共通性を示す。墳頂平坦部の各主体は、いずれも墳丘盛り土中に墓坑掘り方を検出されない。墳丘築成に先立つ丘陵地山削平整地面から掘りこまれた墓坑内に、当丘陵に産出する石英斑岩または文象斑岩の扁平な板状割り石を用いて、箱式石棺または石蓋土壇を構築している。各主体とも棺身部長と削平整地面がほぼ同レベルに揃い、封土の風化流失を考慮にいれても、現墳頂表土下約15cm～30cmの浅い部分で蓋石上端が検出される。したがって各主体の

第2表 岩井山古墳群第2～9号墳一覽

(単位m)

古墳 番号	外 形			内 部 主 体			備 考			
	形式	墳 端 長	平 坦 部 長	形 式	主軸方位	石室長		床内法長		
2	方 墳	9.0×8.4	7.5×6.5	1	箱式石棺	N 60°W	1.78	1.41	0.30	枕石1対, 遺物なし
				2	箱式石棺	N 70°W	1.87	1.44	0.36	枕石1対, 遺物なし
				3	石室土壌	N 68°W	0.95	1.03	0.75	遺物なし
				4	石室土壌	N 17°W	0.66	0.55	0.30	土師器埴2
3	方 墳	9.6×8.7	7.5×6.0	0.8	箱式石棺	N 64°W	1.93	1.65	0.30	枕石1対, 礎石 数, 刀子, 鉄鏝各1
4	方 墳	(12.0×12.0)	?	1	箱式石棺	?	?	?	0.34	遺骨1体分
				2	箱式石棺	?	(1.75)	(1.70)	0.32	遺骨片1体分, 剣1
5	?	?	?	?	?	?	?	?	不詳	
6	方 墳	10.8×9.6	6.2×4.0	1.3	箱式石棺	N 70°E	2.12	1.56	0.36	枕石1対 遺骨片2体分, 短刀1
				1	石室土壌	N 25°W	2.17	1.67	0.23	遺物なし
7	方 墳	11.2×9.5	7.4×5.4	1.4	箱式石棺	N 29°W	—	1.51	0.30	枕石1対, 遺物なし
				3	箱式石棺	N 63°E	—	1.91	0.65	遺物なし
				4	石室土壌	N 56°E	1.93	1.78	0.46	枕石1対, 遺骨片若干
				1	箱式石棺	N 60°E	2.00	1.60	0.37	枕石1対, 礎石 遺骨1体分
8	方 墳	10.3×9.2	6.1×5.2	0.9	石室土壌	N 55°E	1.97	1.81	0.49	遺物なし
				1	箱式石棺	?	?	?	?	不詳
9	方 墳	16.5×10.0	7.0×5.0	1.5	箱式石棺	?	?	?	?	不詳
				2	箱式石棺	?	?	?	?	?

() 内数字は推定値を示す。

埋葬は、古墳を一度完成させてから改めて墓壙を掘るのではなくて、古墳築造過程の丘陵地山面削平整地の段階で、埋葬されたのではないかと考えられる。

各古墳および各内部主体の先後関係や、各主体ごとの被葬者数等については明らかにできなかった。6基を発掘して計14主体を検出したが、遺骸が現存するのは4主体で、そのうち第6号墳第1主体だけが2体埋葬であることが確認された。また枕石をもつ主体は7主体を検出したが、いずれも枕石は1対である。先の第6号墳第1主体は、東西両小口に頭位をおいて2体が差違えた形で埋葬されていたが、枕石は東小口に1対のみである。このことから遺骸が遺存しない場合、枕石等の施設数だけで軽々に被葬者数を定められないことを痛感した。

(副葬品)

各古墳の副葬遺物は、こうした古墳の多くがそうであるように、ここでもその量および種類ともきわめて簡素である。発掘調査古墳6基、総検出主体数14主体に対して、発見遺物は、第2号墳第4主体棺外供献の土師器埴土、第3号墳第1主体棺外供献の鉄斧、鉄鎌、刀子各1、第4号墳第2主体棺内副葬の鉄剣1、第6号墳第1主体棺内副葬の直刀1と、そのほか第4・6号墳の周溝部で遊離発見の土師器小断片若干と、使途不明の板状小鉄器等2がすべてである。

(築造年代)

個々の古墳の築造年代は、それを知る手がかりとなる伴出遺物も少なく明確にすることができない。しかし発掘調査した各古墳は立地や規模および構造に共通点が多く、ほぼ同一時代の一連の葬送と考えられる。個々の古墳の出土遺物は貧弱ではあるが、全体的にみると、第2号墳出土の底部貫孔された土師器直口埴土、第3号墳出土の鉄斧と鉄鎌、第4号墳出土の剣などの形式的な特徴や、吉備地方の類例からみて前期古墳としての要素が強く、少なくとも須恵器を供献する以前の、大まかにいって5世紀代の所産と考えられる。

今回の発掘調査は住宅団地開発事業施行に伴う、破壊を前提とした調査であり、それも崩落半壊していた第4号墳を除く5基の古墳は、千数百年の風雪に耐えて今日まで未掘墳として原況を保っていただけに、まことに残念であり惜まれる。しかし一方において当地方では類例の多い割にその報告例の少ない、こうした小形方墳の調査資料を加え得たことは、それなりに一つの成果と考える。また風化の進みやすいこうした花崗岩地質の、尾根巾の狭い丘陵稜線に所在する小形古墳の中には、その外観が一見円墳のように見えても、調査の結果方墳であることの例が多いのである。今後分布調査を進める場合、こうした点を更に留意して見直しをする必要があると思われる。

岩井山丘陵に所在し本古墳群を構成するこれらの小形方墳は、新庄川流域に拓けた水田地帯を背景とした、生産と分配を一単位とする世帯共同体の墳墓群と推定され、こうした小共同体が5世紀代からすでに、古墳を造り得るだけの変質をとげつつあったことを示すものと考えられるのである。

(神原 英朗)

IV 弥生時代竪穴式住居址

第1節 序説

岩井山古墳群発掘調査の過程で、木古墳群に先行する弥生時代の竪穴式住居址2棟が、同一丘陵上に所在することが知られた。第2号墳の墳丘下に所在する岩井山第1号住居址と、第8号墳と第9号墳の中間に所在する岩井山第2号住居址がそれである。ともに丘陵尾根上に単基で営まれた、弥生時代の竪穴式住居址と推定される。両住居址とも表土層の流土が著しく、上部構造は不明で壁部の大半を流失しているが、床面はほぼ全容をとどめている。両住居址間は尾根伝いに約200mの距離にあり、比高約20mの位置に所在する。各古墳発掘調査後、集落址の広がりおよび住居址等の検出のため、丘陵尾根部に延べ約400mにおよぶトレンチ調査を試みたが、上記の他に遺構を検出することができなかった。また住居址相互の関係についても明確にする手がかりは得られなかった。

第2節 第1号住居址

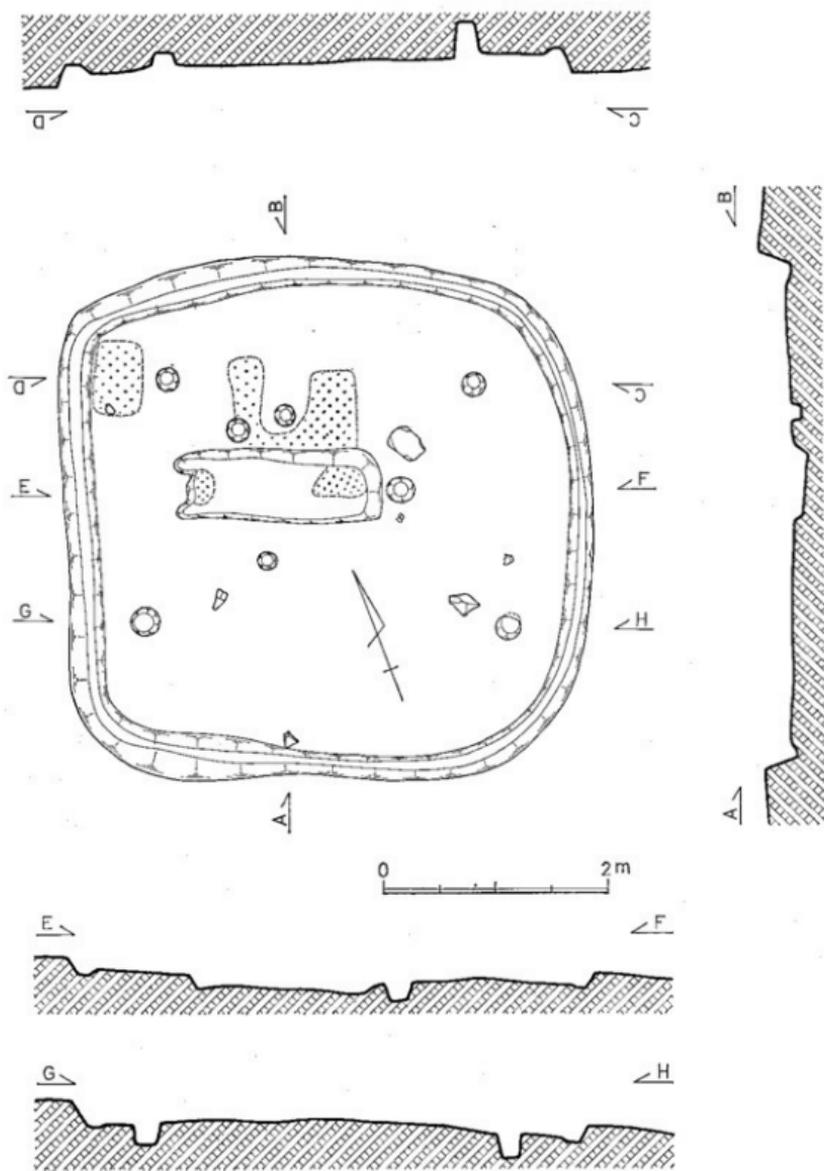
第1号住居址は、岩井山古墳群第2号墳の墳丘下に複合して所在する竪穴式住居址で、第2号墳の発掘調査中に発見されたものである。本住居址の立地および周辺の概況は、第2号墳と同様で、標高93mの丘陵尾根稜線上の巾狭な鞍部のわずかな平坦地を選んで建てられている(図46・図版21)。

本住居址は表土の流失が著しく、さらに第2号墳の築造によって上部を削平されたため壁部の大半を失っている。したがって上部構造は不明である。第2号墳の墳丘地山整地地下約30cmの深さに住居址床面が検出され、その一部は第2号墳第2主体の石棺構築によって掘り込まれている。住居址の規模は、現存地山掘り込み上面で、尾根稜線に直交する長径4.7m、短径4.6mの隅丸方形である。壁面は約70度の傾斜をもって掘り込まれており、ほぼ全体に約25cm程度の壁を遺存している。

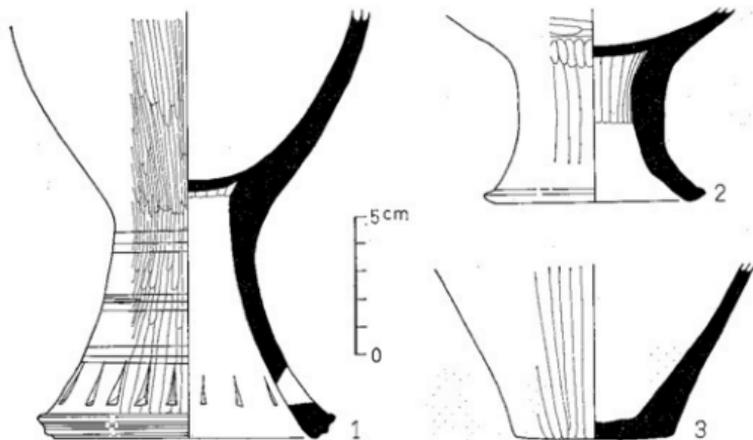
床面はほぼ水平で踏み固められている。中央部に90cm×60cmの範囲の炉跡と推定される焼土面があり、若干の灰や炭が検出された。また北西隅に70cm×60cmの範囲が、高さ10cm程の一段高い棚状の焼土面を呈している。壁面に接する床のまわりには、巾15cm、深さ7cm程のU字溝がめぐっている。床面の径約4.5mで面積はおよそ18㎡である。

柱穴は、床面四隅に各1つずつと、中央部に4の計8が検出された。四隅の柱穴中心間の距離は長径3.3m、短径2.2m前後である。柱穴の径は平均20cm前後のプランで、床面から30cm程度の深さに掘り込まれている。中央部の柱穴は隅に比較してやや小さく、不規則な位置にあり相互の関連を明確にできないが、しいて推測すれば、本住居址は中央部2本と対角線上にある4本の柱によって構築されたものと推定される。なお住居址外部および周辺も全面発掘による調査を行なったが、流土が著しく何らの遺構も検出することができなかった。

本住居址に伴う遺物は、南東隅柱穴内上部から出土した、サヌカイト製石鏃3点と、床面中央



第46图 岩井山第1号住居址实测图



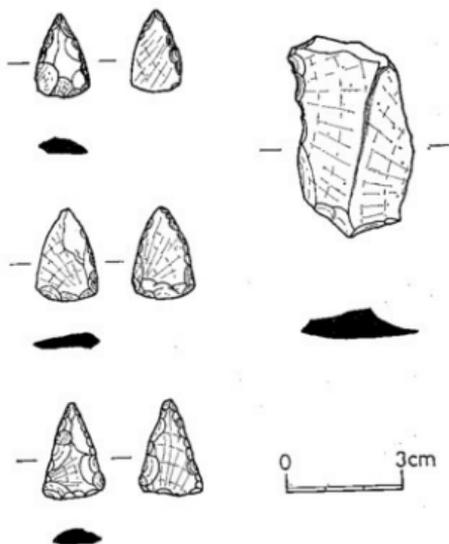
第47図 第1号住居址出土の土器

部に置かれた台状石、および高坏形土器、壺形土器など若干の弥生式土器片が住居址床面に接して検出された(図版22)。

本住居址床面から検出された土器はいずれも小破片であるが、接合復元によってほぼ器形のわかる

3点を図示した(図47・図版22)。高坏形土器(1)。坏部の口縁部を欠くが、ほぼ全形を残している。現存口縁径12.7cm、坏部高6cmの椀状を呈し、坏底部は円盤状の粘土を貼り付けている。脚部はやや低い筒状の裾拡がりの形状で、高さ9cm、底部径10cmを測る。器表はかなり磨耗しているが、へら磨き調整がみられる。脚柱部に三条の沈線を三段にめぐらし、脚下部に三角形の透し穴を施しているが、中には裏面に通らないものもある。胎土に細砂を含み、焼成は普通で、色調は褐色および部分的に暗灰色を呈している。

高坏形土器(2)。脚部とわずかに坏底部を遺存する。器高6.8cm、脚底部径8cmを計る。低い台状の脚部をもち、坏底部は円盤状の粘土を貼り付けている。器表は磨耗が著しいが、無文でへら磨きのみ



第48図 第1号住居址出土の石器

られ、脚下部は横なで調整が施されている。胎土に細砂を含み、焼成は普通である。色調は表面淡褐色で内面は暗灰色を呈している。

壺形土器の底部(3)。小破片で全形は不明である。底面の径 5.8cm でほぼ水平な面を呈している。磨耗が著しいが表面にへら磨きがみられる。胎土に 2mm 大の砂礫を多く含み、焼成は普通である。色調は表面淡褐色で、内面は暗褐色を呈している。これらの土器はいずれもその特徴から、弥生時代中期後半の時期と推定される。

石鏃 3 点(図48・図版22)は、いずれもサヌカイトの打製石鏃で完形品である。無茎で基底部および両刃部がやや外湾する二等辺三角形形状を呈し、基底部巾 1.3cm ~ 1.5cm、長さ 2.2cm ~ 2.5cm 程度のやや小形のものである。他にサヌカイト剥片若干が検出された。

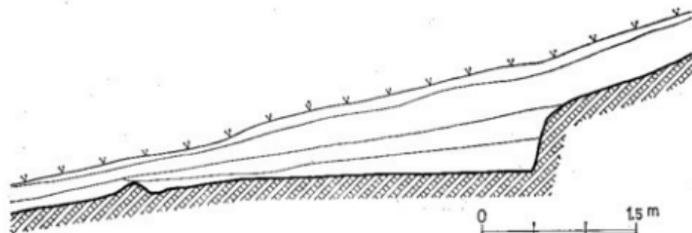
第3節 第2号住居址

第2号住居址は、岩井山古墳群第8号墳と第9号墳の間にあたる尾根稜線上に所在する弥生時代の竪穴式住居址である。周辺の概況は第8号墳とほぼ同様であるが、住居址は埋没して自然の丘陵斜面となっていた。そのため事前の分布調査では発見されなかったが、第8号墳周辺の遺構確認のトレンチ調査によって検出されたものである(図49、50・図版21)。

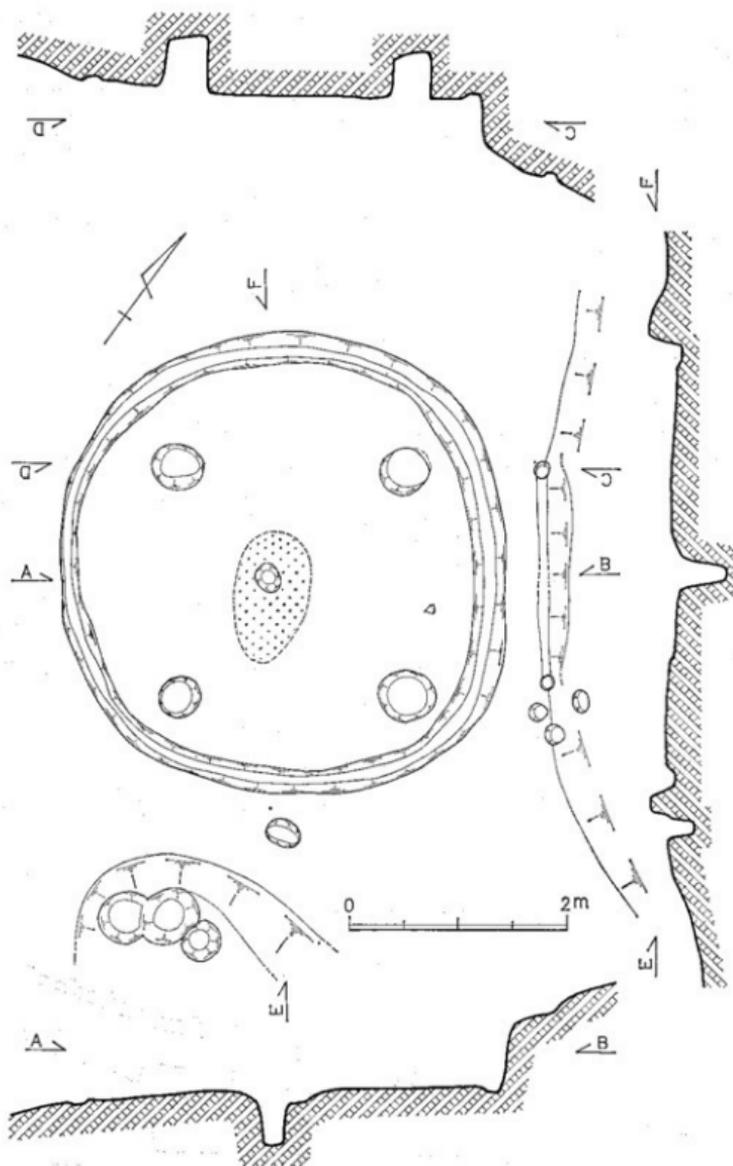
丘陵尾根緩斜面の地形の高い東側を深く掘り込み、地形の低い西側を埋め出してテラス状の平坦部を整地して竪穴式住居を建築したものと推定される。西壁部は殆んど流失しているが、床面はほぼ全容が遺存する。現地山掘り方上面で両壁部の遺存する南北径 4.3m の、円形竪穴式住居址である。現地表面から住居址床面までの深さは、東壁部で 1m、西側は約 30cm を測る。地山面から掘り込みの深さは東壁部で 66cm である。住居址上面は殆んど流失し、上部構造は不明である。

床面は地形の低い西側へわずかに傾斜しており、固く踏みしめられている。中央部に 70cm × 120cm の長楕円形に浅い掘り窪みがあり、焼土や灰・炭などがみられることから炉跡と推定される。床面のまわりは壁内側に沿って、巾 15cm、深さ 6cm 程度の U 字溝がめぐらされている。床面の径 3.8m で、面積は約 11m² である。

柱穴は床面の四隅に各 1 が壁面から 20cm 程度離れた位置にあり、中央部に 1 の計 5 が検出された。柱穴はいずれも同巧同大で、四隅の柱穴は平均 46cm の円形プランで、深さ 46cm 程度のほぼ壁直状に掘り込まれている。中央部の柱穴はやや小さくて、径 24cm × 30cm の楕円形プランで、46cm の深



第49図 岩井山第2号住居址断面図



第50圖 岩井山第2号住居址实测图

さに掘り込まれている。本住居址は、1本の中心柱と四本の隅柱によって建築されたものと推定される。

住居址外部の全掘調査を行ない、南壁部から1.3mの位置にピット状の遺構を検出したが、流土が著しく底部のみの遺存で全体の形状は不明である。伴出遺物もなく本住居址との関係も明確にしがたい。

本住居址の伴出遺物は

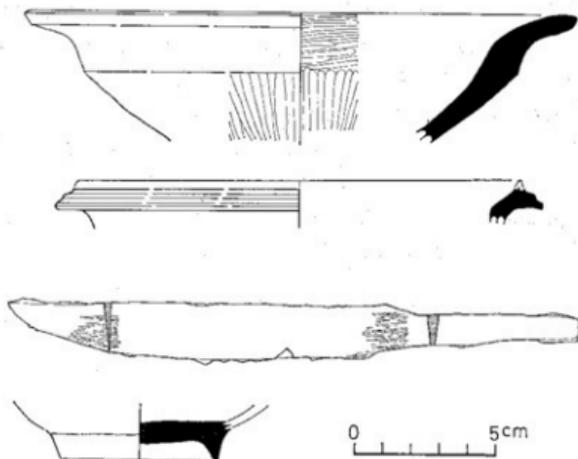
床面東部の東壁面から約50cmの位置に、弥生式鉢形土器小破片1が検出されたのみである(図51・図版22)。なお本住居址床面上40cmの現表土層から、鉄製刀子1、および弥生式土器等小破片を遊離検出したが、当該地は岩井山古墳群が築造されるなど後世の遺跡から流入したものと考えられる。

鉢形土器の口縁部片と思われる小断片で、その全容は不明であるが、器壁のやや厚手のつくりで口縁部を緩やかにくの字状に外反させ、口縁端部をまるくおさめている。胎土に細粒を多く含む焼成は普通で、外面は暗灰黒色、内面は灰褐色を呈する。仕上げ調整は内外面とも口縁部は横なで調整、器体部は縦方向へのへら削り調整が施されているが、現状では器表の荒れが著しく判然としない。器表外面に二次的火力を受けた煤が多く付着するところから、煮炊用に供された日常容器片と考えられる。器形の特徴から弥生時代後期の所産と考えられるが、小断片のため詳細は明確でない。

第4節 ま と め

岩井山古墳群の発掘調査に伴い発見した2棟の竪穴式住居址は、いずれも新庄川流域に拓けた小平地を眼下に臨む、丘陵尾根支稜線の上に所在する弥生時代中期後半の住居址である。第1号住居址は1辺4.7m×4.65mの隅丸方形、第2号住居址は径4.1m×4.3mの円形で、尾根伝いに約200m隔てた位置にそれぞれ単基で発見された。周辺部への遺跡範囲の広がりを確認調査したが、関連遺構は検出されなかった。両者とも立地する尾根巾は狭くその側斜面は急傾斜で、平地との比高も約50mと30mを測り、いわゆる日常生活の立地としては恵まれないが、一方ではそこからの眺望はきわめて広く、伊田地区の耕地のほとんどを一望できる立地を占めている。

当住居址の南丘陵部および東約1.2kmの山麓緩斜面の上伊田大谷遺跡、その北400mの池底にある



第51図 第2号住居址出土の遺物

宅美池遺跡等、この新庄川流域の平地縁辺の山麓部には、同時代の遺物散布地が発見され、当平地および谷水田を切り拓いた人々の集落が営まれたことを物語っている。本住居址はそうした集落と防禦あるいは防災等、何らかの有機的な関連をもって営まれたものと推察できる。

また岩井山丘陵は数多くの谷水田によって開折され、当時谷水田を開拓するには格好の地形を示している。今回の発掘調査によっても明らかなように、例え分布調査等の外表観察で遺物や遺構が検出されなくても、こうした遺跡の存在する可能性は強いのである。今次発掘調査は岩井山第2～8号墳の立地部という限定された小範囲の調査に過ぎず、今後当開発事業の推進にあたっては、埋蔵文化財の保護保存のため一層の努力が望まれるのである。

(則武忠直)

岩 井 山 古 墳 群

昭和51年5月20日発行

発行 岡山県御津町教育委員会
岡山県御津郡御津町金川1020

印刷 西尾総合印刷株式会社
岡山市津高651

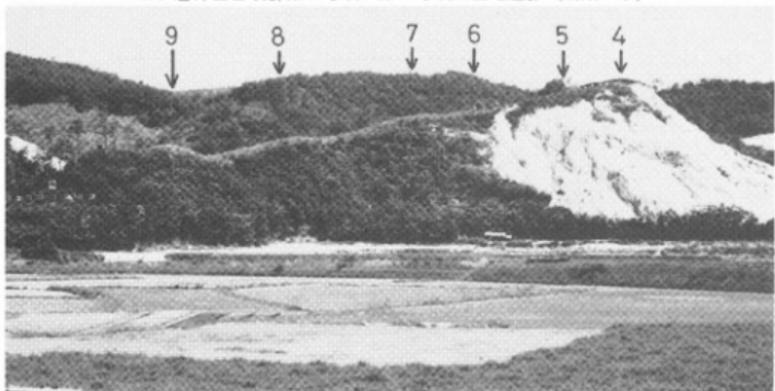
圖 版



1. 岩井山古墳群所在丘陵遠影 (南から)



2. 岩井山古墳群第2号墳～第4号墳所在地遠影 (南東から)



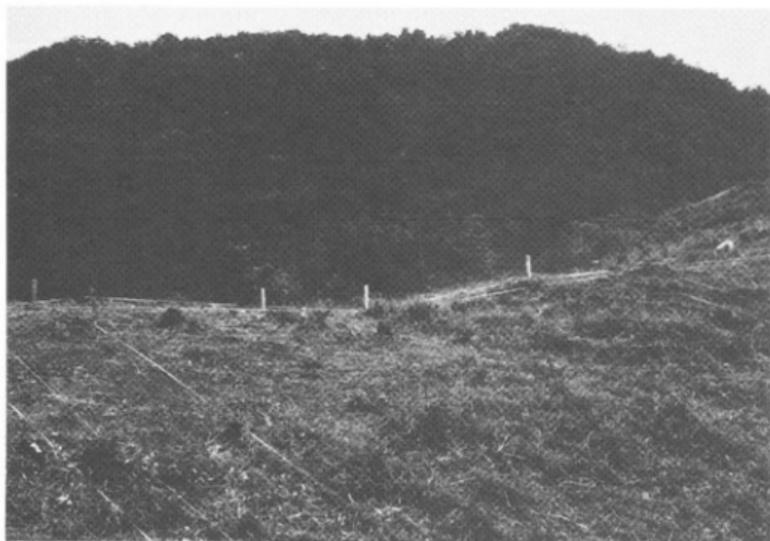
3. 岩井山古墳群第4号墳～第9号墳所在地遠影 (南東から)



1. 岩井山古墳群第2・3号墳調査前外観（北から）



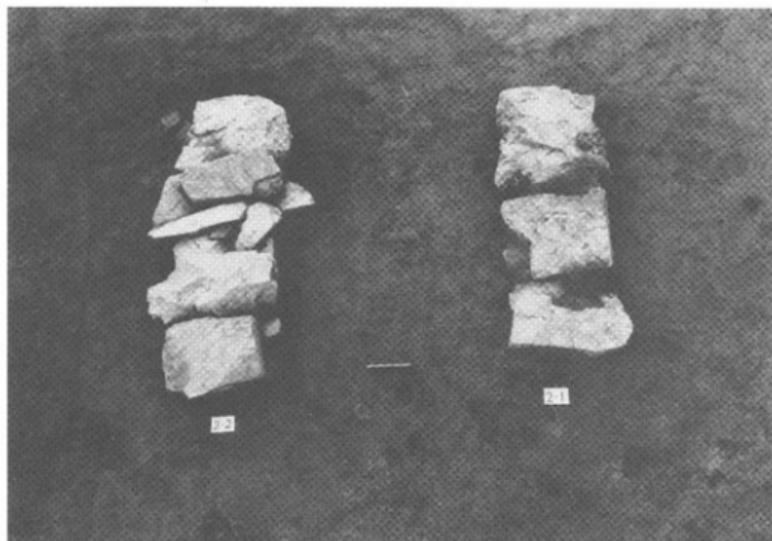
2. 岩井山古墳群第2・3号墳調査前外観（南南東から）



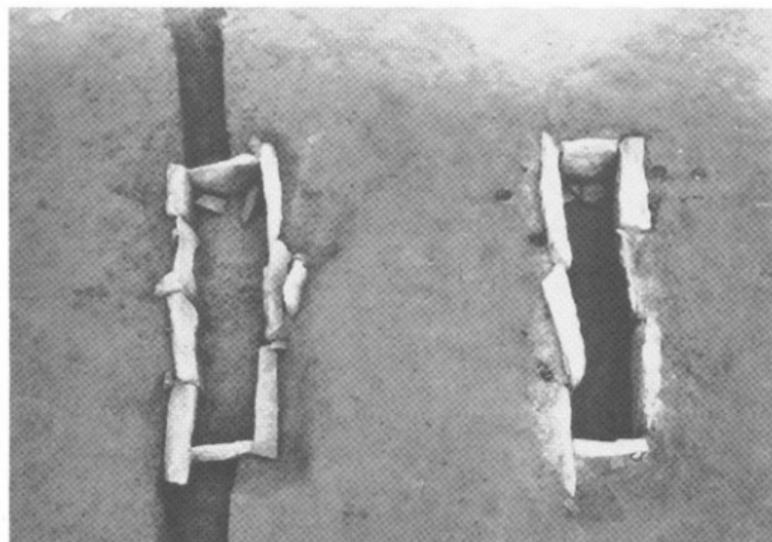
1. 第2号墳調査前外観（東から）



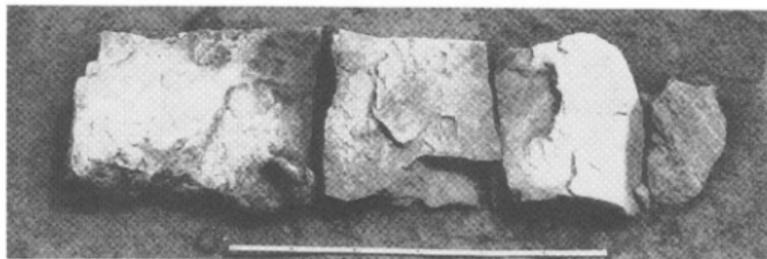
2. 第2号墳内部主体出土状況（北から）



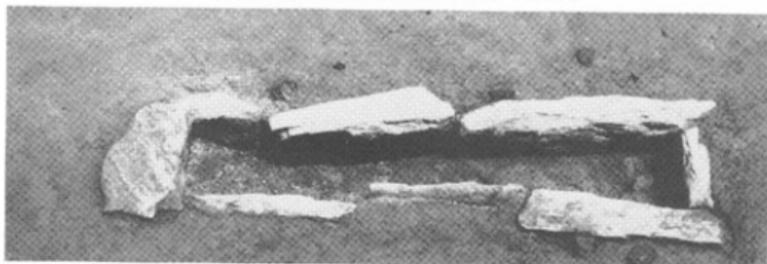
1. 第2号墳第1・2主体出土状況（西から）



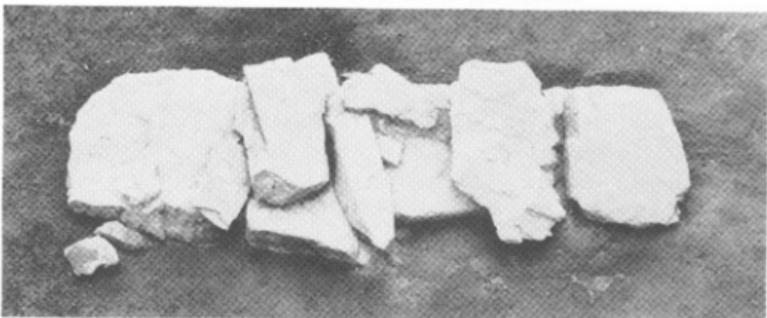
2. 第2号墳第1・2主体棺身部出土状況（西から）



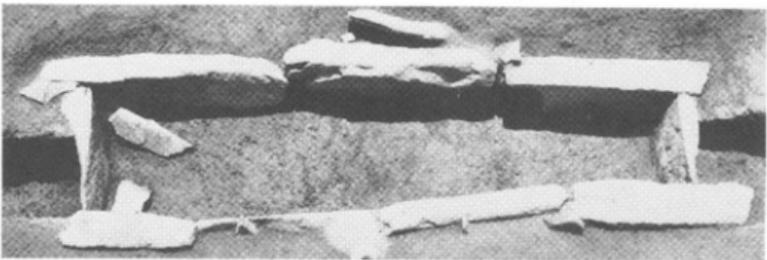
1. 第2号墳第1主体蓋石出土状況（北から）



2. 第2号墳第1主体棺身部出土状況（南から）



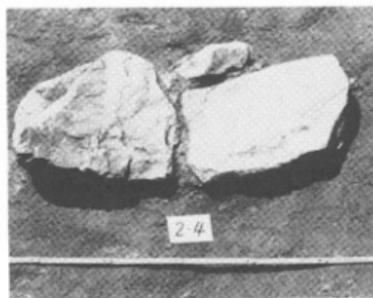
3. 第2号墳第2主体蓋石出土状況（北から）



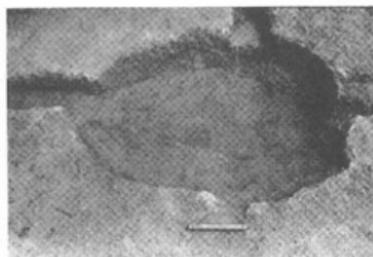
4. 第2号墳第2主体棺身部出土状況（北から）



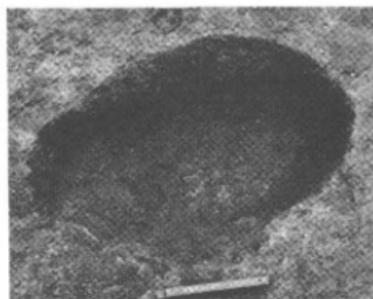
1. 第2号墳第3主体蓋石出土状況 (南から)



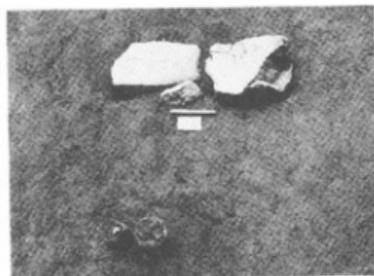
4. 第2号墳第4主体蓋石出土状況 (東から)



2. 第2号墳第3主体墓横出土状況 (南から)



5. 第2号墳第4主体墓横出土状況 (東から)



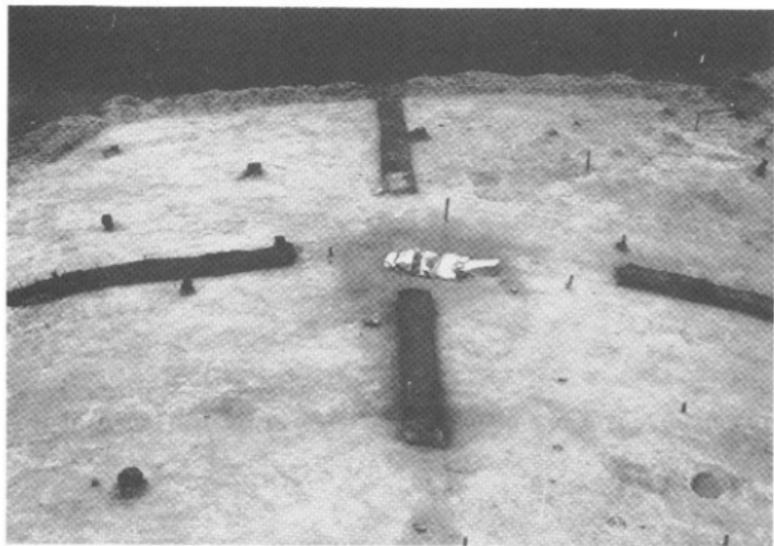
3. 第2号墳第4主体出土状況 (西から)



6. 第2号墳第4主体周辺出土土師器 (東から)



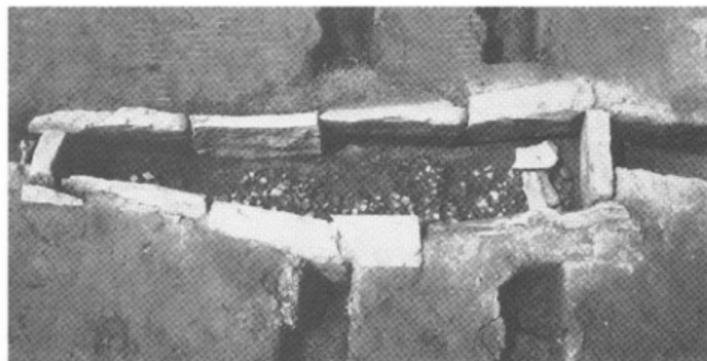
1. 第3号墳調査前外観（南東から）



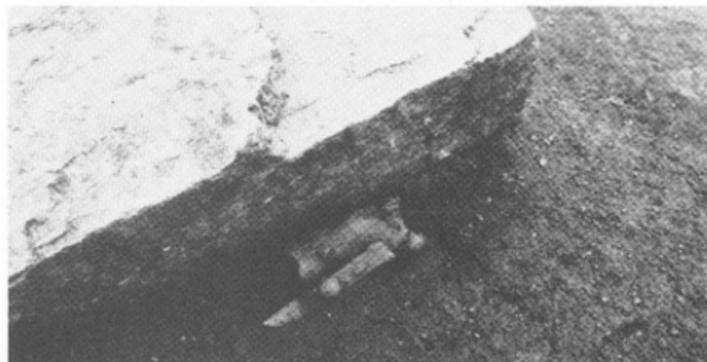
2. 第3号墳内部主体出土状況（南から）



1. 第3号墳中心主体墓石出土状況（南から）



2. 第3号墳中心主体棺身部出土状況（南から）



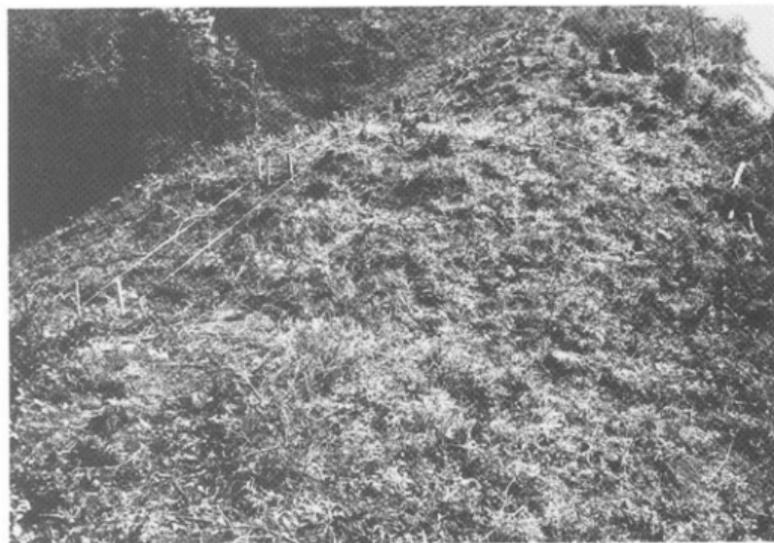
3. 第3号墳中心主体棺外遺物出土状況



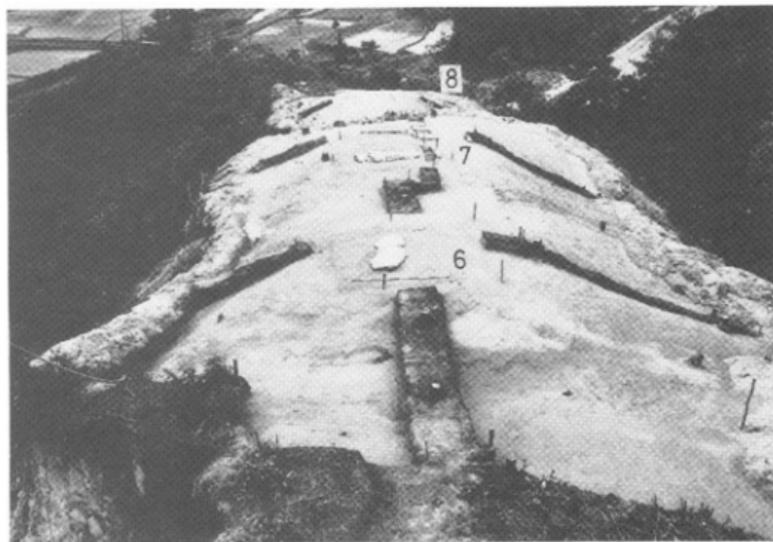
1. 第4号墳外観 (南西から)



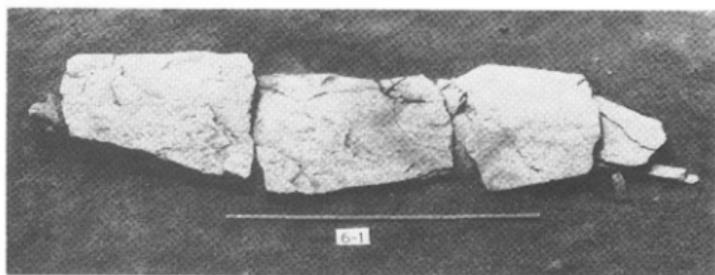
2. 第4号墳調査後外観 (北から)



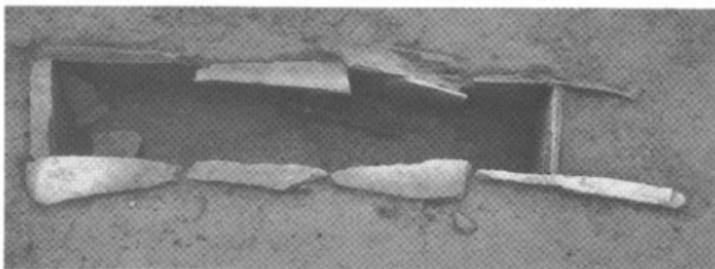
1. 第6号墳調査前外観（南西から）



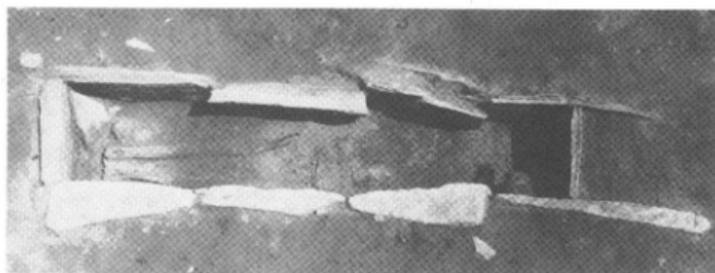
2. 第6～8号墳調査後外観（北東から）



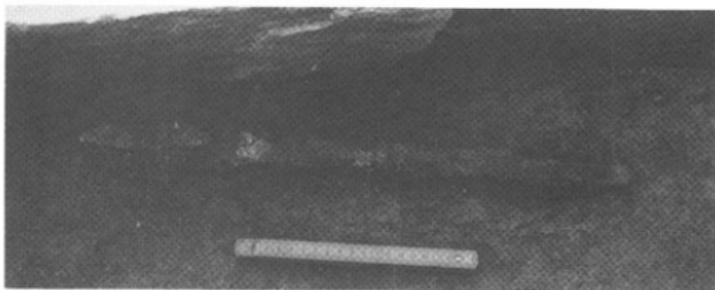
1. 第6号墳中心主体蓋石出土状況（北から）



2. 第6号墳中心主体棺床面出土状況（北から）



3. 第6号墳中心主体棺身部出土状況（北から）



4. 第6号墳中心主体直刀出土状況



1. 第7号墳調査前外観（北東から）



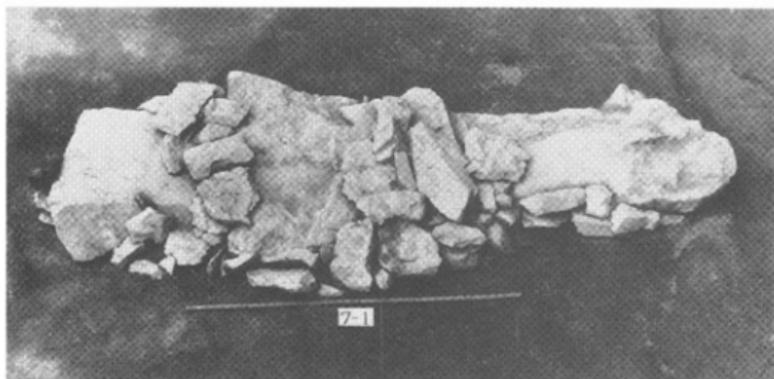
2. 第7号墳内部主体配置状況（北東から）



1. 第7号墳各主体棺身部出土状況 (南西から)



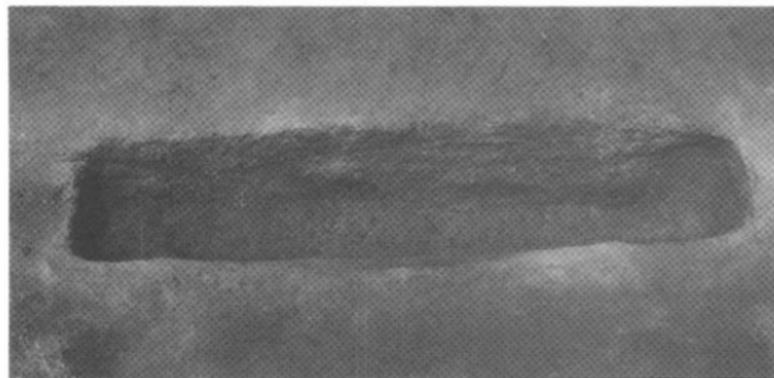
2. 第7号墳各主体基壇出土状況 (南西から)



1. 第7号墳第1主体出土状況（北東から）



2. 第7号墳第1主体蓋石目張り石材除去後出土状況（南西から）



3. 第7号墳第1主体棺身部墓壇出土状況（北東から）